

VIEW21

〈ビュー21〉
高校版
Volume 6

2016
February

2月

垣根を超えて 教育をデザインする

特集

有機的に結び付ける これからの教育活動

新課程 指導最前線

県独自のCAN-DOリストで
学ぶ喜びのある英語教育を
——兵庫県教育委員会の取り組み

指導変革の軌跡

茨城県立 取手第一高校
愛知県立 江南高校

半歩未来を考える教育オピニオン

保護者との連携に向け
学校の情報をオープンに

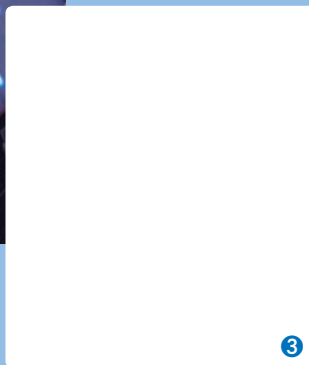
① 生徒たちは、新星班や夜空班、SS班などの班に分かれ、グループ単位で活動している。先輩の研究テーマを引き継ぎながら、新たに出てきた疑問や謎の解明にも取り組むことで、研究内容を年々進化させていく。



天体観測をする度に 星や宇宙をもっと知りたい という気持ちが強くなる



②③ 現3年生の1人が1年生の時にほとんど独力で作ったというプラネタリウム。学校祭での上映の他、小学生を主な対象とした上映会を定期的に開いている。



④ プラネタリウム公開の準備や運営を担うのは1年生。生徒たちが自分で台本を書いたり、ソフトを使って映像を流すためのプログラミングを行い、光の調節をしたりする。それらの作業の過程で、天文学の知識や理解を深めていく。



大好きな宇宙に関することから 難しいテーマにも挑戦できる

愛知県立一宮高校地学部では、天文学分野の研究活動を行っている。「世界初」の発見の実績もある実力を持った部のため、入部制限をしなくてはならないほどの人気だ。新入生向けの部活動の説明会では、先輩たちは自作のポスターを使いながら、自らの研究テーマを熱く語る。その姿に、「難しそうだけれど何だかすごい」と心を動かされ、入部を希望する新入生も多い。そして彼らもまた、活動が続けるうちに天文学の魅力にのめり込む。難しいテーマに自ら進んで取り組み、様々な天文現象の謎に迫ろうとする地学部の生徒たちの姿を追った。

まだ見ぬ発見を信じ、 仲間と共に はるかなる宇宙を旅する



⑥ 夏と秋の合宿では、岐阜県の高山で天体観測を行う。満天の星と、数え切れないほどの流れ星を目にした時、生徒の誰もが言葉にならない感動で胸がいっぱいになる。この合宿に参加したいがために、入部を希望する生徒も少なくない。



⑦ 屋上に設置した高高度発光現象の観測装置。使わなくなった天体望遠鏡用の三脚と、水槽を組み合わせて作られている。このように、観測機器の中には、生徒の手作りによるものが数多くある。

垣根を超えて
教育をデザインする

◎今号の特集のテーマは、「カリキュラム・マネジメント」の視点を踏まえた、今後求められる教育活動全体のデザインのあり方です。それは、教育課程の改善ということだけではなく、学校の組織改革でもあります。教科、学年、年齢、役職、学校内外……と、様々な垣根を超えて教育活動全体をデザインする学校組織への変革が、今後ますます求められることになりそうです。

『VIEW21』高校版
編集長 柏木崇

2 チカラ アワセテ

「生徒のために!」という思いを軸に、より良く変わり続ける学校をつくる
埼玉県・さいたま市立大宮北高校 進路指導部◎西本義人、佐々木秀一

4 特集

有機的に結び付ける
これからの教育活動

- 6 課題整理 教育活動全体を考える上で求められる
「カリキュラム・マネジメント」の確立
- 8 実践事例1 課題設定能力の育成を柱にした探究学習を全学科で推進
福井県立若狭高校
- 12 実践事例2 地元との「倉敷町衆プロジェクト」で21世紀型能力を育む
岡山県立倉敷南高校
- 16 実録・校内検討会 「総合的な学習の時間」を検証し、
学ぶ力を更に育む取り組みへ改善する
岩手県立花巻北高校

22 ハートをこがせ!

愛知県立一宮高校 地学部 星と宇宙に魅せられて未知の課題にとことん取り組む

24 新課程 指導最前線

県独自の CAN-DOリストで学ぶ喜びのある英語教育を
——兵庫県教育委員会の取り組み

30 指導変革の軌跡

茨城県立取手第一高校

生徒の実態把握◎生徒の志望実現に向け、客観データを使った学習・進路指導を徹底

愛知県立江南高校

進学実績向上◎基礎学力の定着と学習意欲の向上を図り、過去最高の進学実績に

38 改良! 指導ツール ビフォーアフター

2年生春休み前(3年生0学期) 学習点検シート

42 半歩未来を考える教育オピニオン

保護者との連携に向け学校の情報をオープンに

一般社団法人全国高等学校PTA連合会会長 佐野元彦

46 未来をつくる大学の研究室

免疫記憶の研究を通して免疫異常による疾患の治療法を追究

千葉大大学院 医学研究院 中山俊憲研究室

50 VIEW'S REPORT

「一般財団法人 進学基準研究機構 (CEES)」第1回記念シンポジウム開催

グローバル人材育成に向けたこれからの高大接続のあり方を考える

「広島創生イノベーションスクール」プロジェクト

地方創生のプロジェクト学習を通して課題発見・解決学習と異文化間協働を推進

60 Reader's VIEW

<http://berd.benesse.jp> 本誌記事は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでもご覧いただけます

*本文中のプロフィールは全て取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます
*本誌記載の記事、写真の無断複写、複製および転載を禁じます



埼玉県・さいたま市立大宮北高校 進路指導部

西本義人 + 佐々木秀一

「生徒のために!」という思いを軸に、
より良く変わり続ける学校をつくるICTという「変化」を
楽しむ学校にしたい

西本 本校ではICT化が進み、電子黒板やタブレットを使う授業も増えています。職員会議も既にペーパーレスが実現しています。ICTは生徒が学力を客観的に把握し、自学自習を進めていく際にも有効です。私たち進路指導部としては、ICTを、教師、生徒が十分に活用できるよう、サポートすることが重要なテーマです。

佐々木 GTECに挑戦している生徒は、スピーキング教材に自主的に取り組むなど、ICTを上手に使っていますよね。デジタルネイティブ世代の生徒はICTへの適応力がありますから、むしろ私たちが試行錯誤を恐れないことが重要です。

西本 既に授業にICTを取り入れている先生が自身の実践を校内に共有することで、ICTに抵抗感のある先生を少しずつ変えていく仕組みをつくりたいですね。最近では、授業スタイルの転換が求められていることもあり、ICTの持つ大きな可能性に注目しています。まずは、我々教師が「変化」を楽しむことが鍵になりそうです。

同僚に影響を与える
進路指導部であり続ける

佐々木 本校の進路指導部も大きく変化しました。私が赴任した頃、本校の志望校検討は生徒本人の判断に全て任せればよいという雰囲気があり、客観データを見ながら面談を行う先生は限られていました。そのような状況を受けて、生徒一人ひとりが立てた目標を教師が把握し、後押しすることで、学校全体に学びの雰囲気をつくりましょ

西本 学校にはそれぞれの伝統、文化があります。しかし、生徒の人生を左右する進路指導については、全ての生徒が目標を実現できるように、学校全体でサポートする体制をつくるべきだと思います。私は赴任して、2学年団に所属したのですが、「Compass(※)」を使った指導経験のある教師が少なく、私はその経験があったので、佐々木先生から3学年の面談担当に駆り出されましたよね。

佐々木 進路指導室の雰囲気も随分変わりました。3年前は生徒の出入りが少なく、過去問題集も施錠された書棚に収められていました。昨年から開

教師の多様な価値観を
調和させ、学校力を高める

教科指導にだけ、野球部の顧問も務め、進路指導でも学校を引っ張る佐々木先生の唯一の欠点は、人使いが荒いこと。ただし、「生徒のために!」と仕事の頼み方が上手なので、誰も断れません。万が一、他の先生が断っても、1人でやりながら、その後、協力してくれそうな先生を見つけて、仲間に巻き込みます。

生徒のために学年や組織の枠を軽々と超える佐々木先生の姿に、私は多くを学びました。ただ、学校にはいろいろな考え方の教師が存在し、多様な個性が調和することで学校全体の力になります。佐々木先生の意をくみ、根回ししていくのが私の役目だと思っています。佐々木先生とは良いコンビなのです。



埼玉県・さいたま市立大宮北高校
西本義人 54歳
にしもと・よしと 教職歴30年。同校に赴任して3年目。進路指導主事。

*ベネッセの進研模試の結果から、生徒一人ひとりの志望校や出願校の決定をサポートするシステム。

埼玉県・さいたま市立大宮北高校

◎進学指導重点校として、隔週での土曜授業の実施、2014年度より理数科開設と、学校改革を進める。また、視聴覚室や理科関係の講義室・実験室には、80インチの電子黒板9台を、全HR教室(25教室)には、電子黒板の機能を持ったプロジェクターを配備し、授業で活用。理数科では、生徒1人に1台タブレットを支給し、タブレットを自由に利用できる自習室「ICTラーニングルーム」も設置。教員でネットワークを構築し、ICTを活用したアクティブ・ラーニングにより、創造力や論理的思考力を養うインタラクティブな教育を実践する。

◎設立 1956(昭和31)年 ◎形態 全日制/普通科・理数科/共学 ◎生徒数 1学年約320人

◎2015年度入試合格実績(現浪計)

国公立大は、茨城大、宇都宮大、群馬大、埼玉大、埼玉県立大などに15人が合格。私立大は、青山学院大、芝浦工業大、中央大、東京理科大、法政大、明治大、立教大、早稲田大などに延べ736人が合格。

◎URL <http://www.city-saitama.ed.jp/ohmiyakita-h/index.htm>



架式の棚に一式収められ、生徒が気軽に利用できる場所になりました。

西本 外から見ると学校が一気に変わったように見えるかもしれませんが、内側から見ると、変化の動きはともゆつくりとしたものです。「若い佐々木先生が、自分とは違うやり方をしている。よく見てみるとなかなか良さそうだ。だったら自分もやってみよう」。そんなふうにして変わる教師が少しずつ増えているのだと思います。

と大きく伸びる生徒が目前にいるのに、「学校はこのままでいい」と手をこまねくわけにはいきません。

西本 私は、高校は百貨店のようなもので、一人ひとりの教師はテナントだと思っています。テナントに個性は必要ですが、自校の生徒の志望特性を理解し、夢をかなえるための後押しをするという、百貨店としての使命を果たす意味では一致団結することが必要です。これからも進路指導部として、ICTの活用を始め、学校づくりのコンセプトを校内に発信して、先生方と共に新しい道を歩んでいきたいです。



変化の時代だからこそベテランの存在が大きい

私にとって西本先生は、校内で一番気軽に話せる存在です。しかも、私の言葉に対して、「それってこういうこと?」「こんなことをやりたいでしょ?」などと、ご自身の豊富な経験を基に、私の考えを別の角度から解釈し直し、具体的な行動として提示してくださいます。進路指導部はたくさん生徒、教師と接するのにも仕事ですから、西本先生と語り合うことで、自分の視野が広がるのはとてもありがたいことです。ICT活用やアクティブ・ラーニングなど、学校全体で新しい指導に取り組むべき時代だからこそ、生徒や同僚を引き付ける人柄と、人を変える影響力を持つ西本先生の存在をますます大きく感じています。



埼玉県・さいたま市立大宮北高校
佐々木秀一 40歳

ささき しゅういち 教職歴18年。同校に赴任して5年目。進路指導部。

有機的に
結び付ける

これからの教育活動

前号まで2号にわたり、「アクティブ・ラーニング」の視点でこれからの授業のあり方と、そこで求められる教師の役割について考えてきた。

今号では、視野を教育活動全体に広げ、学力の3要素を始めとする、これからの時代に求められる資質・能力を育むためには、どのように教育活動全体をデザインしていけばよいのかについて、「カリキュラム・マネジメント」の視点で考えていく。

Q. 10月号「半歩未来を考える教育オピニオン」（カリキュラム・マネジメントで「学力」が向上する）についてのご意見・ご感想をお聞かせください。

◎大谷大の荒瀬克己先生が「カリキュラム・マネジメント」の要諦として述べられた「教育内容から人事を含めた条件整備に至るまでのトータルデザインに学校全体で取り組み、必要に応じて設置者、教育委員会と話し合い、生徒にとってより良い学びの場を構築していくこと」は、非常に適切かつ重要な指摘である。また、そのために「学校の課題や弱点を組織全体で共有する」ことの必要性も指摘されている。何よりまず、「カリキュラム・マネジメント」という考え方についての教員の共通理解を図ることから始めたいと思う。（**福井県**）

◎「カリキュラム・マネジメント」の発想は参考になった。学校全体のあり方を改善していくためにも、他教科を含めて横断的な視点を教師一人ひとりが持つ必要がある。（**和歌山県**）

◎これまで、「総合的な学習の時間」を活用できなかった高校現場が、「カリキュラム・マネジメント」の発想で自校の取り組みを組み立てることが出来るかといえば、大変難しいことだと思う。地方分権、学校の自律、規制改革という大きな文脈の中で、自校の実質的な教育目標を自律的に定め、そのための経営目標を明らかにし、そして教育課程を構造化するという仕組みを理解しなければいけない。（**兵庫県**）

◎「カリキュラム・マネジメント」については、正直なところ勉強不足であり、あまり理解は出来ていないのが現状である。「アクティブ・ラーニング」や「カリキュラム・マネジメント」を推進していくためには、学校の組織や運営の見直し、評価のあり方の再考、教職員の意識改革など、数多くの課題の解決が必要だと感じた。（**沖縄県**）

出典／『VIEW21』高校版読者モニターへのアンケート結果より。アンケートは、2015年10月にウェブとファクスで実施。

本号のテーマ

今後求められる教育活動全体のデザインのあり方とは？

(学力の3要素を始めとする) これからの時代に求められる資質・能力を育むためには、各教科等の学習とともに、教科横断的な視点で学習を成り立たせていくことが課題となる。そのため、各教科等における学習の充実はもとより、教科等間のつながりを捉えた学習を進める観点から、教科等間の内容事項について、相互の関連付けや横断を図る手立てや体制を整える必要がある。[中央教育審議会 教育課程企画特別部会 論点整理(2015年8月公表)より]

次の観点での「カリキュラム・マネジメント」(*)の 確立が求められる

*生徒や地域の実情などを踏まえて、各学校が設定する教育目標を実現するために行う、学習指導要領などに基づいた教育課程の編成とその実施、評価、改善の一連のサイクルを計画的・組織的に推進すること

- ◎個々の教育活動を教育課程に位置付け、教育活動相互の関係を捉え、教育課程全体と各教科等の内容を往還させる営みを、カリキュラム・マネジメントの土台とする。特に、特別活動や総合的な学習の時間の実施に当たっては、カリキュラム・マネジメントを通じて、生徒にどのような資質・能力を育むかを明確にする。
- ◎教科等の縦割りや学年を超えて、学校全体でカリキュラム・マネジメントに取り組んでいくことが出来るよう、学校の組織及び運営についても見直しを図る。管理職のみならず全ての教職員がその必要性を理解し、日々の授業等についても、教育課程全体の中での位置付けを意識しながら取り組む。
- ◎学校内だけではなく、保護者や地域の人々等を巻き込む、「社会に開かれた教育課程」の観点も踏まえる。
- ◎それぞれの学校や地域の実態に基づき、アクティブ・ラーニングとカリキュラム・マネジメントを連動させた学校経営を展開する。
- ◎生徒や地域の現状を把握できる調査結果や各種データ等を通して、学習指導要領等に基づく教育課程の実施状況を定期的に把握することで、教育活動や組織運営の不断の見直しを図る。

*中央教育審議会 教育課程企画特別部会 論点整理(2015年8月公表)を基に編集部で作成

課題整理【P.6~7】

実践事例 1

福井県立若狭高校 わかさ 【P.8~11】

課題設定能力の育成を柱にした探究学習を全学科で推進

実践事例 2

岡山県立倉敷南高校 【P.12~15】

地元との「倉敷町衆プロジェクト」で21世紀型能力を育む

実録・ 校内検討会

岩手県立花巻北高校 【P.16~21】

「総合的な学習の時間」を検証し、学ぶ力を更に育む取り組みへ改善する

教育活動全体を考える上で求められる

「カリキュラム・マネジメント」の確立

2015年8月、中央教育審議会教育課程企画特別部会より、次期学習指導要領の検討に向けた「論点整理」が公表された。そこでは、「子供たちの姿や地域の実情等を踏まえて、各学校が設定する教育目標を
実現するために、学習指導要領等に基づきどのような教育課程を編成し、どのようにそれを実施・評価し
改善していくのか」という「カリキュラム・マネジメント」の確立の重要性が示された。

**教育改革と向き合う時、
欠くことが出来ない概念**

「論点整理」では、思考力・判断力・表現力や情意・態度について、「各教科等の文脈の中で指導される内容事項と関連付けられながら育まれていく」と述べられている。ただし、各教科等で育まれた力を、実社会の様々な場面で活用できる汎用的な能力に更に育てていくためには、総体的観点からの教育課程の構造上の工夫が必要であり、その具体例として、各教科等間の内容事項についての相互の関連付けや、教科横断的な学びを行う「総合的な学習の時間」、そして、社会参画につながる取り組みなどを

行う「特別活動」、高等学校の専門学科における「課題研究」の設定などが挙げられている。

教科学習や「総合的な学習の時間」、特別活動、更にはスーパーサイエンスハイスクール（SSH）など、それらの各教育活動は、それぞれの学校のSI（スクール・アイデンティティー）と密接に結び付き、その内容や評価方法が確立される。だが、そうした様々な活動の評価や改善の検討は個別に行うだけではなく、教育課程全体でどのような資質・能力を生徒に育成していくのかという観点から、改めてそれぞれの活動で育成する資質・能力を明確化し、教育課程の全体構造とそれぞれの活動を

有機的に組み合わせ、整理していく「カリキュラム・マネジメント」の発想が学校に求められているのだ。

**教科や学年を超えて
学校ぐるみで考える**

特別活動や「総合的な学習の時間」など、評価の仕組みづくりにおいて現場が課題と感じている教科学習以外の活動についても、「カリキュラム・マネジメント」を通じて、生徒にどのような資質・能力を育むのかを改めて明確にすることで、教科や学年の枠を超えた取り組み、そして適切な評価へと進化していく可能性が高まっていく。もちろん、各校で導入が進む「アクティブ・ラーニング」

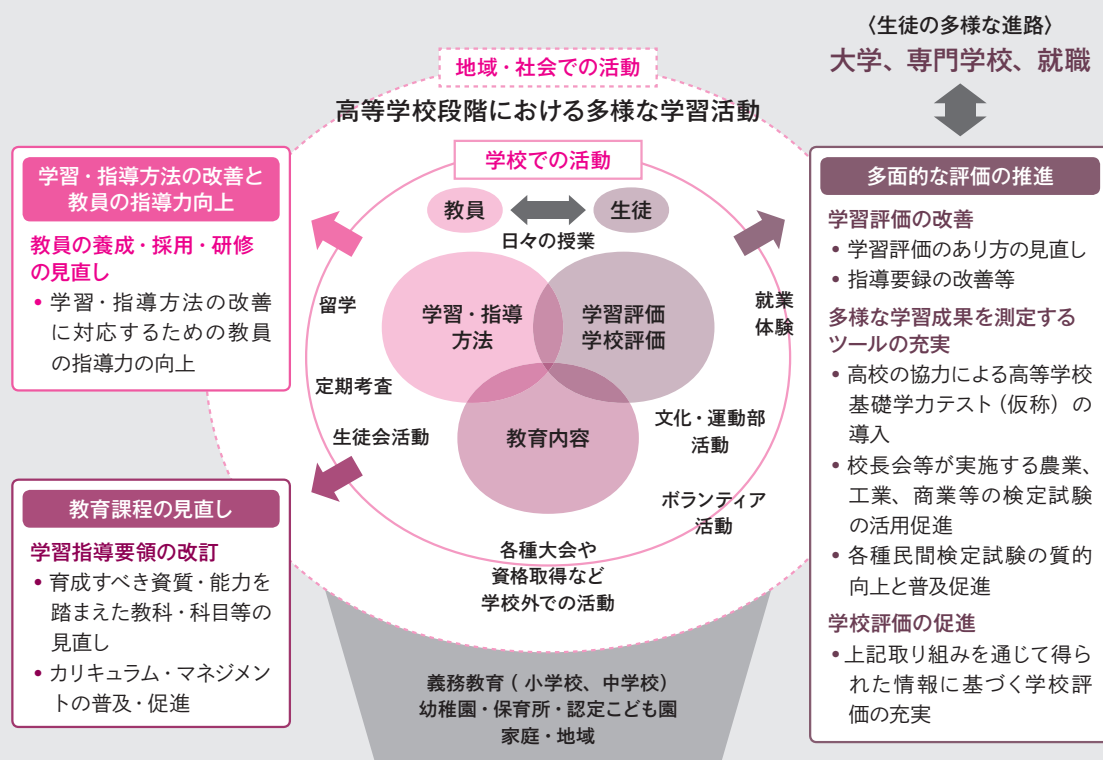
現場が感じる「多面的・総合的評価の課題」

- 特別活動の何をどのように評価していくのが、正直なところあまりイメージが出来ない。
- 特別活動を評価し、それを指導にフィードバックする経験自体が、高校にはほとんどない。
- 各種活動に応じた評価観点シートなどがあればよいのだが、作成に至っていない。
- 各行事が輪切り状態のPDCAになっており、生徒視点でのトータルな資質や能力を育成・チェックすることがあまり意識されていない。

出典／『VIEW21』高校版読者モニターへのアンケート結果より。アンケートは2015年10月にウェブとファクスで実施。

図 高等学校教育の質の確保・向上に向けた全体的な取り組みについて（案）

～ICT活用を始めとする様々な教育活動を通じ、生徒の主体的・協働的な学習の確立を目指す～



*高大接続システム改革会議「中間まとめ」（2015年9月公表）別添資料を基に編集部で作成

についても、学校や地域の特性と深くかわる以上、学年や教科の枠を超えた「カリキュラム・マネジメント」の観点からの検討も重要であろう。同時に、生徒や地域の状況を適切に把握するためには、学校ぐるみでの調査・分析も欠かせない。

そうした「カリキュラム・マネジメント」は、教育課程、学習・指導方法、評価方法の3つを校内で継続的に見直し、改善していくために必要な概念であり、全ての高校で求められるものだ（図）。また、教育活動全体の見直し・改善に向けた検討は、管理職のみならず、全ての教師、更には保護者や地域社会なども巻き込み、それぞれの視点を有機的に結び付けながら取り組む必要がある。同時に、自分の教科や分掌などにとらわれず、「学校本位」という視点で教

育活動全体を見るような学校文化を校内に根付かせることも重要だろう。

そして、「カリキュラム・マネジメント」の観点による教育課程の見直しと改善は、大学入試改革とも密接に関連している。大学入試において、「学力の3要素」を適切に評価するために、特に個別試験における多面的・総合的評価を行う仕組みづくりが各大学で進められている。その際、「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」の結果を始め、ボランティアや部活動などの活動報告書、各種大会の記録など、様々な角度から「思考力・判断力・表現力」や「主体性を持つて多様な人々と協働して学ぶ態度」を評価していくことになる。したがって、「カリキュラム・マネジメント」の確立は、生徒の未来を保証するためにも必要不可欠と言えるだろう。

次ページからは、「カリキュラム・マネジメント」を確立する上で求められる観点を踏まえた教育活動の実践として、2校の事例を紹介。更に、「カリキュラム・マネジメント」を実践していく上で不可欠な「学校ぐるみ」の雰囲気や校内に醸成しながら、「総合的な学習の時間」の改善に臨む高校の校内検討会の模様を紹介する。

課題設定能力の育成を柱にした 探究学習を全学科で推進

文部科学省「スーパーサイエンスハイスクール（SSH）」の指定校である福井県立若狭高校は、理数探究科を中心に、全学科で探究学習を推進している。科学的な思考力や表現力などの向上を目指して、課題設定能力の育成を柱に据え、評価基準を設定したパフォーマンス評価を行い、指導改善に生かしている。2016年度からは、海外の高校と連携したプロジェクト学習もスタートさせる計画だ。

学校設定教科として 系統的に探究学習を展開

福井県立若狭高校は、2011年度、文部科学省「スーパーサイエンスハイスクール（SSH）」の指定を受け、理数科（当時。12年度に文理探究科に再編）を中心に探究学習に取り組んできた。現在は、そこで培った指導ノウハウを基に、普通科、文理探究科（2年生以降は国際探究科・理数探究科に分かれる）、海洋科学科の全学科で探究学習を推進している。学校設定教科「探究科学」を設け、その下に各学科の特性に応じた内容

の学校設定科目を配置し、系統的なカリキュラムを編成している。探究学習の目標も、学科の特性に応じてそれぞれ設定。SSHの取り組みの中心を担う理数探究科の目標は、科学技術の分野で活躍する人材の育成だ。そして、国際探究科及び普通科では、基礎的な研究手法を学び、科学技術への理解や関心を深めることを狙いとし、海洋科学科では、海洋分野の専門家の育成に重点を置く。SSHでの探究学習の進め方と共に、それらが他の教育活動とどのように結び付いているのかを見ていく。文理探究科では、1年次に学校設

定科目「基礎科学A」を設け、「探究実験」と「探究論文」に取り組む。

「探究実験」では、主に実験を通して、基礎的な研究の手法と探究の姿勢を身に付ける。指導では、他科目の内容と関連付けることを意識する。例えば、前期には、「物理基礎」の「運動」の単元で学んだ知識が必要となる「歩行中の人体の運動解析」を探究テーマとして提示。生徒は、グループ単位でテーマをより具体化し、仮説を立て、実験方法を立案し、実験、考察、発表を行う。それらを通して探究の流れやスキルを身に付けた上で、後期には地域を探究テーマとし

た課題研究で実践力を養う。

一方、「探究論文」では、前期は、ブレインストーミングやKJ法などの発想法を学び、新聞記事や社説の読み比べにより、メディアリテラシーを身に付けた上で、原子力発電所の利用の是非をテーマにした2000字程度の論文を作成する。地元の若狭湾には原子力発電所が集中しており、生徒の関心が高いからだ。後期は、科学技術と関連のある社会問題について自分でテーマを設定し、6000字程度の論文を作成する。その過程では、関連書籍の輪読会や意見交換会を実施し、グループで考



中村和浩 なかむら・かずひろ
福井県立若狭高校
教職歴29年。同校に赴任して9年目。
SSH・研究部部長。理科「立ち止まらず、挑戦し続ける」



小坂康之 こさか・やすゆき
福井県立若狭高校
教職歴15年。同校に赴任して3年目。
SSH・研究部。海洋科学科「適切な評価と多くの機会を与えたい」



高橋 慧 たかはし・さとし
福井県立若狭高校
教職歴6年。同校に赴任して4年目。
SSH・研究部。理科「よく遊び、よく学ぶ」



山田 繁 やまだ・しげる
福井県立若狭高校
教職歴4年。同校に赴任して5年目。
SSH・研究部。地歴公民科「国際社会で活躍する人材を育てたい」



勝山智央 かつやま・ともひろ
福井県立若狭高校
教職歴3年。同校に赴任して4年目。
SSH・研究部。理科「先輩方からよく学び、生徒以上に成長する」



花乃理子 はなき・りの
福井県立若狭高校
教職歴3年。同校に赴任して4年目。
SSH・研究部。英語科。「学び続ける人生を送る力を育みたい」



中村佐代子 なかむら・さよこ
福井県立若狭高校
教職歴2年。同校に赴任して3年目。
SSH・研究部。理科実習助手。「社会人基礎力を育み、社会へとつなぐ」

えを深めていく。

「探究実験」と「探究論文」は、互いに関連させながら進める。理科の勝山智央先生は、「探究実験」の授業でグループごとに課題設定をする際は、『探究論文』で学んだブレインストーミングやKJ法を用いて考えを広げたり、整理したりするように指導しています」と説明する。

育みたい力に基づいた評価方法を構築し、指導改善に生かす

理数探究科の2年次では、「探究科

福井県立若狭高校

◎2013年度入学生から3学科体制。教育目標は、「『異質のものに対する理解と寛容の精神』を養い、教養豊かな社会人の育成を目指す」。スーパーサイエンスハイスクール（SSH）指定校。

◎設立 1897年（明治30）年

◎形態 全日制・定時制／全日制は、普通科・文理探究科（国際探究科、理数探究科）・海洋科学科／共学

◎生徒数 1学年約330人

◎2015年度入試合格実績（現浪計）

国公立大は、金沢大、福井大、名古屋大、大阪大、神戸大、福井県立大などに99人が合格。私立大は、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ403人が合格。

◎URL <http://www.wakasa-h.ed.jp>

学Ⅰ」で本格的に探究学習に取り組む。グループごとにテーマを設定して探究学習を行う中で、同校が最も重視しているのが、「課題設定能力」の育成だ。SSH・研究部部長の中村和浩先生は次のように説明する。

「当初は、探究をしなくても結果が明らかだったり、実証が不可能だったり、探究学習に適切とは言えないテーマを設定する生徒が目立ちました。テーマ設定の過程では、科学的な思考力・判断力・表現力が問われ、

自主的な学習姿勢や他者と協働する力なども求められます。それらは、まさに本校が生徒に身に付けさせたい力です。そこで、『課題設定能力』の育成を、本校の研究の柱としました」

同校では、「課題設定能力」を「事象の背景や現状を分析し、科学的根拠をもって仮説を立て、自らが発展的、独自性のある課題を設定する能力」と定義。評価方法には、大阪教育大の八田幸恵准教授の指導を受け、生徒に論文の作成を課し、その内容を評価する、パフォーマンス評価の手法を用いることにした。「課題設定

能力」を評価する5つの観点を定め、評価規準を示したルーブリックを作成し（P.11図1）、試行した。

そのようにして、育てたい力がいっ、どのように育っているのかを形成的に評価することで、生徒の学びを明らかにし、指導やカリキュラムの改善に生かしている。課題研究担当の小坂康之先生は、評価に基づいた指導改善の具体例をこう説明する。

「多様な生物が生息する海や湖は、課題発見のための調査をする場所として最適だと考え、フィールドワークを行いました。実際、生徒は強い関心を示しましたが、例えば、物理に関する探究を希望する生徒の研究テーマは、評価規準に達するようなものはありませんでした。フィールドの魅力があり過ぎて、本来の自分の関心を見失ってしまったのです。そこで、小さな問いを1つずつクリアして、大きなテーマにつなげるという視点を重視するようにしました」

生徒は、初めから立派なテーマを設定しようとしがちだ。そこで、自分が本当に興味を持った分野の小さ

な問いを出発点にして、大きなテーマに育てていく視点を持たせるようにした。そのような問いの立て方を育てる場の1つが、大学教員や研究員などの専門家から助言を受ける「探究協働会議」（年3回）だ。

◎第1回（6月） グループごとに研究目的や手法について発表し、助言を受ける。

◎第2回（9月） 福井県立大との高次連携ポスター発表会で中間発表を行い、研究の手法や方向性について助言を受ける。

◎第3回（2月） 口頭発表やポスター発表を行い、研究全体や発表における科学的な表現について助言を受ける。

回を重ねるごとに生徒の「課題設定能力」が高まっていることは、研究ノートの記述を見ても明らかだ（図2）。

観点を絞ったルーブリックで指導の方針や内容を共有

ルーブリックは、2年生の4月に生徒に提示し、探究学習で身に付ける力を説明する。「ルーブリックで自己評価することで、生徒は、自らの進むべき目標が明確になったり、自

らの状態を把握しやすくなったりしています」と、小坂先生はルーブリックのメリットを語る。

ルーブリックによって、教師の指導の足並みもそろうようになった。

「教師間で指導の方針や内容を共有することは、以前から大きな課題でした。ルーブリックの作成後は、指導すべき点が誰の目にも明らかになりました」（勝山先生）

同校のルーブリックは、研究の「背景」「目的」「方法」に焦点を絞っている。これは、次の2つの課題に対応するためだ。1つは、生徒の研究内容が専門的になり、教師が評価するのが難しいケースがあること。もう1つは、評価で重視する観点が、「結果」だったり「過程」だったりとして、教師によって異なることだ。そこで、評価の観点を「背景」「目的」「方法」に絞ったルーブリックとし、教師全員が適正に評価できるようにした。

そうした上で、生徒の思考を広げる指導に努めている。理科実習助手の中村佐代子先生は次のように語る。「生徒が自由に考えられるよう、誘導的な質問をしないように心掛けています。答えを求める態度を見せる

生徒もいますが、考える過程を楽しむような声掛けを意識しています」生徒の意識を学校の外に向けさせることも重視している。英語科の花木乃理子先生は、「学習内容と、社会や生活とのつながりを実感すると、視野が開けたり、考えが深まったりします。そうした瞬間を持たせる指導を大切にしています」と話す。

2年生での研究成果は、3年次の学校設定科目「探究科学Ⅱ」で論文にまとめ、研究発表を行うなどして、科学的な思考力や表現力に磨きをかける。14年度のルーブリックによる評価では、生徒の15%はレベル5、67%はレベル4に位置付けられ、「課題設定能力」の向上に関してはおおむね良好であると、同校は捉えている。

地域学習を通して市民性も育む

国際探究科の3年次の地歴公民科では、学校設定科目「社会研究」を設定し、探究学習を行っている。

15年度は、若狭地域の歴史や地理について学んだ後、市内の集落を訪れ、地域おこしにかかわる人たちへの聞き取り調査などのフィールド

ワークを行った。研究成果は、京都市立大学大学院教育学研究科が運営するE・FORUM（イーフォーラム）の研究発表会で発表した。

また、この科目でも、「方法」などに重点を置いたルーブリックを作成し、生徒に提示している。地歴公民科の山田繁先生は、その狙いを語る。

「調べて発表して終わりではなく、自分の考えや行動がどう変化したかに着目するように指導しています。市民性を育てることも意識しており、活動後、自主的に地域おこしのボランティアに参加した生徒もいます」

SSHの取り組みをベースに海外高校との協働学習を開始

このような充実した探究学習を支えるのは、SSH・研究部だ。部長の中村和浩先生を含め所属する9人全員が自薦であり、フラットな関係が特徴だという。

「皆が新しい教育を創り上げる気概を持ち、アイデアを出し合っている。それぞれの役割は固定せず、イベントには総掛かりで取り組んでいます。多忙な組織ですが、目標を共有して同じベクトルで努力している

図1 「探究科学I」の評価基準とルーブリック

「課題設定能力」とは 事象の背景や現状を分析し、科学的根拠をもって仮説を立て、自らが発展的、独自性のある課題を設定する能力

「課題設定能力」を評価するための観点

- ①研究の動機 ②科学的に解決可能な問題への定式化 ③地域の問題認識の深さ
④持続可能な開発・発展に役立つものであるかどうか ⑤学びに対する自主的・主体的な態度

レベル	パフォーマンスの特徴
5 素晴らしい	地域の様々な情報を正確に収集し、問題の背景を総合的な視点で捉え、自らの課題として課題を捉えた記述がある。科学的な視点で具体的な仮説が立てられており、解決可能な手法を用いた科学的で具体的な解決方法の記述がある。地域及び学問領域において持続可能な開発・発展に役立つ課題であることが具体的に説明されている。自らの興味・関心、知識や技術を十分に把握した上で、課題を設定することへの積極性や研究活動の意義を具体的に記述している。
4 良い	地域の様々な情報を正確に収集し、問題の背景を総合的な視点で捉えた記述がある。科学的な視点で仮説が立てられており、解決可能な手法を用いた科学的な解決方法の記述がある。地域及び学問領域において持続可能な開発・発展に役立つ課題であることが説明されている。自らの興味・関心、知識や技術を十分に把握した上で、課題を設定することへの積極性や研究活動の意義を記述している。
3 合格	地域の様々な情報を収集し、問題の背景の記述がある。仮説が立てられており、解決可能な手法を用いた解決方法の記述がある。持続可能な開発・発展に役立つ課題であることが説明されている。自らの興味・関心を示し、課題を設定することへの積極性や研究活動の意義を示す記述がある。

ルーブリックは、「2 もう一步」「1 改善が必要」と続く。

*学校資料を基に編集部で作成

図2 「探究協働会議」を経た生徒の変容

生徒の状態	研究ノートに見る生徒の記述の変化
2年7月 ・教員の指導がない状態	〈目的〉伝統食品が今も食べられ続けているのは、私たちの生活や健康に対して何かしらの効果があるためだと考え、どのような効果があるのかを調べる。 〈方法〉塩ウニやへしこから有効な成分を抽出して分析を行う。ペプチド、食塩量、味。
2年9月 ・探究協働会議を1回経験 ・ルーブリックを示された後	〈目的〉伝統食品が今も食べられ続けているのは、私たちの生活や健康に対して何かしらの効果があるためだと考え、どのような効果があるのかを調べる。 〈方法〉市販品塩ウニと生ウニの熱水抽出エキスの塩分濃度、食塩添加量が15%と30%である伝統的な製造方法で熟成させた塩ウニのタンパク質濃度、ACE阻害活性をローリー法とCushmanの方法で測定した。更に熱水抽出エキスを高血圧自然発症ラット（SHR）に投与し、一定時間ごとに血圧を測定した。
2年1月 ・2回の探究協働会議を経験 ・冬休みに福井県立大の研究室で実験を経験した後	〈目的〉生鮮バフンウニに7%以上の食塩を加え熟成される塩ウニは、福井県の城主松平家が開発・製造した日本3大珍味の1つである。越前海岸周辺では、現在でも珍味や保存食としてだけでなく、滋養強壮や体質改善などに効果があるとされ製造されている。そこで、本研究では、塩ウニの健康性機能を探るために塩ウニ熱水抽出エキスの高血圧抑制効果について研究を行った。 〈方法〉生鮮バフンウニ、市販品食塩添加7%塩ウニ、伝統的製法の食塩添加15%塩ウニの、それぞれの熱水抽出エキスを調整した。熱水抽出エキスの塩分濃度、ペプチド濃度を測定し、高血圧抑制効果は、Cushmanの方法によるACE阻害活性測定と高血圧自然発症ラット（SHR）の経口投与から測定した。

太い色文字が生徒の変容を示している箇所。

*学校資料を基に編集部で作成

からこそ、やりがいが大きいく感じます」（中村和浩先生）

年2回の授業研究会や教員研修の企画・運営も担う。SSHを通して新たな教育活動に取り組むことで授業力や指導力が高まり、学力向上がもたらされると考えるからだ。

その他、県内外の高校を招き、環境やエネルギーをテーマとした研究発表やディスカッションを行う「環境・エネルギー学会」の運営もSSH・研究部が支えている。理科の高橋慧先生は、「あくまでも生徒主体で企画・運営を進め、各校の生徒が連携して提言を生み出せるように、教師はサポートに徹しています」と語る。

SSH・研究部の尽力により、16年度から「OEC D 地方創生イノベーションスクール2030」の福井クラスターへの参加が決まっている。

「環境・エネルギーをテーマに、シナガポールの高校と連携してプロジェクト学習を進める予定です。SSHの取り組みを土台として、生徒が更に探究心を深められる環境を整えていきます」（中村和浩先生）

地元との「倉敷町衆プロジェクト」で21世紀型能力を育む

岡山県立倉敷南高校は、2013年度、地域の協力の下、「倉敷町衆プロジェクト」をスタートさせた。地元・倉敷が抱える課題の発見とその解決方法を考える中で、学問への志と社会性を培い、21世紀を生き抜く力を高めるのが目的だ。プロジェクトの運営には事務職員を含めた全教職員が当たり、15年度にはルーブリックも開発して、学習過程も含めた生徒たちの評価に活用している。

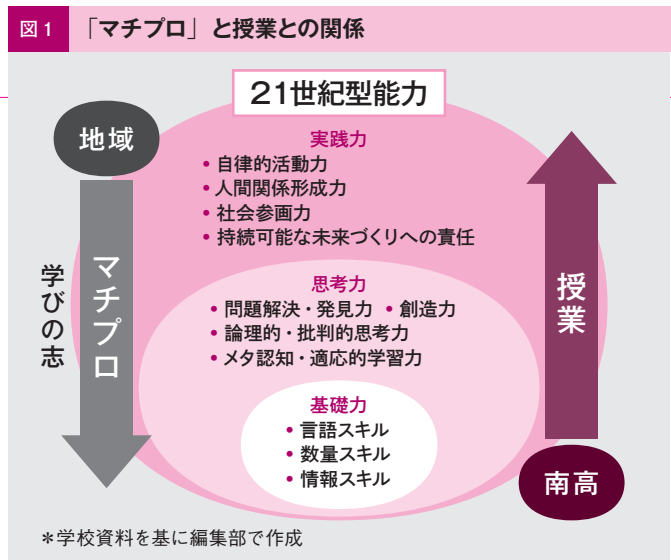
地域の課題解決に取り組み生徒の「学びの志」を育む

岡山県立倉敷南高校は、2013年度、倉敷商工会議所、大原美術館などと連携して「倉敷町衆プロジェクト」（以下、マチプロ）を立ち上げた。前任校で地域連携を推進してきた山下陽子校長が、進学校での地域連携を模索する中で、21世紀型能力（＊）を育むキャリア教育の可能性を見いだしたのが始まりだ。

「倉敷商工会議所の方々と話す中で、『イノベーション・ポテンシャルの高い倉敷』を生かせないかと考えまし

た。江戸時代に幕府の天領だった倉敷には、『町衆』（有力町人）が町の自治や文化を担ってきた歴史があります。新しいもののへの受容力や、既存の価値観を変革するエネルギーがあり、失敗を恐れずイノベーションに取り組み伝統が根付いています。そうした精神は、今、学校に求められている教育観にも合致します。現代の『町衆』の力を借りて、生徒の潜在能力を引き出そうと考えました」（山下校長）

マチプロの目標は「学びの志を高める」「グローバル・リーダーを育成する」とし、「良き市民」を育てることを主眼とした。なぜならば、グロー



＊現行の学習指導要領が目指す学力の育成に向けて国立教育政策研究所が提唱する学力モデル。



岡山県立倉敷南高校校長
山下陽子 やました・ようこ
教職歴36年。同校に赴任して4年目。「教育が社会の『自分事』になる」



岡山県立倉敷南高校
三島誠人 みしま・まこと
教職歴29年。同校に赴任して3年目。進路課長。「教員自らがアクティブに、着実に」



岡山県立倉敷南高校
絹田昌代 きぬた・まさよ
教職歴25年。同校に赴任して7年目。授業力向上委員会主任。「生徒がきらめく授業で力と自信を付ける」



岡山県立倉敷南高校
景山晴光 かげやま・はるみつ
教職歴15年。同校に赴任して6年目。キャリア教育支援室長。「グローバル」の種は10年後に花が咲く

岡山県立倉敷南高校

- ◎校訓は「自律・友愛・進取」。2007年度に進学重視型単位制高校に移行。15年度に「キャリア教育優良教育委員会、学校及びPTA団体等文部科学大臣表彰」を受賞。
- ◎設立 1974（昭和49）年
- ◎形態 全日制／普通科／共学
- ◎生徒数 1学年約320人
- ◎2015年度入試合格実績（現浪計）
国公立大は、東北大、名古屋大、大阪大、神戸大、岡山大、九州大、岡山県立大などに203人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ453人が合格。
- ◎URL <http://www.kuramha.okayama-c.ed.jp/>

との交流も開始。「倉敷から世界を考える」をテーマに掲げ、「グローバル町衆育成プロジェクト」が始動した。

21世紀型能力を育むために、同校ではマチプロと授業との関係を図1のように位置付けている。アクティブ・ラーニング主体の授業を通して基礎力や思考力などを鍛える一方、マチプロの活動では、基礎力・思考力・実践力を総合的に高めながら「学びの志」を育み、日々の授業や進路選択に前向きに取り組む意欲・態度を育む。教師も、マチプロの指導を通して、同校が目指す生徒像をより深く理解し、日々の授業改善に反映させていく。

生徒が少し「背伸び」して取り組める課題を提示

マチプロの内容と成果を見ていく。1年次では、「総合的な学習の時間」を活用し、倉敷が抱える課題とその解決策を提言する。7月に、生徒9人が1人の「町衆」を囲んで進学や仕事について語り合う「ラーニングカフェ」か、市内の企業などを訪れ、仕事内容や課題などを聞く「フィー

ルドワーク」を行う。どちらに参加するのは、学級内で検討して決める。そして、そこで得た課題意識を基に、夏休みに調査・研究をグループごとに進め、9月の文化祭で、調査・研究結果をポスターセッション形式で発表する。あるグループは、「子育てが楽しい」と感じている市民が約3割にとどまっている現状に課題意識を持ち、楽しみながら子育てが出来る新しい託児サービスを提案した。

2年次では、学校設定科目「キャリアA」で、1年次のマチプロで得た学びを発展させた課題研究を行う。まず、生徒の進路や関心に応じて社会科学・人文科学・教育学・自然科学などの系統に学級横断で分かれ（4月）、グループまたは個人で研究テーマを決定する（6月）。そして、ポスターセッション形式での研究発表を行い（11月）、最終的に800字程度の小論文にまとめる（1月）。

各グループの指導は学年を超えて行う。教師1人当たり3〜4グループを担当し、テーマ設定から調査・分析、発表まで支援する。特に、ファ

シリテーターとしての教師の力量が問われるのがテーマ設定だという。

「キャリア教育は広義のアクティブ・ラーニングであり、教師がアクティブでなければ、質の高いアクティブ・ラーニングは出来ません。自分の専門分野で話題になっていること、社会で起きていることなどに、教師が常にアンテナを張り、それを生徒の興味・関心につなげていく。生徒が少し背伸びして出来るくらいの選択肢を提示できるかどうか、教師の腕の見せどころです」（山下校長）

教育分野を担当した絹田昌代先生は、漠然と「現在の教育」をテーマに挙げたグループにキーワードとして「21世紀型教育」を示した。すると、生徒たちは研究を主体的に進め、うち1人が研究内容を基に志望理由書を書き、国立大の推薦入試に挑戦した。

「生徒が自分で発見したと思えるように、さりげなくヒントを与えるのがポイントです。私たち教師は、生徒の様子を常に観察し、適切なタイミングで適切な声掛けが出来なければいけません」（絹田先生）

町衆からの根拠ある批評が 生徒を鍛える

2年次でのポスターセッションでは、1年生の他に「町衆」や保護者も参加し、見学者に積極的な参加を求める。事前に「甘口」または「辛口」と書かれたくじを引き、「甘口」を引いた人は、発表内容の優れた部分を褒める役割を、「辛口」を引いた人は、不十分な点や疑問点を根拠をもって批評する役割を担う。そのため、発表内容は、「研究動機・目的」「調査結果」「未来への提言・そのメリット」「感想」の4項目で統一し、見学者が発表内容をすぐ把握できるようにしている。「町衆」からは「本当に調べたのか」「実現性はあるのか」といった鋭い批評が投げ掛けられると、絹田先生は言う。

「より良いものをつくるためには、根拠を示して、批評し合うことが大切です。辛口の批評を受けることで、核心を深く考えることの大切さ、情報を正確に伝えることの難しさを、生徒は実感したのではないだろうか」

3年次のマチプロは、9月の文化祭で行うブロック対抗のディベート

大会だ。15年度は「憲法九条」「原発」などをディベートのテーマとした。

15年度に始めたカンボジア研修では、志望理由書、面接によって、学年を問わず生徒4人を選抜。5泊7日の日程で現地の高校や大学、企業などを訪問し、倉敷の文化を紹介した。キャリア教育支援室長の景山晴光先生は次のように述べる。

「現地の高校生から英語で次々と質問され、生徒が答えに詰まる姿も見られましたが、途中で腹をくくったのでしよう。次第にコミュニケーションが取れるようになりました。帰国後、参加者は研修での体験を文化祭で発表しました。そうした体験談が友人や後輩に伝わっていく中で、海外交流などへのハードルが低くなることを期待しています」

独自のループリックで 目指す生徒像を教師間で共有

同校では、独自にループリックを開発し、マチプロで育んだ力を21世紀型能力に沿って評価している(図2)。評価項目は、21世紀型能力に応じて、3領域15項目を設定。年2回(4月、12月)、生徒各自で自己評価する。

最大の特徴は、全項目をマチプロを始めとする教育活動の様々な場面を想定して設定している点だ。例えば、「A 言語的リテラシーレベル3/他のチームの発表に対し、根拠のある批評を言う」は2年次のポスターセッションを、「D 批判的・論理的思考力レベル3/自分と相手の意見の違いを理解し、異なる理由や根拠を探ろうとしている」は3年次のディベート大会を想定している。

「これを見れば、『1年次のポスターセッションではレベル2だったけれど、来年はレベル3を目指して頑張ろう』というように、生徒は具体的に目標を設定できます」(絹田先生)

15年7月に行った1回目の自己評価では、高学年になるほど全ての項目の数値が高くなるという結果が出た。21世紀型能力が順調に育まれており、ループリックによる評価が有効であることが実証された。

ループリックによって、マチプロを通して目指す生徒像を教師間で共有できるようになったことも大きいと、進路課長の三島誠人先生は語る。

「教師が『町衆』や大学・企業に協力を依頼する際、取り組みの狙いや

伸ばしたい力を具体的に伝えられるようになりました。教師の社会性を高めていくことも、キャリア教育には欠かせない視点だと思っています」

目指す生徒像を具体的に持つことは、アクティブ・ラーニングを導入した授業改善にも必要になると、山下校長は指摘する。

「生徒にどのような力を求めるのかを、教師自身が自覚しなければ、授業で生徒に身に付けさせたい力を明確にしたり、アクティブ・ラーニングで適切な発問や支援を行ったり出来ません。教科ごとに新しい学力観に沿ったループリックを作ろうという動きも出始めており、授業改善が一層進むことを期待しています」

ループリックの結果を基に 次年度の学校経営計画を策定

ループリックは、推薦・AO入試の指導にも変化をもたらした。生徒が志望理由書をまとめる際、担任は生徒が記入したループリックや1・2年次で作成したポスターなどを見ながら、「ループリックを見ると、この分野が得意のようだけれど、どうして得意になったと思う?」といった

図2 「グローバル町衆育成プロジェクト 21世紀型能力 ルーブリック」(抜粋)

(1) 次のA～O(注)の項目について、あなたが現在到達していると考えられるレベル段階に大きな○をつけてください。下記の記入欄にそれぞれのレベルを数字で書き込んでください。(どれにも当てはまらないと思う項目については、「1」をマークしてください。)

	基礎力(思考力を支える)									思考力(中核)		
	A 言語的リテラシー			B 数量的リテラシー			C 情報リテラシー			D 批判的・論理的思考力		
	読む・話す・書くといった理解・表現にかかわる力			数量的な情報を理解し、効果的に活用する力			ICTを活用して効果的に活用する力			根拠を検討し、他の解釈や情報を分析する力		
レベル1	発表の際、原稿を読んで伝える。			グラフを見てデータのおよその特徴を理解する。			コンピューターを使って文章を入力する。			相手の意見を最後まで聞く。		
レベル2	発表の際、聞き手の目を見ながら伝える。他のチームの発表に感想を言う。			グラフを見てデータの特徴を正確に理解する。			コンピューターを使って文章を入力する。図や写真を貼り付ける。			自分と相手の意見の違いを理解する。		
レベル3	相手の反応を見ながら、適切な言葉遣いで伝える。他のチームの発表に対し、根拠のある批評を言う。			グラフを見てデータの特徴を正確に理解し、発表の際にその資料(統計・図表・グラフ)を用いる。			コンピューターを使って資料を作成したり、データをグラフ化したりする。			自分と相手の意見の違いを理解し、異なる理由や根拠を探ろうとしている。		
レベル4	適切な言葉遣いで説得力のあるプレゼンテーションになっており、質問にもよどみなく答える。他のチームの発表に対し、根拠のある批評を言う。			発表の際に主張の根拠となる資料(統計・図表・グラフ)を用いる。また、引用する際には著作権に配慮する。			主張を効果的に伝えるために、グラフ作成や色彩・文字のレイアウトが思い通りに出来る。			根拠を検討したり、他の解釈や情報を分析したりして、見解が異なる理由を説明する。		
レベル5	巧みな話術(ジェスチャー・声の表現・アイコンタクト)によって内容を伝え、聞き手の質問に対して当意即妙の受け答えが出来る。他のチームの発表に根拠のある批評をし納得させる。			主張の根拠となる効果的な資料を用いており、それを正確に分析することによって、相手に主張が強く支持される。また、引用する際には著作権に配慮する。			主張を効果的に伝えるため、グラフを作成し色彩や文字のレイアウトなど高いクオリティーの資料ができ、評価されている。			異なる見解を認めたり、他の視点の情報を論理的に分析したりしている。更に、根拠に基づいた多角的な視点で探求している。		
自己評価記入欄	1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年
	春											
	冬											

(2) 評価レベルの「4」「5」を選んだ生徒は、その項目の能力や価値を伸ばしたと考える活動を下から選んでそれぞれ番号で答えてください。(3つまで複数回答可)

1 授業(教科名) 2 週末課題 3 定期考査 4 実力考査 5 進路志望調査 6 個人面談 7 M-PRIDE手帳の利用 8 ラーニングカフェ
9 フィールドワーク 10 キャリア課題研究 11 キャリア講演会 12 ポスターセッション発表会 13 読書 14 ボランティア活動 15 南楠合宿
16 修学旅行 17 部活動 18 生徒会・委員会活動 19 オープンキャンパス 20 京大・阪大バスツアー 21 難関大学指導対策チーム
22 輩岡セミナー@大原美術館 23 輩岡祭 24 留学体験 25 ディベート大会 26 その他(具体的な活動を記入)

(3) (3年次・冬に記入) 上記A～Oの能力及びスキル・体得している価値観のうち1つを選んで、それを伸ばしたと考える学校生活の印象的な場面について具体的に記述してください。

*学校資料を基に編集部で作成

ように、生徒の学びの軌跡を確認しながら指導するようになった。同校では、M-PRIDE手帳(生徒手帳)に進路ノートの要素を盛り込み、進路行事の予定や感想、教師や「町衆」からのアドバイスを書き込めるようにしている。その手帳を併用することで、生徒はより緻密な志望理由書を書けるようになった。

「志望理由書や推薦書では、生徒の活動実績や能力を具体的な言葉にしなければいけません。生徒も教師もそれを表現する力が不足していました。ルーブリックの文言を組み合わせた。ルーブリックの文言を組み合わせることにより、若手教師でも生徒の力を十分に表現できるようになりました。これを足掛かりにして、先生方には自分の言葉で指導できるようスキルアップを図っていただきたいと考えています」(三島先生)

マチプロを通して21世紀型能力の育成と地域連携を実現させた倉敷南高校。学校を挙げて本音で議論してきたところに成功の要因があると、山下校長は分析する。

「教師全員が課題研究の指導に当た

るのはもちろん、ルーブリックは管理職と各分掌・学年主任による委員会で作成しました。思い切った授業改善を行う体育・芸術・家庭科、生徒手帳を改良した生徒課、予算確保に尽力した事務室まで、組織全体が有機的に機能することが、取り組みの実効性を高めていると思います」

16年2月には、次年度の学校経営計画を策定するワークショップを全職員で実施する予定だ。ルーブリックを基に現状を分析して、課題を共有し、次年度の経営計画を策定する。

今後の課題は、取り組みの更なる精緻化と定着である。

「この3年間でマチプロの枠組みが出来ましたが、本質を見失うと取り組みは形骸化し、かえって教育の阻害要因になるかもしれません。大切なのは、“know how”ではなく、“know why”です。生徒の実情に応じて進路行事やルーブリックの内容を不断に改善すると共に、全ての教師・生徒が取り組みの意義・目的を理解し、主体的にかかわっていく意識づくりに努めたいと考えています」(山下校長)

(注) 同校のルーブリックでは、「基礎力(思考力を支える)」「思考力(中核)」「実践力(思考力の使い方を方向付ける)」の3領域とし、図の項目以外に、「E 問題発見力」「F 問題解決力」「G 創造力」「H チームワーク」「I メタ認知」「J キャリア設計力」「K 自律的活動力」など、全15項目を設定している。

生徒の興味・関心に基づいた自由研究を実施

岩手県立花巻北高校では、2015年度、全学年において「総合的な学習の時間」（以下、総合学習）を「自由研究」を軸に展開することとした。個別大学における入学者選抜が多面的・総合的評価による方法に変わる中で、「変化する社会を生き抜くたくましさ」を身に付けさせたい」「生徒が推薦入試やAO入試で自己を語れる題材となるような取り組みを盛り込みたい」「そのためには、総合学習で探究型の活動を行ってはどうか」といった声が校内で高まっていた。

「総合的な学習の時間」を検証し、学ぶ力を更に育む取り組みへ改善する

岩手県立花巻北高校

学校が生徒の特性や志望進路に合った教育活動を展開するために、生徒の実態を踏まえた教育課程の編成とその実施、そしてそれらを評価・検証するカリキュラム・マネジメントをどう実践していくのか。2015年度に「総合的な学習の時間」で新たに探究型の活動を導入した岩手県立花巻北高校で行われた、「次年度に向けた活動の振り返り」から考える。

そこで同校では、14年度後半より

総学検討委員会を立ち上げ、他校の事例の分析を重ねた。委員会の中で、重要なキーワードとして浮かび上がったのが、「自由」だ。教師があらかじめ研究テーマを設定したり、生徒に所定のカテゴリーの中から研究テーマを選ばせたりせずに、生徒が自分の興味・関心に基づいて自由にテーマを設定できるようにしたのだ。「自由研究」とした背景には、生徒の主体的な活動を促す狙いと、取り組みにおける教師の多忙感を軽減す

る配慮もあった。他校の事例を研究する中で、教師が多忙感や負担感を持ったり、特定の教師に業務が集中したりすると、取り組みが継続しにくいことが分かったからだ。

自分が知らないことを教えるのは準備に時間が掛かり、負担になる。そこで、「研究は生徒に任せて、教師はアドバイザーに徹する」という方針が委員会で共有され、教師の得意や興味・関心を一覧化して生徒に提示はするが、それはあくまで生徒のテーマ設定のヒントにとどめ、生徒は個人またはグループで自由に研究テーマを決めて、半年～1年間の研究に取り組むこととなった。

岩手県立花巻北高校

◎「黒橋魂」と「桜雲臺精神」を受け継ぎ、文武両道をモットーとする。弓道部やアーチェリー部など、全国レベルで活躍する部も多い。言語活動を重視した対話型授業を研究するなど、アクティブ・ラーニングを推進。授業に関する生徒の提言、要望に基づいた授業改善にも積極的に取り組む。

◎設立 1931（昭和6）年

◎形態 全日制／普通科／共学

◎生徒数 1学年約240人

◎2015年度入試合格実績（現役のみ）

国公立大は、弘前大、岩手大、山形大、東北大、福島大、筑波大、岩手県立大などに165人が合格。私立大は、慶應義塾大、中央大、東京理科大、日本大、法政大、早稲田大などに延べ184人が合格。

◎URL <http://www2.iwate-ed.jp/hkn-h/>

研究の自由を保証し、モチベーションを維持させる

研究成果以上に 学び方の獲得を重視

——振り返りではなく、「自由」を根幹に据えた探究型の活動の成果を語り合った。

川村 生徒が興味・関心に基づいて自由に研究テーマを設定するスタイル



岩手県立花巻北高校副校長
川村 俊彦 かむら・としひこ
教職歴31年。同校に赴任して1年目。「知識ではなく、学ぶ意欲と態度が生徒の将来をつくる」



岩手県立花巻北高校
熊谷 道仁 くまがい・みちひと
教職歴25年。同校に赴任して4年目。教務主任。「学び続け、考え抜き、やってみる。自分の高校時代を忘れない」



岩手県立花巻北高校
及川 智春 おいかわ・ともはる
教職歴18年。同校に赴任して1年目。1学年担任。「世界の広さを自ら測ろうとする人間を育てたい」



岩手県立花巻北高校
木村 総司 きむら・そうし
教職歴16年。同校に赴任して7年目。進路指導主事。「人とのやりとりを大切にする教師でありたい」

ルは、次年度も続けたいです。自由研究の目標は、「高いレベルの研究成果」ではなく、「学び方を学ぶ」ことにあると最初に決めましたよね。研究成果に重きを置きすぎると、教師が指導できるものの中から研究テーマを選ばせ、教え込むといった構図になり、結果的に生徒の主體的な学びはあまり育たず、教師の負担感も増してしまいます。知識の伝達作業にとどまらず、大学や社会でも役立つ「学び方」を学ぶためには、我々教師が「私も分からない」と正直に言い、生徒に「君はどう思う?」「まずはやってみたら?」と、学びを任せることが今後大切だと思います。

熊谷 理想は、生徒が自由に発想し、教師は見守るという状態です。教えることが使命である私たちには、まさに発想の転換が必要でしたが、生徒の研究に対する取り組み方は前向きだったと思います。取り組みを始めるに当たって、私は『VIEW21』

図1 2015年度「総合的な学習の時間」高校生の『自由研究』～学び方を学ぶ～

●目標

- ①社会における諸課題を的確に捉え、問題解決能力を身に付けること。＜前に踏み出す力＞の育成
- ②主体的・協同（協働）的に学ぶ姿勢を確立すること。＜チームで働く力＞の育成
- ③自分の興味・関心がある分野を研究・追究、「得意」を見いだし、自らの言葉で表現できること。＜考え抜く力＞の育成

●調査研究テーマ設定時の留意事項

- ・1年での完結型とするが、3年間、あるいは2年生から3年生までの2年間同じ内容を研究し、深化させることも出来る。
- ・3年生は、大学で学びたいことを中心に研究を深めるとよい。
- ・小学校の時に取り組んだ「自由研究」の高校生版と考える。
- ・「これだったら、飽きずに徹底して調べられる」具体的なテーマを探す。
- ・完璧な内容に仕上げようと思う必要はない。まずはとことんやってみよう。

●教師の役割

本校の全ての教師が、自分の得意に基づいて助言する。（指導はしない）

●生徒

グループ（4人程度）での研究を原則とするが、1人での研究も可。

●企画

総学検討委員会（8人）が企画・準備し、主担当者が進める。

*学校資料を基に編集部で作成

●活動の流れ

5月 本校の全教師が自己申告した「得意、興味・関心リスト」（P.19 図2）を参考に、生徒は各教室に待機した教師に相談をしながら、個人またはグループで自由研究のテーマを検討する。（2日間実施）

6月 担任に研究テーマを提出。総学検討委員長が各グループまたは個人に助言を行う教師を振り当てる。

6月 自由研究スタート。総合的な学習の時間では、図書館所蔵の文献とグループ内1台のスマートフォンを利用した調査を行う。休日や長期休業を活用してフィールドワークや実験などを行う。

12月 グループごとに研究成果を所定の用紙にまとめて提出。

1月 総学検討委員会によって選考された研究グループまたは個人が発表。優秀研究の表彰。

2月 自由研究の発表要旨を掲載した冊子を作成。

高校版2015年4月号の特集を何

回も読みました。特に、京都大の松下佳代先生の「『探究テーマ』学術研究的なテーマ」とらわれない「テーマが自由になるほど、探究のプロセスが重要」という言葉は、生徒の自由を活動の根幹に据える上で支えになりました。実際、生徒は自分でテーマを決めたからこそ、研究のモチベーションを保てたのだと思います。

木村 研究成果を見ても、生徒は分らないこと、知りたいことを時間を掛けて調べたことが分かりますね。安易な「コピペ」もとても少なかったです。そもそも、答えが簡単には分らないような研究テーマを設定したので、万が一、コピペしようとしたとしても出来なかったでしょう。

「もっと頑張りたい」を総合学習の文化にしたい

及川 生徒の自由を尊重した分、研究テーマを考える時間をたくさん取ったのは良かったと思います。私たちが作成した得意、興味・関心の一覧(図2)を参考に、いろいろな先生やクラスメートと対話を続けながら、自分の研究テーマ(図3)を

考えたのが、そのままモチベーションの向上につながったのでしょうか。

熊谷 もちろん、中には「自由研究なんてやりたくない」と思っていた生徒はいたでしょう。ただ、どの教科でも、「こんな勉強、やりたくない」といった生徒は、少数であっても存在するものです。そうした現実を目を向けずに、もれなく全員を一生懸命取り組みせようとすると、学校全体が疲弊してしまうことを、教員間でスタート時に共通認識できていたことも良かったと思います。

木村 もちろん、自由研究という活動に価値を見いだせない生徒を見捨てるといってわけではなく、他の生徒の充実した様子を目にして、「自分も、もっと頑張れたかもしれない」と悔しい思いをさせることで、次の学びへとつなげていきたいです。その意味では、3学期に行われる優秀研究の発表が重要ですね。

川村 優秀研究の発表で、同じ学校の仲間が素晴らしい活動をしたことを知って、「来年はもっと頑張ってみよう」と思う生徒がたくさん出てきた時に、「学び方を学ぶ」活動が学校の文化になるはずですよ。

2015年度「総合的な学習の時間」振り返り——改善したいこと① 生徒の自由度を更に高めるために担当制の廃止を検討

自由研究では生徒が教師を凌駕する

——続いて、今年度の取り組みで課題だと感じた点を自由に述べ合った。そこで上がったのは、「自由研究」にかかわる教師の姿勢だった。

及川 生徒は「自由」な研究を楽しんだ一方で、私たち教師は「指導ではない」「正解を教えるわけではない」といった立場にまだなじめていなかったように思います。「生徒の研究が進むように適切な指導をしなれば」と悩んでいる同僚もいました。今回の総合学習の枠組みをつかった委員の1人として、「教師はあくまでアドバイザーでよいのですよ」と説明はしましたが、それでも「生徒の一步先に立って、導かなければいけない」といった考えから脱却することは容易ではなかったようです。

熊谷 今年度、本校では推薦・AO入試でも例年以上の成果が出ました。そこで先日、推薦・AO入試合格者に、総合学習での経験が入試のどのような

なところで生きたかを聞いたところ、

「志望理由書作成や面接の際に自由研究のエピソードを盛り込んだ」「面接などで自由研究について紹介することとはなかったけれど、様々な知識を関連付けて話すことが出来たという点では、自由研究の経験が生きたと思う」などと、自由研究の成果を挙げる生徒が大半でした(生徒たちの声はP.20参照)。しかし一方で、「自由研究が進むと、先生よりも自分たちの方がテーマについて詳しくなるので、担当の先生は決めないでほしい」「担当の先生がいると、他の先生に意見を聞きに行きにくい」といった声も上がりました。

及川 「他の先生に相談に行きにくい」とは、我々は随分生徒に気を使わせていたのです。生徒の「先生よりも自分たちの方が理解が進む」という意見は、「生徒よりも一歩先んじておかなければいけない」と悩む教師の声とは、実に対照的です。生徒の自由度を更に高めることが、生徒、教師双方の悩みを打開するこ

図2 教師の「得意・興味・関心リスト」

先生	専門教科	「得意・興味関心のあること」			
川村俊彦	理科	何でもOK			
1	英語	子どもに関する経験	異文化問題	世界遺産	
1	英語	水泳	家庭菜園	トレイルラン	食べ歩き
1	英語	山菜	バイク	釣り	エスプレッソ
1	英語	英語	アメリカ文化		
1	公民	教育法・教育制度	日本国憲法	ゲーム理論	書籍から読み取る青年小説
1	及川智香	国語	英語	写真とカメラ	幕末・明治維新 中島みゆき
1	国語	国語	国語	国語	国語

教師の得意、興味・関心を一覧化したものを参考に、生徒は教師にアドバイスをもらいながら研究テーマを固めていった。川村副校長が「何でもOK」と申告したのは、「どんなテーマでも生徒と一緒に考え、学び方をアドバイスする」という教師のスタンスを同僚に伝えるためだ。

*学校資料を編集部が一部改編

とつながるかもしれません。

川村 教師の得意、興味・関心リストを作成するところまでは今年度通りにしたとしても、それをどう生かすかは生徒に任せてみましょうか。生徒の自由度をもっと高めることを考えてみたいですね。

2015年度「総合的な学習の時間」振り返り——改善したいこと②

校外学習の時間の確保を学校の責任で行う

「推奨」だけでは

生徒への責任転嫁である

振り返りは「自由研究」の内容にかかわる校外学習にも及んだ。生徒が興味・関心に基づいて研究テーマを決める場合、校外に知見を求める可能性が高くなる。だが、今年度、校外学習に取り組む時間的余裕が生徒になかったという声が上がった。

及川 教師は助言者に徹するべきだという考えはその通りですが、教師が指導しない分、生徒には必要に応じて校外にも出掛け、専門家に話を聞くなどしてもらいたかったですね。委員会として、校外調査やインタビューのために、アポイントメントの取り方や文献調査の方法などをまとめた説明書を作成しましたが、期待したほどは校外学習に臨む生徒は現れませんでした。図書館やインターネットで調べるのもよいのですが、実物、本物に触れる機会をもっとつ

くってほしいです。ただ、教科学習や部活動、学校行事で忙しい生徒たちには、「外に出掛けてほしい」と教師が願うだけでは駄目なのだと実感もしています。生徒が外に出掛ける時間を確保できる仕組みを学校としてつくりたいと、責任を生徒に押し付けるだけになってしまいます。

川村 実際に足を運ぶのは生徒だけでなく、出掛けることが出来る環境をつくるのは教師の役目です。校外研究日の設定と、そのための課外授業や部活動などとの調整が必要ですね。**熊谷** 生徒へのヒアリングでは、「野球部の夏の大会の応援が終わった後など、生徒全員がそろっていて、なおかつ空いた時間に、博物館などに

学校全体を考える姿勢を一人ひとりの教師が持つ

木村 研究の自由を高めるほど、生

図3 生徒の自由研究のテーマ例

総合的な学習の時間【自由研究テーマ】
「笑い」の研究
「笑い」の研究
「笑い」の研究
BGMがもたらす効果
BGMがもたらす効果
BGMがもたらす効果
BGMがもたらす効果
BGMがもたらす効果
BGMがもたらす効果
B T B 溶液は、なぜ色が変わるのか
SNSが社会へ与える影響
SNSが社会へ与える影響
SNSが社会へ与える影響
SNSが社会へ与える影響
SNSが社会へ与える影響
アジアの中の日本として、私たちができることは何か
アジアの中の日本として、私たちができることは何か
アジアの中の日本として、私たちができることは何か
足腰について
あまのじゃくと神々について

生徒は、個人あるいはグループで自由研究のテーマを設定。教科学習と密接につながったテーマから、高校生の日常の興味と関係の深いテーマまで内容は様々。

*学校資料を編集部が一部改編

徒が校外に出掛けるための時間を学校として保証することは必要だと思います。ただ、生徒に必要な時間を足し算すると、時間は明らかに足りなくなってしまう。何を重視する代わりに何を減らすのか、今から3月下旬まで時間を掛けて話し合っていかなければいけませんね。**熊谷** 教科学習、部活動、学校行事……、どの教育活動も重要です。だからこそ、今の本校には何が重要な

2015年度「総合的な学習の時間」に 対する生徒の声 (抜粋)

- レポート作成などを通して、様々な知識をどのようにまとめていけばよいか分かった。
- 総合学習での取り組みを、推薦・AO入試の面接で話すことが出来た。
- 市の図書館や保健センターなどに行って調べることで、勉強は学校の中だけでは終わらないことが分かった。
- 調べていくうちにどんどん新しい疑問が生まれて、結果的にたくさんの本を手にするようになった。総合学習での経験を通して、調べ方、まとめ方を学べた。
- 海外研修での興味をそのまま終わらせず、更に深めることが出来たのが良かった。
- 専門的に調べていくほど、研究テーマについて担当の先生よりも自分の方が詳しくなる。他の先生にアドバイスをもらいたい時もあるので、担当の先生は決めないでほしい。
- 興味のあることを調べるのにはもっと時間が必要。今年度は半年だったけれど、出来れば1年くらい研究期間がほしい。
- 自分が調べている内容について、担当の先生から専門的な指導をしてほしいとは思わない。ただ、「ここにはこんな資料がある」などと、調べ方についてサポートしてくれるとありがたい。

*3年生の生徒の声を基に編集部で作成

のかを議論し、議論がまとまらなければ少し時間を置いて冷静になり、「学校として」という大局的な思考・判断も必要です。場合によっては、全員の賛成を待たずに見切り発車することもあるでしょう。その分、取り組みの評価と改善についてしっかりと議論の場をつくりたいですね。

川村 結局、教師の視点が「学校全体」や「生徒」になく、「自分」にある限りは、自分の持ち時間にいつまでも固執してしまいます。「自分の教科」「自分の部活動」といった狭い視点で意見を言うのは恥ずかしいと感じるような雰囲気や学校に醸成することは、遠回りのようですが、前向きな議論が出来る学校づくりに欠かせません(コラム参照)。

木村 本校は文化祭、体育祭はとも盛り上がりますが、この期間中、課題などを出す先生はほとんどいません。これも、学校行事に集中した方が、その後の高校生活に良い影響があると、「生徒本位」で考えることが出来ているからです。私は、更に一歩進めて、「学校行事期間中の課題禁止」を教師のルールとして明文化してもよいと思っています。自由研

究と同様に、生徒を信じるべき時は生徒に全てを任せた方が、生徒は教

「総合的な学習の時間」2016年度の設計に向けて

走りながら改善するために育てたい生徒像を語り続ける

生徒の自由度を高めれば 抜本的な改革も可能に

——総合学習は3学期に優秀研究の発表と研究成果の冊子化を行い、引き続き、2年目へと移行する。休む間もなく継続する教育活動を、言わば「走りながら改善する」のは容易ではない。だが、同校の教師は既に大きな改善を視野に置いている。

川村 生徒へのヒアリングでは、「研究の期間は半年では短い」という声もありましたね。例えば、1年生に

対しては、研究の進め方のレクチャーや学年ごとの博物館見学などを実施しながら、半年ほど掛けてじっくりと研究テーマを検討させ、本格的な研究は秋から1年間掛けて取り組むのも一案だと思います。そして、2年生の秋に振り返りを行い、更に研究を続けるか、別の研究テーマに変更するかを考えるとというサイクルに

師の信頼感を意気に感じ、学校として一丸になれると思います。

してもよいのではないのでしょうか。そうすれば、3年生の後半までしっかり総合学習に取り組めます。生徒の自由度を高めた研究であれば、学年をまたいでも大丈夫なはずですが、それくらい大きな枠組みの見直しも今からならば可能でしょう。

木村 秋から1年間のサイクルであれば、春休みの期間も研究に使えますね。これは生徒にとって大きなメリットになります。

及川 総合学習の改善は確かに大掛かりですが、だからこそ一息置いたりせずに、生徒や教師がリアルな課題意識を持つているうちに、「次年度はどうするか」を考え始めたいものです。まさに、「走りながら、変えていく」発想です。改善しなければいけないことが分かっているうちに話し合いをスタートさせることで、改善の先送りを防ぐことも出来ると思います。



熊谷 「学び方を学ぶ」という目標についての検証も続けたいです。今年度は、基本的には生徒の研究レポートを基に担当教師が評価する予定ですが、一番気になるのは、どのような評価をすれば、1・2年生の「次年度の活動へのモチベーション」が高まるかです。生徒の要望が多ければ、A・B・Cなどの段階評価を取り入れてもよいでしょう。ただ、そうした評価以上に、教師一人ひとりが授

COLUMN

働きやすい職場づくりが「学校本位」の価値観をつくる

花巻北高校の特徴の1つが、職場づくりの目線合わせの徹底だ。2014年度に、熊谷先生が同僚から「働いていて困っていること」「こうすればもっと働きやすくなると思うこと」を聞き取りした。すると、「職員室では携帯電話を使わないでほしい」「ゴミは自分の責任で確実に処分してほしい」「外部からの電話にはもっと丁寧に対応すべき」など、様々な声が上がってきた。

「全員が快適に過ごすためには、ルールの明確化と目線合わせが必要だったのに、それが出来ていなかったのです。全員がストレスから解放されれば、落ち着いた気持ちで校務に取り組めると考え、15年度最初の職員会議で、ヒアリングした内容を全員に伝えました」(熊谷先生)

川村副校長は、「教師故に、授業以外のことには気が回らないところもある」と話す。

「教師も社会人であり、より良い職場環境をつくる責任がそれぞれにあります。それを自覚することで、自分の教科、自分の部活動といった狭い視野から学校全体を捉えた広い視点での思考に次第に変わっていくはずです」(川村副校長)

業などで「君の研究の観点で、この事象を考えてみたらどうなる?」などと、総合学習の成果を日々の授業や進路選択に取り込む声掛けが出来るかどうかが重要だと思います。生徒の成果物を、生徒同士、そして教師が共有できる仕組みづくりも委員会などで議論したいですね。また、生徒や学校について語り合う土壌づくりも継続したいと思います。本校では、14年9月に、川村副校長の発案で、「どんな生徒を育てたいか」を全教師がグループで語り合う校内研

修を実施しました。印象的だったのは、「型にはまらない生徒を育てたい」という声がとてもたくさん出たことです。
木村 そうでしたね。だからこそ、多くの先生が「でも実際には、自分たち教師が生徒を型にはめているよね」と日々の指導を振り返っている点で見直す良い機会でしたし、これも「自分本位」ではない、「学校本位」「生徒本位」の教育観を浸透させる取り組みの1つだと思いました。

川村 地域の期待を担っている進学校として、本当に生徒を伸ばすことが出来ているのか、私たち教師は全員、良い意味での危機感を持っています。だからこそ、その危機感をカリキュラムなどの具体的な改善へと結び付けるためにも、3年間掛けてどんな生徒を育てたいのか、教師全員で話し合うことが大切だと思うのです。3学期中には、教科別に「どんな生徒を育てたいか」について話し合う校内研修を行う予定ですが、総合学習だけでなく、各教科の指導についてもまさに「走りながら、大胆に改革する」意識が必要だと思います。
熊谷 目の前に生徒がいることを意識すれば、もっと良い活動にしようという優先順位を割り切り、スピーディーに合意形成できます。時間を置いて改まった場を設けると、議論のための議論になり、紛糾しがちです。走り続ける中で、課題を見つけたら迅速に話し合い、手を打っていく組織でありたいですね。

ハートも
こがせ!

Vol.06

愛知県立一宮高校
地学部

星と宇宙に魅せられて 未知の課題に とことん取り組む

難しいテーマほど 結果が出た時の喜びは格別

愛知県立一宮高校地学部では、23人の部員が研究テーマごとに4つの班に分かれて、天文学分野の研究活動を行っている。

部長の堀さんが所属しているのは、皆既月食や木星の衛星の相互食など、太陽系で起きる天文現象を研究するSS班。特に興味を持って研究しているのが、皆既月食の際に月の一部分が青みがかって見えるターコイズ・フリッジと呼ばれる現象だ。

「この現象はNASAが最初に発表したのですが、オゾン層の影響によって起きるといふ以上の説明がありませんでした。そこで、詳しいメカニズムを自分で探ろうと思ったのです。現在は月食の時にSS班で撮影した映像を基に、この現象が起きるプロセスを解析しています。原因が分からないことに取り組むのはとても大変ですが、その

分、結果が出た時の達成感は格別です」

新星班の井上さんも「難しいことを解明できた時の喜び」が研究を行う上での原動力となっている。新星班ではここ数年、いるか座新星を観測。新星の質量の予測や、新星爆発によって生成される元素の検出などに取り組んできた。

「今年度からは新星の表面温度についても調べています。私も今ではかなり新星について詳しくなりましたが、1年生の頃は先輩たちが話していることが全く理解できませんでした。それでも頑張れたのは、大好きな宇宙に関することだったからなのだと思います」

自分たちの研究の成果を いかに分かりやすく伝えるか

夜空班では、照明などで夜空が明るくなることによる、天体観測や動植物の生態系に及ぼす影響、「光害」を研究。人工光がホタルの活動に与える影

教師の思い

まず本物を見せることで
生徒の知的好奇心を
喚起させる



愛知県立一宮高校
高村裕三朗
たかむら・ゆうざぶろう
教職歴35年。同校に赴任して16年目。
地学部顧問。数学科。

天の川を見た感動が 研究に向かう原動力になる

生徒たちの多くは、入部時、星や宇宙に興味はあっても、都市部の夜空しか見たことがありません。そこで、本物の星空を知ってもらうために、夏休みに岐阜県の高山で合宿を行っています。夜空にきらめく天の川とたくさん流れ星を目にした時、誰もが圧倒され感動します。1年生の生徒たちが、本当の意味で星と宇宙の素晴らしさを知り、「地学部の部員」になるのはその時からです。本物に対する感動と、もともと本物を知りたいという知的好奇心が、生徒を研究に向かわせる原動力となります。

天文学の良いところは、アマチュア天文家による新発見がしばしばあることです。本校の地学部の生徒も2004年、世界で



夜空班が夜空の明るさを測定する時に使用している機器。街灯の光まで拾ってしまうことが課題であったため、相澤さんは、余計な光を遮るための木製のフードを作製。写真のように、それを機器に装着することで、正確な測定が可能になった。夜空班では、このフードを光害の研究をしている他校にも配りたいと考えている。

響を調べたり、全国の高校などと連携して全国の「夜空の明るさマップ」を作成したりしている。

「夜空班では、高校生や研究者を対象とした光害に関する研究会などで、年に5〜6回は発表をしています。参加者の方が私の話に熱心に耳を傾け、『よく分かった、面白かった』と言ってくださった時が一番励みになります。研究では成果を上げることでも大事ですが、その成果を相手に理解してもらえらるように、伝える力を磨くことも同じくらい大事だと思います」（相澤さん）

「伝えることの難しさ」と大切さを感じているのは、1年生の河合さんと同じだ。地学部では、自作のプラネタリウムを用いて、小学生を対象に定期的に一般公開を行っている。その運営を担うの

は1年生。河合さんも普段は新星班に所属しているが、公開前はプラネタリウム班として活動する。

「私の担当は台本作り。紹介する星座や惑星について調べた上で台本を練るのですが、難しいのは、小学生が興味を持てる内容や理解できる表現にすることです。子どもたちがプラネタリウムに夢中になっている姿を見た時はすごくうれしいです」

部員たちの星や宇宙への飽くなき関心は、「大学で天体観測機器の開発に携わりたくて、苦手な物理にもちゃんと向き合うようになった」というように、学習への取り組みや進路選択にも影響を与えている。はるかなる宇宙という難題にも果敢に挑戦できる生徒たちだからこそ、目の前の高校生活にも妥協せずに向き合うことが出来るのだ。

堀裕一 ほり・ゆういち

2年生。地学部部長。SS班に所属。ターコイズ・プリンジのメカニズムの解明に取り組む。

井上円 いのうえ・まどか

2年生。新星班に所属。いるか座新星の表面温度や質量、生成される元素などを研究。

相澤里佳 あいざわ・りか

2年生。夜空班に所属。夜空の明るさの測定や、光害が生態系に与える影響などについて研究。

河合春奈 かわい・はるな

1年生。普段は新星班に所属しているが、プラネタリウム公開前はプラネタリウム班として台本の作成を担当。

初めてペルセウス座流星群の月面衝突発光の観測に成功しました。高校生がこれほどまでの活躍が出来るのは、他の自然科学の分野ではそうないことです。

ホワイトボードを使ってみんなで議論する

まだ答えが見つかっていない課題に取り組む時に、地学部では、ホワイトボードに図や絵を描きながら、みんなで議論します。そして仮説を立て、研究を進めていきます。そうした経験は、将来大学で研究活動をする時にも必ず役立つはず。だから私は、毎年3月に卒業生を送り出す時に、「ここでやってきたことは確かな力になっているから、君たちは自信を持っていよいよ」といつも話しているのです。

愛知県立一宮高校

- ◎毎年国公立大に多くの合格者を出している愛知県内有数の進学校。現在3度目のスーパーサイエンスハイスクール（SSH）の指定（2017年度までの5年間）を受けており、科学技術系人材の育成に力を注いでいる。
- ◎設立 1919（大正8）年
- ◎形態 全日制（普通科、ファッション創造科）、定時制（普通科）／共学
- ◎生徒数 1学年約360人
- ◎2015年度入試合格実績（現役のみ）
- 国公立大は、北海道大、東北大、東京大、一橋大、名古屋大、京都大、大阪大、名古屋市立大などに199人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大学、早稲田大、南山大、同志社大、立命館大などに延べ358人が合格。
- ◎URL <http://www.ichinomiya-h.ac.jp/>

県独自のCAN-DOリストで 学ぶ喜びのある英語教育を ——兵庫県教育委員会の取り組み

実社会はもちろん、大学入試においても実践的な英語力が求められる近年、多くの自治体が独自のCAN-DOリストを策定し、県下の高校に活用を奨励している。

そうした中、兵庫県では、2014年度、県教育委員会が主導して独自のCAN-DOリストを作成し、全県への波及を目指している。

今号では、その作成委員の教師に、作成時の工夫や留意点、リスト活用の意義などを聞いた。

「生徒の夢」を後押しする リストの作成を目指して

——「兵庫版基本CAN-DOリスト」(P.27図1) 作成の経緯を教えてください。

桂 2012年度に始まった文部科学省「英語力を強化する指導改善の取組」において、本県では5つの県立高校を拠点校に指定し、2年間、CAN-DOリストを活用した授業改善を進めました。その取り組みで各校が上げた成果を県下に広げようと、「兵庫版基本CAN-DOリスト」(以下、基本CAN-DOリスト)の作成が企画されたのです。14年5月に、東京外国語大の根岸雅史^{まさし}教授を委員長とする構想委員会を立ち上げ、5つの拠点校で取り組みを主導してきた先生方による作成委員会を結成し、基本CAN-DOリストを作成しました。15年3月に公開し、それを基に各校の実情に応じたCAN-DOリストの作成を進めています。

——作成に当たってどのような点に留意されましたか。

桂 県内の全ての高校で活用でき

る汎用性を持たせることです。拠点校事業で各校が作成したCAN-DOリストは、学校によって到達目標も形式も異なります。「兵庫版」では、生徒の進路が多様な学校から大学進学者が多い学校まで、あらゆる高校が生徒の実情に応じた学習到達目標を設定できるように、4技能ごとに12の到達目標を細かく設定しました。また、出来るだけ多くの生徒が「学ぶ喜び」を味わい、学習意欲を高めるために、上から下に行くにつれて難易度が上がるように配列し、各ディスクリプタ(「〜することが出来る」という能力記述文)は、生徒が英語に触れる場面を幅広く想定したものにしています。

もう1つこだわったのは、英語教育に対する生徒の期待を盛り込むことです。生徒自身がどのような力を身に付けたいのか、英語を使って何をしたいのか。そうした「生徒の夢」の実現を後押しするリストであるべきだという根岸教授の指摘を受け、県教委では県立高校生1万4727人にアンケートを実施しました。調査の結果、生徒

兵庫版

基本CAN-DOリスト

作成委員会メンバー

兵庫県・私立滝川中学・高校

越前伸也 えちぜん・しんや
CAN-DOリスト作成委員会委員長



教職歴36年。同校に赴任して1年目。留学支援センター長。元・兵庫県立宝塚西高校校長。兵庫県高等学校教育研究会英語部会長。

兵庫県立芦屋国際中等教育学校

杉本嘉良すぎもと・よしお
CAN-DOリスト作成委員会副委員長



教職歴36年。同校に赴任して3年目。3学年主任。リストでは、「聞くこと」を担当。

兵庫県立明石城西高校

大倉健三おおくら・けんぞう



教職歴27年。同校に赴任して7年目。SGH準備委員長。3学年担任。リストでは、「書くこと」を担当。

兵庫県立姫路東高校

河岡佳子かわおか・けいこ



教職歴27年。同校に赴任して2年目。2年次副主任。リストでは、「読むこと」を担当。

兵庫県立龍野高校

篠原友妃亜しのはら・ゆきあ



教職歴16年。同校に赴任して3年目。3学年担任。リストでは、「話すこと」を担当。

兵庫県立明石西高校

西崎善久にしざき・よしひさ



教職歴34年。同校に赴任して3年目。2学年担任。リストでは、「文化理解」を担当。

兵庫県立武庫荘総合高校

柳瀬学やなせ・まなぶ



教職歴25年。同校に赴任して1年目。2学年担任。リストでは、「論理的思考力」を担当。

兵庫県立網干高校

山田義夫やまだ・よしお



教職歴32年。同校に赴任して4年目。進路指導部長。リストでは、「読むこと」を担当。

兵庫県教育委員会事務局

桂敦子かつら・あつこ



教職歴22年。高校教育課主任指導主事。

は、英語で音楽を聞く、歌うなどの

評価の対象にならない活動が好

きなことや、将来仕事をする上で

英語力が必要だという意識が強い

ことが分かりました。作成委員に

は、アンケートの結果を出来る限

り基本CAN-DOリストに反映す

るように意識してもらいました。

作成に当たっては、技能ごとに

担当者を決め、各自で素案を作り、

ディスクリプタの文言や並び方は

妥当か、生徒に分かりやすい表現

になっているかを委員会全体で検

討し、精度の高い内容となるよう

に心掛けました。

幅広い学力層に応じた ディスクリプタの作成

——基本CAN-DOリスト作成で 留意された点をお聞かせください。

山田 私は「読むこと」を担当し

ました。最も難しかったのは、あ

らゆる学力層の生徒が使えるディ

スクリプタを設定することです。

私が勤務してきたのは専門高校

や生徒の進路が多様な学校が多

く、英語の得意な生徒を想定した

グレード設定や活用場面があまり

イメージできませんでした。委員

会に参加し、大学進学者が多い学

校の先生や専門家の方から様々な

知識や情報を得ることで、高校教

育で求められる英語表現の幅の広

さを知ることが出来ました。

篠原 私は、「話すこと」を担当し

ましたが、私もディスクリプタの

グレード設定が課題でした。どう

しても自分の指導経験に基づいて

グレードを考えてしまうため、他

の委員の先生と見解の違いが生じ

ることが少なくありませんでした。

例えば、私は電話でのコミュニケー

ションをそれほど難しいと考えま

せんでしたが、相手の顔が見えな

いので難易度は高いという指摘が

ありました。委員会での確なアド

バイスがあったことで、発表とや

りとりといった2つの場面をバラ

ンスよく配置し、かつグレードが

上がるほど即興性が求められる実

践的なリストが出来たと思います。

桂 グレードの妥当性の検証も、

委員会の課題の1つでした。基本

CAN-DOリストの素案が出来た

段階で、県立高校8校の教員62人

と生徒約900人にアンケートを

実施しました。先生方にディスクリプタを別々に示し、それぞれ自身が考えるグレード順に並べ替えて、その理由も回答してもらいました。生徒には、各ディスクリプタの達成度を4段階で自己評価させ、集計結果を根岸教授に分析していただき、グレードの妥当性を確認した上で公表しました。

教師目線に陥らない 分かりやすい表現が重要

——ディスクリプタの文言や表現で苦労された点がありますか。

河岡 私は、山田先生と一緒に「読むこと」を担当しました。当初作成したディスクリプタは、スキヤニングやオープンエンドといった教師目線の表現が多く、高校生に分かる表現にした方がよいとの指摘を受けました。また、授業中に行う活動と、日常的に生徒が英語に触れる場面が混在しており、整理が必要でした。ディスクリプタの文言やグレード設定は本来に難しく、今でも基本CANDORリストを見ると、つい表現や難易度をチェックしてしまいます。

生徒の達成感と教師の 指導力の向上に期待

大倉 私も、ディスクリプタの文言には苦労しました。私は「書くこと」を担当しましたが、当初、主語や動詞などの文法用語を多用してしまい、先生方から「もっと具体的な場面に即した文言にすべき」との指摘を受けました。一口に「書くこと」といっても、論文か、手紙か、仕事のメールかによって違いますし、それぞれの難易度の設定にも悩みました。文法の正確さ以前に、本当に伝えたいことがあるのかも大切です。特に、グレードの高い項目では、自分の感情やアイデア、体験を踏まえた文章が書けるかどうかにこだわりました。

——基本CANDORリストの作成を通して、授業やCANDORリストの活用に対して、ご自身の意識の変化がありましたか。

杉本 私は、「聞くこと」を担当しました。委員会に入った当初は、私自身、CANDORリストの必要性に懐疑的でした。しかし、基本CANDORリストを作成していく

うちに、その考えは変わりました。生徒は、ネイティブスピーカーの流暢な英語と比べて、「自分は英語が出来ない」と消極的な気持ちになることが少なくありません。しかし、CANDORリストがあれば、生徒はディスクリプタを見ながら、「これが出てくるようになった」と自身の成長を実感し、英語を学ぶことが楽しく感じられるようになると考えを改めました。かつての私のようにCANDORリストに懐疑的な先生がいるのであれば、そうした先生方に働き掛けていくことも、私たちの使命だと考えています。

大倉 私は拠点校事業の際に、GTEC for STUDENTSを参考にしてCANDORリストを作成しました。その時は、リストの意義を深く理解しておらず、本来に必要なのかと疑問に思ったこともあります。しかし、今回、ディスクリプタを作るうちに、生徒自身の成長が見えるのは良いことだと感じ始めました。私も授業では活動を多く取り入れており、それなりに盛り上がるのですが、しばしば「やりっぱなし」になってし

まうことがありました。生徒の力を伸ばす授業になっているかを検証するためにも、CANDORリストは有効だと実感しています。

4技能のベースとなる 意欲・思考力・文化理解

——基本CANDORリストでは、4技能に加えて、意欲や思考力、文化理解を3領域として設定しています。どのような意図があったのでしょうか。

桂 兵庫県の第2期「ひょうご教育創造プラン」で示した目指すべき人間像や培うべき力を育成するために、4技能に加えて、「関心・意欲・態度」「論理的思考力」「文化理解」の3領域を「英語学習を支える3領域チェックリスト」(P. 29図2)として設定しました。当初はこれもグレード化する予定でしたが、学びへの姿勢や文化理解に対する受容の仕方は人それぞれなので、順位付けは難しいということで見送りました。3領域については、自分は何れに当てはまるのかを生徒自身が確認し、その項目を増やしていく使い方にしました。

図1 「兵庫版基本 CAN-DO リスト」(抜粋)

	聞くこと	話すこと	読むこと	書くこと
1	・ ゆっくり話されたら、“Stand up” “Sit down” “Come here” という短い指示を理解することができる。 ・ 日常生活の身近な単語を聞いて、意味を理解することができる。 ・ 簡単なあいさつの言葉を取り取ることができる。	・ 日常生活の身近な単語を発音することができる。[発表] ・ 簡単な質問に対して Yes/No を使って、答えることができる。[やりとり] ・ 教室でよく使われる “Stand up” “Sit down” “I’m fine.” などの簡単な表現ができる。[やりとり]	・ ブロック体で書かれたアルファベットを正しく認識することができる。 ・ 日常生活の身近な単語の意味を理解することができる。 ・ 日常生活の身近な単語で書かれた短い英文の内容を理解することができる。	・ アルファベットの太文字、小文字をブロック体で書くことができる。 ・ 簡単な単語・語句・短い文を正確に写すことができる。 ・ 日常生活の身近な単語や数字(1～10)を正確に書くことができる。
2	・ ゆっくり話されたら、数字・曜日・季節などの情報を正確に聞き取ることができる。 ・ ゆっくり話されたら、授業でよく使われる指示を理解することができる。 ・ ゆっくり話されたら、ALT の自己紹介を理解することができる。	・ 簡単な自己紹介(氏名、学年、学校、家族、住所など)をすることができる。[発表] ・ 日常生活の簡単なあいさつや数字、日付、季節、天気を伝えることができる。[やりとり] ・ 相手の言っていることがわからない時に、繰り返ししてわかりやすく話してもらうよう頼むことができる。[やりとり]	・ 簡単な地図を見て○○ station, △△ hospital, ×× store などを探すことができる。 ・ すでに習った単語で書かれた短い英文の内容を理解することができる。 ・ 絵や写真つきのファストフード店のメニューを理解することができる。	・ 曜日や月名、数字(2ケタ)を正確に書くことができる。 ・ 身近な事柄や情報に関して、語句を並べて短いメモを書くことができる。 ・ 自己紹介カードに氏名、学年、学校、家族、住所などを記入することができる。
9	・ 自然なスピードで話されても、日常生活での会話を理解することができる。 ・ 海外のニュース(BBC・CNN など)を聞いて、映像を参考にすると、内容を部分的に理解することができる。 ・ 映画やテレビドラマの会話の流れを理解することができる。	・ パワーポイントなどを用いて身近な社会問題についてプレゼンテーションをすることができる。[発表] ・ 電話で相手と会う約束をすることができる。[やりとり] ・ 身近な社会問題について、準備をした上で、簡単な議論をすることができる。[やりとり]	・ 社会的な問題に関する連続した複数の段落から構成される英文を読み、各段落の内容を理解し、英文の流れを把握することができる。 ・ 日本の英字新聞(The Japan Times/The Japan News など)で身近なテーマや興味のある内容の短い記事を80%以上理解することができる。 ・ 概要や要点を把握するために流し読みをしたり、自分が欲しい情報を拾いながら目的に応じて読むことができる。	・ 時間の流れに従って、旅行記、自分史、身近なエピソードなどを書くことができる。 ・ いくつかのParagraphを使い、流れが分かる文章を書くことができる。 ・ 日本や自分が住んでいる地域の伝統文化を詳しく紹介する文章を書くことができる。

リストは4技能についてそれぞれ12段階で示している。*兵庫県教育委員会からの提供資料を一部抜粋して編集部で作成

柳瀬 私は3領域の中の「論理的思考力」を担当しました。私がこの領域に興味を持ったのは、そもそも4技能の本質について疑問があったからです。例えば、スピーキングでは、流暢さと正確さが大切だと言われていますが、「1分間当たりの発話語数が多い」「正しい文法で話すことが出来る」といった結果だけで、本当にスピーキング力が付いたと言えるのでしょうか。人によっては、発話は流暢でも中身がない場合があります。表現の質を高めていくためには、4技能を磨くと同時に、その土台となる論理的思考力を鍛えることが大切です。「自分の考えをまとめる力」「他者の考えを理解する力」の2本柱を設定し、生徒が自己評価する上で意識化できるように文言の作成を目指しました。

西崎 私の担当は、「文化理解」です。英語教育では「異文化理解」とすることが多いと思いますが、単に外国文化の知識を増やすだけではなく、日本との相違や類似性を意識した上でコミュニケーションを図ることが大切であるという

観点から、「文化理解」と呼ぶことになりました。

当初、チェックリストを考えるのが面白く、たくさん作って委員会に提示したのですが、「表現が同じ」「文言があいまい」といった理由で削除され、作成の途中で行き詰まってしまうこともありました。「ひょうご教育創造プラン」と学習指導要領を土台に考えるよう先生方からアドバイスをもらい、「理解するための視点」と「情報の収集と伝達の視点」の2つを縦軸に、創造プラン・指導要領を横軸として集約することが出来ました。

3年間掛けて 全教師に研修を実施

——全校にCAN-DOリストを配布後、県下の先生方の意識に変化は見られているのでしょうか。

桂 15年9月に、各校独自のCAN-DOリストの作成状況を調査したところ、ほぼ全ての学校が作成に着手していました。また、県教委では、15年8月から3年間を掛けて、県立高校の全ての英語科教員を対象に、基本CAN-DOリス

トの活用とアクティブ・ラーニングの視点を取り入れた研修会を行う予定です。その中で、各校がどのようにCAN-DORリストを活用し、成果を上げているのかを具体的に把握したいと考えています。

篠原 学校現場に、基本CAN-DORリストが浸透しているのを感じます。研修に行くと、若手教員から「今、本校のCAN-DORリストを作っているの見てください」「『兵庫版』を参考に作っています」という声をよく聞きます。本校では、熱心な生徒がいつも授業にCAN-DORリストを持参し、その日の活動がどのような力に結び付くのかをチェックしています。

大倉 拠点校事業の際には、教員間に戸惑いや不安を感じました。当時よく話していたのは、基本CAN-DORリストは先生方のこれまでの指導を否定するものではなく、互いに手を取り合って前に進むためのロードマップだということです。幸い、本校では、拠点校事業初年度の生徒が大学入試で良い結果を出し、更に、生徒へのアンケート結果から、自身の成長を実感している

様子が見られました。今では、先生方も成果を実感し、4技能に対する意識は格段に向上しています。

桂 県教委では、基本CAN-DORリストを各校の実情に応じて調整し、指導案に落とし込んでもらうための活用ガイドを公表しています。また、教師に求められる指導力を示した「教員のためのTODORリスト」も作成し、配布しました。4技能をバランスよく授業に盛り込んでいるかどうかを、教員自身がチェックできるようになっており、授業改善・指導力向上につながることを期待しています。

変化する大学入試への対応も考慮

——基本CAN-DORリストを作成する際、大学入試との関連についても議論されたのでしょうか。

越前 近い将来、大学入試は大きく変わると言われています。それに伴い、高校も4技能重視の指導に変わらざるを得なくなるでしょう。私立の中高一貫校は既に強い危機感を持ち、今の中学1年生から指導を大きく変え始めています。

早く気付かなければなりません。

「兵庫版」は県の英語教育を変える第一歩

——今後に向けての抱負をお聞かせください。

西崎 これからは生徒が主役になる授業を意識していきたいと思っています。教師がどれだけ素晴らしい英語を話しても、生徒が聞いただけでは、生徒の英語力は上がりません。教師はファシリテーターに徹して、生徒同士のコミュニケーションを促し、生徒が英語を使う必然性を感じられるような授業をしていきたいと思っています。

山田 ベテラン教師ほど指導を変えづらいと言われますが、委員会に参加し、自分の意識が変わったことが、私にとっての最大の成果でした。今後は、多くの先生に基本CAN-DORリストの意義を伝え、ご理解いただき、指導に還元してもらえるように働き掛けていきたいと思っています。

篠原 指導と評価の一体化の重要性が問われて久しいですが、実際に運用してみて、CAN-DORリス

図2 「英語学習を支える3領域チェックリスト」(抜粋)

関心・意欲・態度	
【学習ストラテジー】 ①わからない言葉や用法があれば、辞書を使って自分で調べている。 ②英語力を向上させるために、自ら進んで家庭学習に取り組んでいる。 ③習った表現を使って、書いたり話したりしようとする姿勢を持っている。 ④自分の伝えたいことを表現するために、必要な言葉や用法を辞書やインターネットで調べ、自分で表現力を高める努力をしている。(後略)	【コミュニケーションストラテジー】 ①間違いを恐れず、英語を話している。/ ボディランゲージなどを使って、なんとか言いたいことを伝えている。 ②一人ひとりの意見や考えが多様なものの見方を教えてくれることに気づき、他者及び自分の意見や考えを尊重している。 ③会話中に必要な情報が聞き取れなかった場合は、相手に質問し、確認している。 ④ペアワークやグループワークで、できるだけ英語で意見を述べたり、話し合ったりしようとする姿勢を継続している。(後略)
論理的思考力	
【自分の考えをまとめる力】 ①自分の意見をメモ等を使って整理した上で、わかりやすく相手に伝えている。 ②自分の意見をいくつかの具体例を交えながら、わかりやすく相手に伝えている。 ③英語で聞いたり読んだりしたことについて、日本語で自分の意見をまとめる際、文と文の論理的な関係を示すことば(ディスコースマーカ)を意識している。 ④英語で自分の意見をまとめる際、文と文の論理的な関係を示すことば(ディスコースマーカ)を効果的に使っている。(後略)	【他者の考えを理解する力】 ①他者の意見を聞いて、その内容を部分的にでも理解している。 ②他者の意見を聞いて、その内容の真偽を客観的に判断している。 ③他者の意見を聞く際、文と文の論理的な関係を示すことば(ディスコースマーカ)を意識して、主張を大まかに理解している。 ④他者の意見を聞く際、文と文の論理的な関係を示すことば(ディスコースマーカ)を意識して主張を正確に理解している。(後略)
文化理解	
【理解するための視点】 ①自分の住む町や観光名所などで困っている外国人を見かけると、積極的に手助けしている。 ②短期間であれば、海外のホームステイプログラムに参加しようと考えている。 ③異なる文化に興味を持つとともに、自国の文化との相違点を意識している。 ④自分の住む町の風俗習慣と外国の風俗習慣との相違点や類似点を理解している。(後略)	【情報の収集と伝達の視点】 ①身近な事柄や日常生活に関する話題について友人と話をしている。 ②趣味や家族、将来の夢などについて、クラスで情報交換をしている。 ③異なる文化について興味のある話題や情報を、書籍やTV、インターネット等を通じて理解を深めている。 ④学校の授業以外でも、書籍やTV、インターネット等を通じて、海外からの情報を自ら進んで取り入れている。(後略)

3領域を更に2つに分類し、各9つの指標を提示。上図では各4つを抜粋して掲載した。*兵庫県教育委員会からの提供資料を一部抜粋して編集部で作成

トこそ、その最たるものだと感じています。生徒の力を伸ばすためだけではなく、私自身の授業改善につなげていけるよう研鑽を重ねていきたいと思っています。

杉本 自分が感じたような意識変革を他の先生とも共有したいというのが、今の一番の思いです。また、今の紙ベースだけでなく、スマートフォンアプリケーションなど、生徒が興味を持つようなツールを用いて、楽しみながら使えるCAN-DORリストを考案したいと考えています。

河岡 先日、あるセミナーで「分かる授業だけではなく、伸ばす授業を目指してみようか」と聞きました。生徒にタスクを課して小さな成功を積み重ねていくCAN-DORリストは、まさに伸ばす授業につながると思います。本校でも早くCAN-DORリストを完成させ、生徒自身に成長を実感させる授業を展開していきたいです。

柳瀬 英語教育が大きく変わろうとしている今、多くの英語教師が不安を抱えています。そういった不安に対して、どこを目指してい

けばよいのかを示してくれる地図と方位磁石の役割を果たすのが、CAN-DORリストだと思います。その意味で、非常にタイムリーな取り組みであり、私自身も先生方との目線合わせのツールとして積極的に活用していこうと思います。

大倉 最初の構想委員会で、根岸教授がCAN-DORリストを「夢のリスト」と言われたことが、今でも忘れられません。「兵庫版」は完成しましたが、これが最終形ではなく、兵庫の英語教育が変わる第一歩に過ぎません。その作成にかかわったことを光栄に思い、より良いものにしていくために実践を積んでいきたいと思っています。

越前 英語教育で難しいのは、教師の意識改革です。どんな良いものが出来ても、先生方の意識が変わらなければ有効に活用できません。先生方は多忙であり、大学入試のプレッシャーも大きく、なかなか新しいことに挑戦できないかもしれません。まずは熱心な先生方が率先して基本CAN-DORリストを活用し、少しずつ風穴を開けていくことが大切だと思います。



◎茨城県北相馬郡北総実修学校として開校。2003年度に総合学科となった。2年生以降、アカデミック系列、プラクティカル系列、インフォメーション系列の3系列に分かれる。ボランティア活動に力を入れ、生徒有志が東日本大震災の被災地の他、フィリピンやカンボジアなどでも支援活動に取り組んでいる。

設立

1922(大正11)年

形態

全日制／総合学科／共学

生徒数

1学年約240人

2015年度進路実績(現役のみ)

国公立大は、北見工業大、茨城大、福島大、青森公立大などに7人が合格。私立大は、上智大、中央大、東京理科大、法政大、立教大などに延べ193人が合格。短大、専門学校進学102人。就職は、キャン、オカモトなどに22人。公務員2人。

住所

〒302-0013
茨城県取手市台宿2-4-1

電話

0297-72-1348

Web Site

<http://www.toride1-h.ibk.ed.jp>

茨城県立 取手第一高校

生徒の実態把握

生徒の志望実現に向け、 客観データを使った 学習・進路指導を徹底

変革のステップ

背景

◎総合学科になって以来、進学意識の高い生徒が入学してくるようになった。生徒の変化に応じ、教師が指導を変える必要があった

STEP 1

実践

◎学習指導、進路指導の客観的な指標として、全学年でスタディーサポートを導入。また、学習習慣の定着に1年生から力を入れるようになった

STEP 2

成果

◎生徒一人ひとりに対して学習への意識付けが図られた結果、主体的に学びに向かう生徒が増えた

STEP 3

生徒の変化に応じた 指導の転換が必要だった

茨城県立取手第一高校は2003年度に単位制の総合学科となり、近年では国公立大への現役合格者を毎年送り出すようになった。入学生志望進路も、普通科の他に食品工業科や商業科などを設置していた頃は就職希望が大半だったが、徐々に進学希望が増えていった。

ただ、生徒の進学意識の高まりに、教師が対応し切れていない面があった。例えば、学習指導では、以前と同じように成績下位層の基礎学力定着には力を入れるものの、上位層の関心を引き上げ、学力を更に伸ばす指導には課題があった。そのため、入学時点での学力は高かったにもかかわらず、いつの間にか成績が下がってしまう生徒がいた。進路指導でも、一般入試で大学を受験させる指導体制が整っておらず、大学進学を望む生徒には推薦・AO入試を勧める傾向があったと、進路指導主事の加藤和男先生は振り返る。

「生徒の学力や学習習慣、志望大などに関するデータが不足しており、先生方の経験や感覚に頼った進路指導が行われていました。もちろん、進学指導に慣れた先生ばかりではありませんから、可能性を十分に検討しないまま、進路を決める生徒が出てしまっていたのです。2年生以降は、授業や定期考査の内

容が各系列で大きく異なるため、指導方針を学年団で統一することも難しい状況でした」

生徒の変化をこまめに見取ろうと スタディーサポートを導入

同校では、他校から異動してきた教師を中心に、学習や進路指導の客観的指標を求める声が強まり、13年度に改革に向けて大きく舵を切った。その最初の取り組みが、ベネッセのスタディーサポートの導入だ。1・2年生が年2回、



茨城県立取手第一高校教頭
川村始子 かむら・ともこ
教職歴30年。同校に赴任して2年目。「プロの教師として先生方が生徒の可能性を引き出せるように、組織や環境を整えたい」



茨城県立取手第一高校
加藤和男 かとう・かずお
教職歴30年。同校に赴任して6年目。進路指導主事。「感謝の気持ちを忘れず、志を高く持ち、日々努力していきたい」



茨城県立取手第一高校
岩崎卓士 いわさき・たくじ
教職歴26年。同校に赴任して4年目。3学年主任。「今出来る最高のことに取り組み、次につなげていきたい」



茨城県立取手第一高校
松尾拓 まつお・たく
教職歴12年。同校に赴任して4年目。3学年担任。「生徒の立場からの目線を失わず、生徒に誠実であれ」

3年生が年1回、いずれも国語、数学、英語の3教科で行い始めた。当時1学年主任で、現3学年主任の岩崎卓士先生は、他学年の成績も参照できるように、全学年で一斉に導入したと話す。

「上の学年の生徒の成績を確認することで、その下の学年の生徒の学力が今後どのように変化していくのか、おおよその見当が付きます。そうなれば、学年団における学習指導の方針が立てやすくなると考えました」

更に、スタディーサポートの結果が出る度に、各学年団で検討会を行うことにした。理解不足の生徒が多い分野・単元を把握して学習指導に反映させた他、成績帳票に記載される学力と学習習慣の相関図を、どの生徒についても検討し、気になる生徒には担任が随時声を掛けた。

「検討会を重ねることで、生徒の学力や学習状況についての様々な変化が数値として把握できるようになり、どの先生もしつかり根拠を示しながら生徒と向き合えるようになりました。生徒の様子から『頑張りなさい』『よくやっているね』と漠然と声を掛けるのではなく、数値に結び付いた具体的なアドバイスが出来るようになったと感

図 「スタディレコード」のシート(1年生)

自主学習の内容と時間、その日の自主学習に対する振り返りと自己評価を、生徒が毎日記入する。

*学校資料をそのまま掲載

じます。学習や進路への生徒の意欲を高めた上で、指導することが出来ますし、『生徒に高い目標に挑戦してほしい』という思いを先生方と1つにすることにもつながると期待しました」(加藤先生)

学習の内容と時間を毎日記録させ 自主学習習慣の確立を図る

生徒の実態把握の一環として、「スタディレコード」も行うようになった。これは、生徒が自主学習の内容や時間などをシート(図)に毎日記録する活動で、13年度の1年生が取り組み始めたことがきっかけとなり、次第に他学年にも広がっていった。1・2年生では毎日、担任がシートを回収・集計し、コメントを書いてか

ら生徒に返却する。3年生は自学自習の完成期と位置付けているため、シートを配布はするが、活用は生徒の自主性に任せている。

岩崎先生は、「スタディレコード」の狙いを次のように話す。

「高校での学習内容は、卒業後、どのような進路を選ぶにしても土台になります。更に、学力が高まれば、幅広い選択肢から本当に進みたい道を選ぶようになるでしょう。学習習慣は学力の向上を支える基礎ですから、全ての生徒に1年生のうちにしっかりと定着させたいという思いがありました」

1・2年生では、学習時間が長かった生徒を各学年集会で表彰する。取り組みを始めた当初は数人だけだった上位者が、次第に増加していった。きちんと取り組めた生徒を認めてあげたいという思いから、月間学習時間が一定数を超えた全生徒に、賞状を授与する機会を設けた。

「大勢の友人の前で先生に褒められた生徒は、学習に対して更に意欲的になるはずです。友人が努力していることが分かれば、『自分も頑張って表彰されたい』という気持ちになる生徒も増えるでしょう。本校には、真面目でおとなしく、中学校時代はあまり目立たなかった生徒が多いです。そのため、表彰し、頑張りを認めてあげること、学習への積極性を引き出せるようになるのではないかと考えました」(岩崎先生)

上位集団への働き掛けを通して 学年全体に高い目標を抱かせる

1年生では、成績上位層の生徒の学習意欲を高めることにも力を入れた。その代表的な取り組みが、上位層を対象とする補習だ。国語、数学、英語の補習を週1回1時間、週ごとに教科を変えて全クラスで行っている。この補習に、3教科の総合成績の上位者約30人から成る特別クラス「M課外」を設け、難度の高い問題に取り組ませることにした。「M課外」の受講者は、まず入学試験の成績で選抜し、1学期の中間考査の成績で入れ替えた。

「生徒が高校生活に慣れてくるに従って、学習意欲が低下し、上位層が大きく減ってしまふことが、本校の長年の課題でした。そこで、入学当初から各クラスの成績優秀者を集団化し、切磋琢磨させようとしたのです。上位集団としての一体感が早く生まれるように、『M課外』を受ける生徒の入れ替えは1学期の一度だけに行いました。メンバーを早期に固定すれば成績推移を把握しやすくなるため、『M課外』受講者の成績を、学習指導の成果を測る基準点にでき、上位層を育てる指導に生かせると考えました」(岩崎先生)

更に、以前から数学と英語で行っていた習熟度別授業の仕方にも、工夫を凝らした。例えば数学の上位クラスでは、模試の過去問題をアレ

ンジした独自プリントに毎回取り組ませるようにした。この学年を3年間受け持っている数学科の松尾拓先生は、次のように話す。

「上位クラスの生徒の中にも学力差がありますから、プリントには基礎的な問題から応用問題まで、様々な難易度の問題を載せました。数学が得意な生徒でも達成感が得られるように、背伸びをしようと解ける問題も1・2問出題するように心掛けています」

また、「M課外」を受講する生徒と、それに続く成績上位の生徒計約60人を対象に「上位者集会」を定期的に行った。そこでは、生徒が自分の学力を広い視野で捉え、進路を検討できるように、模試の平均点などを、茨城県内の進学校2・3校と比較しながら示した。

「これまで本校の生徒は、『一般入試での大学進学は自分には無理だろう』という消極的な姿勢や、『先輩も専門学校に進学するみたいだから、自分も専門学校にしよう』という安易な姿勢になりがちでした。ただ、近年は学力が向上し、上位層の学力水準は、近隣の上位校と遜色がなくなっています。そこで、上位層の約4分の1の生徒には上位校の成績を伝え、『高い志望を抱き、プライドを持って努力し続けてほしい』と、繰り返し呼び掛けました。上位層の意識が変われば、中・下位層の生徒も刺激を受け、学習にも進路にも前向きになると期待しました」(岩崎先生)

学年間のつながりを深め 取り組みの発展的な継承を目指す

同校の改革初年度に入學した現3年生には、志望進路を問わず、自ら学びに向かう生徒が多く見られるようになった。例えば、生徒は2年生以降に3つの系列に分かれて学ぶことになるが、いずれの系列でも学習時間が長くなった。更に、上位層だけでなく、中・下位層にも、「スタディレコード」で表彰される生徒が目立つようになった。

また、1年生で「M課外」を受講していた生徒は、2年生以降も各系列の学習面でのリーダーとなり、進学希望であれば、国公立大が十分に視野に入るだけの学力を身に付けて、一般人試での合格を目指している。

教師の意識も大きく変わった。改革に着手した3年前には、新しい学習指導や進路指導に必ずしも積極的でない教師がいた。しかし、今ではどの教師も意欲的に取り組んでいると、川村始子^{とこ}教頭は話す。

「スタディサポートなどによって学力推移が客観的に把握できるようになり、生徒がいきなり成長しているかが、どの先生も把握できるようになりました。かつての指導のままでは対応できないことを、身をもって感じるようになったからこそ、改革に前向きになったのだと思います」

情熱 若手教師が語る、指導変革への

教師が本気になってこそ 生徒の気持ちに火をつけられる

3学年担任 松尾 拓

私は本校に赴任した当初、担当する数学の授業で、退屈そうにしている上位層の生徒がいることが気になりました。そこで、赴任2年目からは、幅広い難易度の問題に取り組みせたいと、模試の過去問題などを参考に作成したプリントを教材に用いるようになりました。基礎問題の他、既習分野の応用問題などを出題しています。「少し難し過ぎたかな」と私が感じる問題でも、途中までは解ける生徒が珍しくありませんし、見事に正解する生徒もいます。生徒の底力に驚かされることの連続でした。

そのため私は、生徒の学習意欲を更に高めたいと思い、良問をより精選するようになりました。教材の作成に深夜まで取り組むこともありましたが、手間だと感じたことは一度もありません。それは、生徒を本気にさせるには、まず教師の私の本気にならなければならないと、必死だったからです。生徒も私の期待に応えてくれたため、1年生から受け持っている現3年生では、数学の学力を大きく伸ばすことが出来ました。

ただ、志望進路を実現するためには、数学以外の教科もしっかり学習する必要があります。クラス担任としては、生徒に課題のある教科を学習するように促す責任を感じています。生徒一人ひとりの他教科での学習状況をもっと正確に把握できるように、今後は他教科の先生方と今まで以上にコミュニケーションを重ねていきたいと考えています。

現3年生に実りつつある改革の成果を、下の学年で更に進化させていくために、新しい取り組みも始めている。15年度には、全学年の学年主任、進路指導主任、教務主任、生徒指導主任が月1回集まり、それぞれの学年の課題を共有して解決策を話し合うようになった。

「入学してくる生徒は毎年異なりますから、前年度の1年生の取り組みを、今年度の1年生でそのまま行っても、うまくいくとは限りません。どの学年でも、過年度の生徒と比較しながら、目の前の生徒に応じて取り組みを工夫できるように、学年団相互の情報共有を強化しています」(岩崎先生)

16年度からは、生徒の進路意識を更に高める

取り組みにも力を入れる計画だ。例えば、1年生の必修科目「産業社会と人間」では、大学や地域の職場などを見学する際に、事前の目標設定と事後の振り返りを徹底させる。2・3年生では、自分の課題意識に基づいたテーマについての探究学習も始める。

「総合学科である本校では、生徒の志望進路に応じて、多様な分野で専門性の高い知識と技術を育む必要があります。今では多くの生徒が主体的に進路を検討できるようになりましたから、今後は、その選んだ進路で生かせるような専門性を身に付けることへの意識付けを強めていきたいと考えています」(川村教頭)

今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。

2010年10月号指導変革の軌跡「群馬県立前橋東高校」など

▶▶▶ <http://berd.benesse.jp> → HOME > 教育情報 > 高校向け



愛知県立
江南高校

進学実績向上

基礎学力の定着と 学習意欲の向上を図り、 過去最高の進学実績に

◎校訓は「学び はげみ 学べ」。真理と正義を愛し、知性と教養を備え、気力・体力の充実した人材の育成を目指す。例年100人以上が国公立大に合格。部活動も活発で、テニス部や陸上部、水泳部、吹奏楽部などが県大会の常連。

設立

1980(昭和55)年

形態

全日制／普通科／共学

生徒数

約1040人

2015年度入試合格実績(現浪計)

国公立大は、富山大、金沢大、岐阜大、愛知教育大、名古屋大、名古屋工業大、三重大、愛知県立大、名古屋市立大などに166人が合格。私立大は、中央大、東京理科大、法政大、明治大、南山大、名城大、同志社大、立命館大、関西学院大などに延べ1178人が合格。

住所

〒483-8177
愛知県江南市北野町川石25-2

電話

0587-56-3511

Web Site

<http://www.konan-h.aichi-c.ed.jp/>

変革のステップ

背景

◎15年程前から進学実績が低迷し、生活指導の課題も顕在化。進学校としてのアイデンティティーを取り戻すべく改革に着手

STEP 1

実践

◎学校の活性化に向け、部活動に注力。週末課題や土曜教室で基礎・基本の定着、学習計画やスタディーサポートの活用で学習意欲の向上を図る

STEP 2

成果

◎生徒と教師の距離が近くなり、学校に活気が戻る。進学実績が上昇し、2013年度入試からは3年連続で最高記録を更新

STEP 3

部活動の活気が薄れ 進学実績も低迷

愛知県立江南高校は、地域を代表する進学校であり、創立当初の教師の熱意と地域の大きな支援により、順調に進学実績を伸ばしてきた。ところが、15年程前から、生徒の学習意欲や進路意識に陰りが見え始め、進学実績が低迷していった。厳しかった生徒指導も徐々に手薄になっていき、一部の生徒の生活規律が緩みがちになった。それに対して、地域から厳しい評価を下されることもあったという。

進学校として危機感を抱いた教師たちは、これからの江南高校のあるべき姿を話し合った。様々な議論から浮かび上がったのは、学習時間の不足、部活動の停滞という課題だった。教諭時代から計17年、同校に勤務する三好博輝(ひろき)教頭は、次のように述べる。

「当時、多くの進学校が授業時間を増やす中で、本校は30単位を維持していました。が、進学校にふさわしい指導体制を整えるためには、単位の増加は避けて通れない状況でした。その頃は、学習だけでなく部活動の活気も薄れ、明確な目的意識がなく、活動意欲の低い生徒が目立ちました。部活動の加入率は100%であっても、真面目に取り組んでいる生徒は半数以下という部もありました」

生徒の活気を取り戻し、学校の求心力を高め

ることが、喫緊の課題となっていた。

週末課題とテストを連動させ 生徒のモチベーションを高める

2006年度、同校は年間修得単位数を32単位に引き上げ、授業時間を50分から65分に増やした。50分授業のままで単位数を増やせば、週2日、コマ数が増えてしまう。終業を毎日同じ時間とし、部活動に取り組みやすいようにした。部活動に活気を呼び戻すには、何より参加率



愛知県立江南高校教頭
三好博輝 みよし・ひろき
教職歴31年。同校に赴任して5年目。「継続は力志を立て耐えて励めば、夢は必ず実現する」



愛知県立江南高校
近藤哲也 こんどう・てつや
教職歴27年。同校に赴任して7年目。進路指導主事。「生徒一人ひとりを大切にする指導を心掛ける」



愛知県立江南高校
松永和宣 まつなが・かずのり
教職歴35年。同校に赴任して10年目。進路指導課。「掛けた手間ひまが教育の質を決める」



愛知県立江南高校
佐々木敏也 ささき・としや
教職歴4年。同校に赴任して5年目。進路指導課。「生徒の失敗は教師の責任。生徒の成功は生徒の努力」

を高めなければならない。顧問は積極的に生徒に声を掛け、校務の合間にグラウンドや体育館に足を運び、指導した。部活動活性化の牽引役となった部の1つが、今や県大会の常連となった吹奏楽部だ。生徒指導を徹底させ、生徒の生活規律を整えていった。

当初は「なぜ吹奏楽部の生徒だけ、制服のジャケットのボタンをきちんと留めなければいけないのか」と不満を漏らす生徒もいたが、粘り強い指導の末、1年程で顧問の方針は浸透し、演奏レベルも格段に向上した。それに引っぱり、他の部にも厳格な生徒指導が浸透していったという。14年度まで進路指導主事を務めた松永和宣先生は次のように述べる。

「どの部でも顧問が積極的に生徒とかかわるようになったのが大きかったのではないかと思います。熱心に取り組めば成績も上がり、結果が出れば生徒はもっと楽しくなる。『吹奏楽部に入りたい』『サッカーをしたい』などの理由から入学を希望する生徒も増えました。目的意識が明確にあるため活動意欲が高く、そうした姿勢が学習にも波及していきましただ。週末課題の充実を図り、定期考査はその集大成として位置付け、生徒の学習意欲を高めた。

同校の伝統的な取り組みに、「英Eテスト」と「数Zテスト」がある。当該学期に取り組んだ課題や問題集から出題されるテストで、英E

テストは毎回定期考査の2週間前、数Zテストは考査期間中に、正規の科目と別に実施する。基礎学力の定着の確認、課題への取り組みを評価するために設けられたが、改革前は、課題未提出者が多かったり、生徒がテスト直前になってから対策を始めたりと、十分機能していなかった。そこで、未提出者への指導を強化すると同時に、両テストでは週末課題と関連した内容を出題することにした。

「テストの出題範囲が広く、直前の暗記だけでは対応できないため、生徒は地道に週末課題に取り組みざるを得ません。週末課題にしっかりと取り組めば、英E・数Zテストで好成绩が取れるという流れをつくり、学習意欲を高めたいと考えたのです」(松永先生)

4コマの「土曜教室」を必須化し 補習や発展的な演習に充てる

任意参加だった1・2年生の「土曜教室」を、原則全員参加とする方針を打ち出したのもこの頃だ。40分×4コマで、1コマを自習とし、残り3コマで5教科のいずれかの補習を行う。その週の授業の復習や反復練習的な内容を中心とし、基礎・基本の定着を狙いとした。

3年生の土曜教室は、90分×4コマの講座制だ(12月まで)。入試で必要となる内容の講座を5教科で開設し、生徒が自由に講座を選択す

図 3年生「第19回 土曜教室」の講座内容

講座内容（各コマでどれか1つを選択）	
第1限	①英語標準（長文・文法・英作） ②英語発展（長文・文法・英作） ③英語難関（長文・英作） ④物理（基本～標準）
第2限	⑤センター演習数学ⅡB ⑥世界史論述講座5 ⑦日本史（大正・昭和前期の内閣の変遷） ⑧理系数学演習応用（数学Ⅲまで） ⑨理系生物演習（ハーディー・ワインベルグ・分子進化・分類）
第3限	⑩倫理マーク演習 ⑪理系数学演習（数学ⅠA・ⅡB） ⑫文系生物基礎センター演習 ⑬化学センター演習 ⑭国語センターブレ過去問演習（現代文）
第4限	⑮文系数学記述（国公立大二次・私立大） ⑯政治経済マーク演習 ⑰理系化学記述演習（基礎） ⑱国語センターブレ過去問演習（古典）
資料配布のみ ⑲英語語彙・語法問題演習 ⑳物理記述演習	

3年生11月の第19回の土曜教室の講座内容。生徒はこの中から自分に必要な講座を選んで履修する。

*学校資料から一部抜粋して編集部で作成

る。講座数は毎週15コマ程度（図）。参加は希望制で、人数に応じて教室を割り振る。「英語標準」などの基礎・基本の定着を図る講座に加えて、「世界史論述講座」「倫理マーク演習」など、普段の授業ではなかなか指導できない応用的な内容も行った。進路指導主事で世界史担当の近藤哲也先生はこう述べる。

「授業は知識の習得が中心になるので、論述の練習は土曜教室で行います。以前は、入試で論述対策が必要となる生徒が1、2人程度でしたので、個人添削で指導していました。今は、難易度の高い大学を志望する生徒が増え、論述対策が必要な生徒が多くなったため、講座制にしています。授業ではアウトプット

する機会が少ないので、生徒たちは講座で意欲的に論述対策に取り組んでいます」

土曜教室は教師の負担が大きいが、生徒の意欲の高さに背中を押されていると、数学科の佐々木敏也先生は指摘する。

「先生方は、講座の内容はもちろん、どの時間にすれば、生徒が受講しやすいかまで考えて時間割の申請をしてくれています。生徒は次の講座を楽しみにしており、教師も『次は名古屋大志望者向けの講座にしよう』など、新しいアイデアを提案してくれます」

スタディーサポートを3月に実施し 春休みに弱点克服を促す

同校は、生徒の自律的な学びを促すため、学習意識の向上にも力を注いできた。その1つが「学習記録」の活用だ。06年度にそれまでの様式を一部変更し、取り組みを推進した。生徒は、毎朝、前日に家庭で学習した教科と時間数、起床・食事・就寝の時刻、コメントを記入して提出。担任は、全ての記録に目を通す。アドバイスや励ましの言葉を書いて生徒に返す教師もいる。

「学習時間だけでなく生活のリズムも分けるのが、学習記録の利点です。教師と生徒との交換日記のように活用する担任もいます。この記録を読むと、生徒の変化もすぐにつかめるので、『最近、学習時間が少ないね。何か

悩み事でもあるの』というように、こまめに声を掛ける教師が増えました」（佐々木先生）

スタディーサポートや進研模試を生徒の学習意欲の向上につなげているのも、同校の特徴だ。

同校では、毎年、全学年でスタディーサポートを実施している。2・3年生は1年間の学習の振り返りとして位置付け、3月上旬に受験し、終業式に結果を返却。生徒に自身の強みと弱みを把握させ、未定着の部分は付属の問題集で春休み中に復習するよう指導する。スタディーサポートの問題集を春休みの課題にする教科・学年もある。1年生は入学直後に実施し、担任の生徒把握に活用する。特に入学後最初の面談で、ゴールデンウィークや中間考査に向けたアドバイスをする上で有効な資料になるという。

3年生では進研模試の直後、生徒の自己採点結果を基に、進路指導課が独自に度数分布表を作成して「進路通信」で公表する。そこには、各教科の講評、今後の対策も掲載。意識の高い生徒は配布と同時に熱心に目を通すという。

「早く結果を知りたいという生徒の要望に応えたいという思いもありますが、何よりも重視しているのは、学習のどこに課題があり、今後何をすべきかを具体的に示して、次の模試への意識を高めることです。進路通信を手掛かりに課題を見つけ、早めに行動を起こす生徒が1人でも増えることを期待しています」（松永先生）

進路室を職員室に隣接させ、生徒と教師の距離を縮める

同校の一連の取り組みに共通するのは、生徒と教師の距離の近さだ。手厚い指導が教師に対する生徒の信頼を育み、一つひとつの取り組みに実効性をもたらしている。

進路室を職員室の隣にしたのも、この関係性を設備面で保証するためだ。また、大学案内や過去問題集、入試関連の資料を充実させると共に、机と椅子を設置して資料の閲覧や面談、話し合いが出来る多目的スペースも、進路室に確保した。職員室から進路室にかけての廊下には、長机を設置して自習スペースとし、気軽に教師に質問が出来る雰囲気づくりも整えた。

更に、職員室の入り口付近に課題提出用の棚を設置し、定期考査前の生徒の入室禁止期間中でも、生徒が棚の所まで入って、教師に声を掛けられるようにした。定期考査の時期こそ、生徒は教師に質問したいと考えたからだ。

「生徒と教師がコミュニケーションを取りやすくなり、両者の距離が更に近くなりました。進路室や職員室の近くで自習をする生徒や、質問に答える教師の姿がよく見られることで、学校全体に学習意識や進路意識の高揚がもたらされているのを感じます。また、進路室が移動したことで、進路主任が職員室に長くいることができ、学年団の思いや要望を

日々感じられるようになりました」(松永先生)
進路指導課と学年団との一体感を醸成する契機にもなったのである。

若手教師の増加に伴い 授業の質の向上が新たな課題に

同校の進路実績は、09年度に初めて国公立大合格者が100人を超えて以降、右肩上がりだ。地道な改革が実を結び、13年度入試からは3年連続で最高記録を更新し、15年度は160人が現役で国公立大に合格した。

そのように創立初期の実績をしのぐ躍進を果たした同校だが、慢心はない。

「大学入試も大きく変わろうとしている今、学校のチームワークを更に高めていかなければなりません。取り組みの効果や質を精査し、教師に過大な負担が掛からないような方法を考えたいと思います」(近藤先生)
三好教頭は、授業改革に向けた取り組みについても検討を進めていると話す。

「補習や課題などを課すことに取り組んできましたが、学校教育の中心は何と言っても授業です。若手教師が急速に増える中、授業の質をいかに高めていくかが、今後の課題です。生徒の力を最大限に引き出せるよう、互に見授業や授業公開、研究授業など、研修機能も充実させたいと考えています」(三好教頭)

情熱 若手教師が語る、指導変革への

模試分析や資料作りから 進路指導のスキルを磨く

進路指導課・3学年担任 佐々木敏也

私が新任として着任後の5年間は、本校の改革の芽が出始め、進学実績が上昇していく時期と重なります。当時と今とでは、生徒の服装や学ぶ姿勢、先生方のかかわり方など、あらゆる面が変わりました。微力ながら、新たな歴史を刻む改革にかかわり、生徒や学校の変化を間近で見てきたことは、私にとって大きな学びとなりました。

進路指導課の業務からは、進路指導のノウハウを蓄積できました。進路通信の作成で、模試の結果から度数分布を出したり正答率を調べたりと、データの分析や活用法を学び、2年目からは進路検討会の資料作りにも携わり、大学・学部の特徴や難易度に関する知識を得ました。今年度、3学年の理系クラスの担任となりましたが、面談で生徒の視野を広げるようなアドバイスが出来たのは、進路指導課での経験のおかげです。

1年生から持ち上がり、担任としての1回目が終わろうとしています。自分の指導を振り返ると、1・2年生の時にしておけばよかったと思うことがたくさんあります。入学時から3年後を見通した指導を意識しなければならぬと痛感しています。

本校の生徒は素直で真面目ですが、自分にあまり自信が持ていないようです。「出来るんだから頑張れ」と励まして、高い志望を持てる生徒は多くありません。様々な活動を通して成功体験をさせ、生徒の自己肯定感を高めていくことも、今後の課題です。

今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。

2014年8月号指導変革の軌跡「長野県上田高校」など

▶▶▶ <http://berd.benesse.jp> → HOME > 教育情報 > 高校向け

ビフォー
アフター2年生春休み前（3年生0学期）
学習点検シート

自校の指導ツールを他校の教師と共に検討し、各校の生徒特性に合った形へ改善を図る本コーナー。
今回は、3年生4月に自律的な学習をスタートするための春休み前の「学習点検シート」について検討する。

検討会メンバー



東京都立
青山高校
鎌田邦広
かまだ・くにひろ

教職歴27年。同校に赴任して3年目。主幹教諭。進路指導主任。数学科。「目いっぱいやり切った!」そんな最高の笑顔で卒業してもらいたい」



愛知県立
東海商業高校
新美廣勝
にいみ・ひろかつ

教職歴23年。同校に赴任して1年目。3学年担任。生徒会部。商業科。「自分への自信と、母校への誇りを持った、社会に愛される生徒を育てたい」



大分県立
中津南高校
遠藤源治
えんどう・げんじ

教職歴14年。同校に赴任して3年目。2学年担任。進路指導部。理科。「『なぜか』の信条の下、夢に向かって挑戦し続けるタフな生徒を育てたい」

検討

小さな失敗と成功を繰り返しながら
自律的な学習スタイルを獲得させたい



鎌田 3年生0学期を迎え、2年生が受験生モードに切り替わるた

めの指導の1つとして、「学習点検シート」を運用しています。この時期から学習時間が増える生徒は多いのですが、学習の内容やペースが自分に合っているのかについては、自信がない状態です。この時期は、高校入試や3年生への指導のため、教師も多忙です。掛けられるパワーが限られる中、どんな項目で構成されたシートであればより有効に機能するか、また、記入後の活用方法についてもアドバイスを願います。



遠藤 本校では、3か月に1度、学習時間調査を行います。確かに生徒の学習時間は徐々に増え始めます。しかし、「学習内容に自信がない」という生徒は少なくありません。また、自主的に学習計画を立てた経験が少ないため、苦手科目ばかりに時間を掛けすぎて成績全体が下がってしまい、「勉強しても成果が出ない」と自信を喪失する生徒もいます。「生徒がやる気になった時期だからこそ、手を掛けたい」という思いから、本校では2年生の担任団が全員と二者面談をしています。

新美 専門高校である本校では、2年生の1月、2月は検定試験のピーク時期であるため、すべきことは比較的明確です。しかし、3年生4月からの自分を念頭に置き、進路実現に向けた学びを自ら出来ている生徒は少ないかもしれません。実際、生徒と話をすると「頑張ります!」と意欲的なのですが、具体性や計画性に欠け、4月以降を甘く見ている気がします。就職試験でも国語、数学、英語の基礎学力は必要ですから、3年生4月のスタートをスムーズに切らせるためにも、3年生0学期のうちに適度に失敗を経験させて、「しっかりやっていかないと駄目だ」と気を引き締めさせたいですね。

遠藤 3年生0学期は助走期間だから

東京都立青山高校・鎌田邦広先生 3年生0学期「学習点検シート」

ビフォー

学習内容を自己点検する前に、1年生から3年生までのそれぞれの学習スタイルの変遷について解説し、時期によって学び方に違いがあることを自覚させた。

3年0学期の学習点検 Before - After - From Today

1年生: 予習復習の習慣化+週末課題
2年生12月まで: 予習復習の継続+週末課題+補助教材の有効利用
2年生1月~3月: 予習復習の充実+週末課題+補助教材の有効利用+受験問題集スタート (今はココ)
3年生4月から: 予習復習の充実+ 補助教材の有効利用+受験問題集本格化+志望校対策 (本格化は9月)

今すべきことは: X 冒頭の学習が速いのに受験問題集に飛び付く ではなく、O 10分~15分で出来る「すべきこと」を何かやり始めること
② 補助教材の有効利用 (例: 英語は授業のあった日に復習で音読3回、音読+音訳(口で訳を書く) 予習で参考書を「引く」など)
③ ①②が出来ている人は、受験問題集スタート (例: 英文法問題集を最初から1回読、自分で選んだ長文問題集を1週間に2章、など)

3年0学期の学習点検表・計画表 ※空欄に自分のことを記入、「今日から始めること」を3つくらい書こう。

2年12月まで Before	2年1月から After	今日から始めること From Today
		何を いつ どこで どんなふうに
例 英語の予習はやる気ないこと	例 英語は毎日音読	例 英単語 毎日朝夕 電車 駅でながら、音読アプリをしながら
例 数学の問題集は試験1週間前まで	例 数学の問題集は毎日5問	例 英日音読・音訳 授業のあった日すぐ 先 15分で完璧にできるといふ
例 数学の予習はしなかった	例 教科書・参考書をきいて予習	例 週末課題の復習 忘却されたとき 教室 廊下に行く前に10分集中!
例 週末課題は時々出さず	例 週末課題毎日	例 英語長文問題2章 通勤+音読ない(或) 車 前回の分読み直し+新たに1章
		①
		②
		③

2015年度の2年生に対しては、12月の時点で3年生0学期の大切さを訴え、1月に学習スタイルをチェックさせて、その後の学習へとつなげていった。生徒が記入した内容は担任が確認し、一言コメントを添えて返却。生徒には自宅の机にシートを掲示するように指導していた。

狙いと機能

与えられる学習から自律した学習へ移行させる

3年生0学期は、3年次の選択教科・科目が決まり、進路意識も高まっているため、学習スタイルの改善や学習計画の見直しなどの指導が行いやすいタイミングである。しかし、3年生への受験指導や高校入試の対応などに教師が追われ、2年生の指導に十分には手が回っていない学校が少なくない。4月以降に自律的な学習をスタートできるよう、鎌田先生は3年生0学期と春休みの自学自習の精度を上げ、学習状況を生徒自らがチェックできるような取り組みを行っている。

課題と解決策

3

教師が極めて多忙な時期であるため、生徒が記入後のシートの活用方法については、教師の負担が出来るだけ少ないものにした。

2

試行錯誤する体験は重要だが、ささやかであっても成功を味わわせ、自信を持たせたい。

1

与えられる学習から自律的な学習への転換を意識させることが重要。

だからこそ、失敗だけでなく成功体験も必要です。小さくても成功だと思える体験があつてこそ、自ら学んでいく自信が付くはずなんです。

新美 資格試験の対策の多くは型にはまったものですから、4月以降を考えると、自分で学習計画を練り上げることを経験させたいですね。

鎌田 3年生0学期は、予習や復習を教師に言われる通りにこなしてきた生徒が、いざ「自分で受験勉強をしてみよう」と決意しながらも、方法が分からずに戸惑っている時期と言えます。与えられる学習から脱却しようともがいている生徒を支援できるように、小さくてもよいので、成果・成功を実感できる学習点検シートへと改善したいと思っています。

学校プロフィール

東京都立青山高校

◎全日制/普通科/共学/1学年約280人
◎2015年度入試合格実績(現役のみ)/国公立大は、東京大、東京工業大、一橋大、京都大などに108人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大などに延べ612人が合格。

愛知県立東海商業高校

◎全日制/総合ビジネス科・情報科(1年次は両科共通のカリキュラム。2年次より分かれる)/共学/1学年約320人
◎2015年度進路実績(現役のみ)/4年制大進学30人、短大進学11人、専門学校進学65人、就職169人。

大分県立中津南高校

◎全日制/普通科/共学/1学年約200人
◎2015年度入試合格実績(現浪計)/国公立大は、大阪大、九州大、大分大などに138人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大などに延べ249人が合格。

検討会で明らかになった課題を踏まえ「学習点検シート」を改良! 次ページで紹介します。

アフター

3 年生 0 学期の学習点検 Before—After—From Today

2 年 [] 組 [] 番 氏名 []

1 年生: 予習復習の習慣化 + 週末課題
 2 年生 12 月まで: 予習復習の継続 + 週末課題 + 補助教材の有効利用
 2 年生 1 月～3 月: 予習復習の充実 + 週末課題 + 補助教材の有効利用 + 受験問題集スタート — 今はココ!!
 3 年生 4 月から: 予習復習の充実 + 補助教材の有効利用 + 受験問題集本格化 + 志望校対策 (本格化は 9 月)

今すべきことは、× 普段の学習が浅いのに受験問題集に飛び付く、ではなく、○ 10 分～15 分で出来る、「すべきこと」を何かやり始めること

① 予習復習の充実 (例: 英語は授業のあった日に復習で音読 3 回、音読 + 音訳「口で訳を言う」、予習で参考書を「引く」など)
 ② 補助教材の有効利用 (例: 数学の問題集を毎日 5 問、英単語集を毎日、古文単語集を毎日、週末課題を「やる」だけでなく「マスターする」など)
 ③ ①②が出来ている人は、受験問題集スタート (例: 英文法問題集を最初から 1 回転、自分で選んだ長文問題集を 1 週間に 2 章 など)

	Check				Plan	Do	Check				Action			
	2 年 12 月まで Before				2 年 1 月から		After				今日から始めること From Today			
	予習	復習	週末課題	補助教材	自学	自学で行った取り組み	自分の手応え	自分なりの改善点	グループワークを通して得た改善点	何を	いつ	どこで	どんなふうに	
英語														
数学														
現代文														

これまでの学習の中の「自学」の項目については入念に振り返りをさせ、「自分なりの改善点」までを生徒自身に言語化させる。また、HR を活用してグループワークを行えば、クラスで意識を高め合うことが出来る。書いた内容をペアやグループで共有し、学習方策に関する視野を広げさせる。

3 年生 0 学期までの学習の振り返りの項目は、生徒の記入の負担が出来るだけ少なくなるように、また、教師が課題を一目で把握できるように、教科別・観点別に ○△× の 3 段階で評価させるようにした。

記入例はシートの裏面または別紙に掲載することで、自宅で点検シートを記入させることも可能だ。

記入例

	Check				Plan	Do	Check				Action			
	2 年 12 月まで Before				2 年 1 月から		After				今日から始めること From Today			
	予習	復習	週末課題	補助教材	自学	自学で行った取り組み	自分の手応え	自分なりの改善点	グループワークを通して得た改善点	何を	いつ	どこで	どんなふうに	
英語	○	○	○	△	△	英文法問題集の復習 1 日 1 ページ	読んだ付けたら、少し減らす(それでも 7 月までは通して読める)	精度を上げるために、道を少し減らす(それでも 7 月までは通して読める)	仲間同士でノルマを決め、1 週間ごとに確認テストを行う	英文法問題集の復習	新習と復習	電車と家	1 読みながら、指をついたりしながらノートに整理	
数学	×	△	△	×	×	数学の問題集の復習 1 日 2 題	取けている知識の多寡にがっかり	教科書を丁寧に復習することを目指す	人に説明できるように、5 教科 7 科目全てに記入する	数学の問題集を 1 日 2 題、その単元の教科書を復習	復習のみと、暗算練習	教室と家	公式は証明できるように、知識は説明できるように	

現状を ○ △ × で Check!

ここまでは 7 月 1 日までに各日で記入

7 月 1 日の日誌でグループワークを行い、友人と方法を共有

グループワークでつかんだ改善点を基に内容、方法を検討して、新たな戦略を記入。自宅で学習を利用し計画を立てる。その後、実行→評価

声が上がった。

「アクティブ・ラーニングに生かせる活動のヒントが見つかる可能性がある」「受験をチームで乗り切る雰囲気づくりにつながる」と評価する声が上がった。

活動を積極的に取り入れた。

教師がたくさんの時間を割くのが難しいこの時期、クラスという集団の力を生かして、グループやペアで学習スタイルをチェックしたり、学習計画をアドバイスし合ったりする活動が積極的に取り入れた。

教師がたくさんの時間を割くのが難しいこの時期、クラスという集団の力を生かして、グループやペアで学習スタイルをチェックしたり、学習計画をアドバイスし合ったりする活動が積極的に取り入れた。

教師がたくさんの時間を割くのが難しいこの時期、クラスという集団の力を生かして、グループやペアで学習スタイルをチェックしたり、学習計画をアドバイスし合ったりする活動が積極的に取り入れた。

改訂後の狙いと機能

自学学習を丁寧に振り返り、グループワークで視野を広げる

活用

成果までを自己評価させた上で
クラスで自学の意識を高め合う

遠藤 これまでの学習の振り返りには、予習・復習、週末課題などの観点別に○△×で自己評価させれば、担任が一目で確認できます。



新美 あらかじめ教科・科目の枠を設けることで、特定の教科・科目に偏ることなく学習することが大切だと伝えられますね。



鎌田 従来のシートでは、学習内容を書くばかりで、その結果がどうだったのかを自己評価することがありませんでした。特に大切な自学のところは、何をしたのか、そして手応えはどうだったのかを書かせることに意味があると思います。**自学を重んじるのであれば、自学に関する振り返りを丁寧に言葉にさせることが大切ですね。**

新美 教師のパワーが限られている時期なので、生徒主体の活動を通して、生徒が自分で今後の学習の方

向性を見いだせるような仕掛けがあるとよいでしょう。

遠藤 この時期、「理系だから」と文系教科を勉強しないなど、教科バランスの悪い生徒は割といますから、生徒同士で「こんな学習プランがよい」と検証できるとよいですね。グループワークを行う場合は、部活動に参加しているなど、生活状況が似ている生徒をグループにする参考にしやすいでしょう。その一方で、グループを超えていろいろな人に話を聞きに行きくことも勧めたいですね。

鎌田 担任と1対1で話すよりも、クラスの多様な仲間と話す方が気付きが多いかもしれません。

新美 成績の良いクラスメートの勉強法をそのまま真似するだけで終わらせないためには、グループワークを入れるタイミングが重要になりそうです。他者の意見に安易に追



従しないように、しっかりと自分で考えさせてから、他者の意見を聞くようにさせたいですね。

遠藤 1年間共に過ごし、人間関係が豊かになった時期だからこそ、クラスの力を生かした活動を取り入れたいですね。友人と話し合うことで、自分の振り返りの内容や今後の学習計画も、より責任を持って考えるようになると思います。

新美 クラスメートの考えに触れて、どの人の意見に最も共感したか、自分にはない視点だと刺激を受けたか、最後に発表させてもよいですね。

活用の流れ

1 自学自習を中心にこれまでの学習を振り返り、今後の学習計画を立てる

2 ペアやグループになって内容を共有する。出来るだけ多くの意見に耳を傾け、参考に出来る学習方法を見つけるよう促す

3 自らの振り返りやクラスでのワークを通じて気付いた改善点を記入させる

4 学習目標を実現できるものとするために、ペアやグループで、「応援する」という意味で相互に署名。完成版を自宅の机に掲示する

鎌田 この時期に、受験まで一緒に頑張るパートナーを見つけて、お互いに励まし合える関係をつくらせるのも意義深いですね。クラスの力をどのように活用するか、学年団で活動のアイデアを交換すれば、若い先生の勉強にもなるでしょう。また、教科指導におけるアクティブ・ラーニングのヒントも得られるかもしれません。教師が手を掛けすぎないことで、**生徒にとって、教師から自立しながら仲間と支え合う「団体戦」のスタートになればよいですね。**学校に持ち帰って更に検討してみます。

半歩⁺未来⁺を考える教育オピニオン

保護者との連携に向け 学校の情報をオープンに

一般社団法人全国高等学校PTA連合会会長

佐野元彦^{さの もとひこ}

高大接続改革と新テストへの移行、学力の3要素を育むためのアクティブ・ラーニングの導入など、高校教育を取り巻く環境は大きく変わりつつある。こうした状況を、保護者はどのように見ているのだろうか。文部科学省の高大接続システム改革会議委員にも名を連ねる全国高等学校PTA連合会（高P連）の佐野元彦会長に、子どもたちに身に付けさせたい力、学校とPTAとのより良い連携のあり方について語ってもらった。

成熟社会を担う若者に 求められる力とは

高校教育や教育改革に対する保護者の関心は、非常に高くなっています。昔のように、難易度の高い大学に入ることが、人生の成功や経済的な安定、社会的な評価につながるわけではないことに、保護者も気付き始めています。だからこそ、これからの社会ではどのような力が

求められるのか、そして、学校では自分の子どもに、その力をどのように身に付けさせようとしているのか、また、保護者はそこにどうかかわるべきなのかを知りたいという欲求は、年々強くなっていると感じます。ここ数年、保護者会やPTA総会への父親の参加が増えているのも、そうした意識の表れの1つと言えるでしょう。

自分のことだけを考えるのではなく、他者の

新テストと教員研修の あり方を改革会議で提言

◎一般社団法人全国高等学校PTA連合会は、高校PTAを通して社会教育・家庭教育の充実や、学校教育との連携を図り、子どもたちの健全育成と生涯学習社会の形成に寄与することを使命としている。研究大会や研修会の開催、PTA活動の調査・研究などを、社会環境の整備や家庭の教育力向上のために進めており、2015年度は、子どもたちの交通マナーやインターネット・リテラシーの向上、進路意識調査などに取り組んできた。

高大接続システム改革会議には佐野元彦会長が参加し、PTAの立場から改革に対する期待や要望を伝えてきた。提言の1つは、「高等学校基礎学力テスト（仮称）」「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」の問題作成方針の明確化だ。現状の案ではいずれも「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を問う内容となっており、住み分けがあいまいなため、学校や保護者の負担と混乱を招く危険性があると提言している。もう1つは、教員研修のOFF-JT（*）化だ。改革会議の「中間まとめ」では、OJTの研修の充実を求めているが、それでは教員の負担が大きいとして、勤務時間外の研修制度の設置を提言している。

* 職場外訓練（Off-the Job Training）のこと。



さの・もとひこ◎株式会社サノ・ホールディングス代表取締役社長。秋田県立秋田高校PTA会長、秋田県高等学校PTA連合会会長を務めた後、2014年6月から現職。中央教育審議会生涯学習分科会の臨時委員なども歴任。

役に立つ人間、感謝される人間になってほしいというのが、保護者の一番の思いです。そのために、多様な考え方を受け入れる協調性、ハンディキャップを抱えた人への思いやりなど、社会人としてふさわしい社会性・市民性を身に付けてほしい。それは、社会の変化に関係なく、普遍的に身に付けてほしい姿勢です。

そのような不易の部分がある一方、社会の要請に応じて変わっていく部分もあります。今後、人工知能の発達の影響で、現在の職業の半分はなくなると言われています。生き残れるのは、教師や経営者、医師・看護師、カウンセラー、人事マネージャーなど、他者の感情をくみ取りながら進めていかなければならない職種でしょう。いくら人工知能が発達したとしても、人間にしか出来ないことがあります。そうした力を

身に付けて、21世紀を生き抜いてほしいというのが、保護者共通の願いです。

日本の社会は今、戦後の成長社会から成熟社会に入っています。産業界のキーワードでいうと、「重厚長大から、軽薄短小へ」「一品種大量生産から、多品種少量生産へ」「均質なものから、多様なものへ」「作り手の理論を優先するプロダクトアウトから、消費者のニーズを重視するマーケットインへ」「モノから、知恵へ」「マニュアルから、ソリューションへ」——そのような対比によって、日本社会の変化を表現できるでしょう。

今後は、そうした発想を持った人たちが世の中をリードし、新たな価値を生み出していくのだと、私は考えています。ただ、そのような人材は、学校で先生方だけが頑張っても、また、家庭の努力だけでも育むことは出来ません。学校と家庭の双方が、いかに協力関係を築き、同じ視点で子どもたちに向き合っていけるかが、大きな鍵になるはずです。

知識偏重の教育に 疑問を抱く保護者たち

学校教育について知りたいという保護者の思いが強くなっている半面、必要な情報が十分に保護者に届いているとは言えません。そのため、今の教育が何を目指している、どのように学校にかかわっていけばよいのか分からないという保護者は、少なくありません。

私がPTAの様々な会合で挨拶をさせていたどきに繰り返して伝えているのは、私たちが子どもだった時代とは学力観が変わってきているということです。かつては、いかに多くの知識を蓄積できているかということが学力の基準でした。しかし、多くの大人は、それだけが重要視されることを、自身の経験から疑問に思ったはず。なぜなら、約束を守ることや礼儀正しさ、つらいことでも取り組み続ける粘り強さ、グループで取り組む協調性も、社会で活躍するために必要だと感じているからです。企業の就職試験も、そうした点を重視して採用するようになっていくにもかかわらず、なぜ学校ではそうした力を評価しないのだろうと考える人は多かったと思います。

保護者の方々に対して、学校教育法で「学力の3要素」が定められ、①基礎的・基本的な知識・技能、②知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力、③主体

的に学習に取り組む態度が、これからの時代は重視され、大学入試でも、そうした力が問われるようになる」と説明すると、よく納得していただけです。保護者の多くは、知識重視の学力観そのままの教育改革では意味がないと考えています。だからこそ、今、検討されている高大接続改革や高校教育改革は、学力観そのものが変わることに前提なのだというのを、より多くの保護者に伝えていく必要性を感じています。

文部科学省から教育改革にかかわる様々な情報が発信されていますが、特に、この学力の3要素については、理解を深めていただくためにも周知してほしいと思います。

新テストの希望制は 学校の序列化を生む？

私は、高P連会長として高大接続システム改革会議に参加しています。改革の方向性には賛同の立場ですが、各論になると、分かりにくい部分や非現実的な議論が少なくないように感じています。

最も分かりにくいのは、「高等学校基礎学力テスト（仮称）」と「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」の関係です。改革会議の「中間まとめ」では、前者は「知識・技能」を中心に、後者が「思考力・判断力・表現力」を重視するというように住み分けられています。ただ、前者でも「思考力・判断力・表現力」を問う内容を

をバランスよく出題し、後者でも「知識・技能」を評価することになっています。これでは2つのテストを併存させる意義が明確ではなく、生徒や先生方の負担が増えるだけのような気がしてなりません。テストのイメージを共有し、議論の土台を構築するためにも、出来るだけ早く問題のサンプルを提示してほしいと要望しているところです。

また、「高等学校基礎学力テスト（仮称）」は、高校の学習成果の保証や指導改善に生かすという狙いで実施する以上は、全ての高校に実施を義務付けて、費用も国や自治体が全額負担すべきだと考えています。しかし、今のところ、受検するかどうかは学校単位で決定することになっており、受検費用も保護者負担になっています。

もっと不安なのは、「高等学校基礎学力テスト（仮称）」の受検を表明することが学校の序列化につながるのではないかとこの点です。このテストを受けると決めた時点で、「あの学校は基礎学力までしか保証しない」「そのレベル以上の学力を育てる力がない」と受け止められ、当該高校の教育の質に対する保護者の疑念を呼び起こさないと限りません。

おそらく、義務教育段階の知識すら身に付けずに、社会へ出ていく若者が多いという現状に対する危機感から発した議論だと思えますが、そもそも、義務教育段階の知識が身に付いてい

ないにもかかわらず、高校に入学させること自体が不自然です。「高等学校基礎学力テスト（仮称）」の議論も大切ですが、小中高の12年間を通した教育のあり方を、もっと活発に議論していくべき時期なのかもしれません。

アクティブ・ラーニングに 習熟した教師を育てるために

高大接続システム改革会議では、高校の教員研修についても意見を求められています。「中間まとめ」では、OJTによる研修制度の充実をうたっていますが、かえって学校現場の負担と混乱を招くのではないかと危惧しています。先生方は、日常の業務だけで手いっぱいであるにもかかわらず、今後はアクティブ・ラーニングの視点からの指導改善も求められます。日常の教育活動とは別の場で、ゆとりを持って研修が受けられる仕組みをつくる必要があるのではないのでしょうか。

そのためには、私は職場外研修である「OFF FJT」を基本にすべきではないかと考えます。初任者研修や10年、15年の節目の研修には、1年間のOFF FJT、そして、長期勤続者のベテラン教師には、職務を離れた1か月～1年間の「サバティカル休暇」(*)を付与してもよいのではないのでしょうか。

また、アクティブ・ラーニングの指導法を熟知した指導的立場の教員を確保することも、喫

* 長期間勤務者に与えられる1か月以上の職務を離れた長期休暇。伝統的に大学教員に多く適用され、研究休暇とも言われる。

緊の課題です。最近行われた高大接続システム改革会議で、ある委員から「経験それ自体と、それを能力化することとは別ものである」という指摘がありました。まさしくその通りで、生徒が調べたり議論したりした経験を血肉化し、能力として定着させるためには、先生方の適切なファシリテーションが必要です。そうした働き掛けがなければ、「楽しかった」「盛り上がった」というだけの授業で終わってしまうでしょう。

ある結論に至った背景には、どのような思想や知識があるのか、もっと調べなければいけないことがあるのではないかとということに気付かせることが重要です。そのように、議論を深く掘り下げていく中で、子どもたちは新しい発見をし、自分の知識の不十分さに気付くのであり、表面的に手法だけをまねても、アクティブ・ラーニングに期待されている本来の成果は得られないでしょう。早急に教員研修を充実させ、スキルの向上を図っていくべきだと思います。

学校も保護者も 目指す方向性は基本的に同じ

近年、学校に対する保護者の期待は大きく、時に理不尽な要求を先生方に突き付ける人もいます。しかし、先生方に理解していただきたいのは、保護者は学校の敵ではないということです。子どもたちの能力を高めたい、自己実現さ

せたい、幸せな人生を歩ませたいという願いは、学校も保護者も同じであり、本来は方向性を共有する存在です。しかし、現実には、保護者に対して警戒心を抱いたり、必要以上に気を使ったりする学校が少なくありません。

もちろん、保護者としても、そうした状況は本意ではありません。家庭の力だけで子どもの力を伸ばせられれば、それでよいかもしれませんが、それが出来ないから先生方をお願いしているのです。ただし、学校でしか学べないことがあるのと同じように、家庭にしか出来ないことがあるとあります。一方で、保護者の言葉や態度、考え方が、学校の努力を台無しにしてしまうこともないとは言えません。学校の教育活動を最大限に生かすためにも、学校と保護者は連携を密にしていきたいと思います。

だからこそ、そうした関係を築くために、学校はもっと保護者に情報や考えを発信してほしいのです。基本的に目指す方向性は同じなので、学校の思いが分かれば、保護者は必ず協力してくれるはずです。もし、学びを阻害するような保護者がいても、「それは自分勝手な意見だ」「それは誤解だ」と、別の保護者から修正する動きが出てくるでしょう。逆に、学校の考えが分からないと、「そうかもしれない」「そういうえばうちの子も似たようなところがある」などと、他の保護者の苦情に同調して、疑心暗鬼に陥ってしまうのです。

子どもの心に火をつける 多様な学びを提供したい

学校にとっても、保護者と連携するメリットは大きいと思います。保護者の協力が得られれば、インターシップの受け入れ先の確保なども容易になるはずです。今後、アクティブ・ラーニングが本格化すれば、地域社会でのフィールドワークがますます必要になるでしょう。学校の力だけで地域の教育リソースを活用することは、限界があります。保護者の協力を得ることで、先生方の労力を減らすだけでなく、新たな教育プログラムのアイデアが生まれるかもしれません。そうした意味でも、学校はもっと保護者を活用してほしいと思います。

子どもの心に火がつくタイミングは、いつ訪れるのか分かりません。かつては、大学入試が学びへの動機付けとして機能していました。しかし、大学全入時代の今は、一部の難関大を除いて、大学入試にそれを求めることは難しくなっています。子どもたちの学びの意欲を喚起したり、視野を広げたりするためには、教室や学校にとどまらない多様な学びの機会を提供する必要があります。今こそ学校と家庭が力を合わせることで求められており、それが子どもたちの将来や教育の可能性を広げることにつながるはずです。

免疫記憶の研究を通して 免疫異常による疾患の治療法を追究

千葉大大学院 医学研究院 中山俊憲^{としのり}研究室

健康な人間ならば、空気中の無数の微生物を吸い込んでも、体に異常は生じない。これは、免疫によって、体外から侵入した微生物が排除されているからだ。更に免疫は、1度侵入した異物を記憶して2度目以降の侵入に備える「免疫記憶」という機能も持っている。頼りになる半面、根本的な治療法が確立されていない疾患の原因になることもあるという、厄介な存在だ。免疫学の第一人者である千葉大大学院医学研究院の中山俊憲教授は、免疫記憶の成立の謎に迫っている。最先端の研究について聞いた。

フローチャートで分かる中山俊憲研究室

大学院生の 主な出身分野

医学部

獣医学部

薬学部

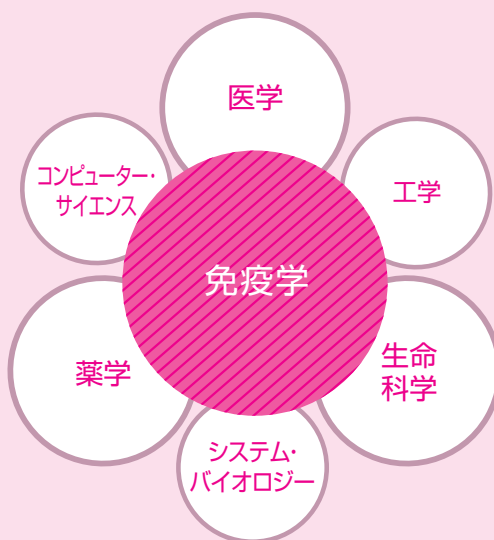
理工学部

工学部

など

◎人間の生命の維持に密接にかかわる免疫について研究する学問であるため、医学系の学問や生物学、応用化学などを修めた学生が多く集まる。中国やインドネシア、バングラデシュなど、アジアを中心に各国から留学生を受け入れている。

研究にかかわる 学問分野と研究内容



◎免疫の仕組みを解明するために不可欠な医学、薬学、生命科学の他、コンピューター・サイエンスや工学、生命を成り立たせる仕組みを解明しようとする学問であるシステム・バイオロジーとも関連が深い。

研究成果と 社会のかかわり

アレルギー性
疾患の
治療法の提案

自己免疫
疾患の
治療法の提案

新型ワクチンの
開発

など

◎免疫記憶に関する研究データを基に、免疫異常によって生じる疾患の治療法を提案している。また、新たなワクチンの開発にも貢献している。

治療への情熱と粘り強さが求められる

免疫学が求める学生像

生物に対する好奇心

病気を治そうとする強い意志

自ら道を切り開こうとするチャレンジ精神

生物の体には、不思議なことがたくさんあります。病原微生物に感染する仕組み、進化や遺伝の仕組みなどは、今では当たり前のようなことも、かつてはよく分かっていませんでした。それらが解明されたのは、医学や生物学など様々な学問分野の研究者が、謎に挑んできたからです。私が研究している免疫学でも、なぜそうなるのかが分からない現象によく出会います。例えば、記憶T細胞という免疫の中核を担う細胞があります。スギ花粉症の患者からは、スギ花粉に過剰な免疫反応を起こすという記憶が刻まれた記憶T細胞が検出されますが、それがなぜつくられるのかは分かっていません。そこで私たちは、どこかにあるはずの答えを求めて、実験を続けることになります。原動力となっているのは、生物に対する好奇心です。

実験では、狙い通りの結果が得られることはほとんどありません。マウスにどの薬品や物質を用いても、何の反応も起こらないことが続きますが、研究を前進させるには諦めずに取り組む必要があります。病気を治そうという強い意志を持ち、誰も出来なかったことを実現しようというチャレンジ精神にあふれた皆さんの挑戦を待っています。

高校生へのメッセージ

高校時代は、多くの人が人生のおおまかな方向性を決める大切な時期です。そこで、大好きなものを見付け、打ち込んでほしいと思います。大好きなことが見付かれば、卒業後の進路や社会で取り組みたいことも見えやすくなるはずですし、ものごとに熱中して取り組む経験によって、大きな達成感と自信も得られると思います。



中山俊憲 教授

なかやま・としのり 千葉大学大学院医学研究院長・教授。同大大学院博士課程教育リーダーディングプログラム「免疫システム調節治療学推進リーダー養成プログラム」コーディネーター。東京大学大学院医学系研究科博士課程修了。アメリカ国立癌研究所研究員などを経て、現職。第14回アポトジャン・アレルギー学術奨励賞などを受賞。編著に『実験医学増刊 免疫記憶の制御と疾患治療』（羊土社、共編）など。

研究を志したきっかけ

多くの謎を自分の手で 解き明かしたいと 新しい学問分野に挑戦

自然に囲まれて育った私は、子どもの頃から生き物に親しみを感じていました。そのため、図鑑を読むのはもちろん、昆虫や植物の観察にも熱中しました。高校でも、最も好きな科目は生物でしたから、大学では生物について専門的に学びたいと考えるようになったのです。進路については、理学部生物学科と迷いましたが、医学部医学科に決めました。それは、臓器や血液など、最も身近な存在である人体の仕組みを網羅的に学べることにまず魅力を感じましたし、病気を治療して社会に貢献したいという思いもあったからです。医学部医学科で学ぶ内容の中でも、免疫に特に関心を持ちました。免疫とは、病原微生物など、体外から侵入した異物を見付けて排除し、自分の身を守る機能で、人体の健康を保つために不可欠です。ただ、免疫は従来、感染症などと一緒に研究されており、免疫に特化した研究を行う免疫学は、私の学生時代には新しい

研究概要

免疫の根幹である 免疫記憶の 全貌解明に取り組む

学問分野でした。そのため、教科書は毎年のように改訂されていました。つまり、他の学問分野よりも多くの謎が残されていたのです。それを自分の手で明らかにしたいと、私は免疫学の研究を志しました。免疫が正常に機能している状態で、異物に侵入されると、それを攻撃する抗体がつくられます。抗体をつくらせる原因となる異物を、抗原といいます。抗原が病原微生物で、抗体よりも早く増殖してしまえば、病気を発症することになるわけです。免疫は、1度侵入した抗原を覚えており、同じ抗原が再度侵入すると、対応する抗体を素早くつくり、抗原を駆除します。そのため、例えば、麻疹に1度かかったり、麻疹の予防接種をしたりすれば、麻疹には2度とかからないか、かかったとしても症状が軽くなります。ただ、抗体は抗原と一対一で対応しているので、麻疹ウイルス抗体は、別の抗原を駆除できません。更に、インフルエン

ザウイルスのように、複数の型を持つ病原微生物では、型の数だけ感染する危険性が高まります。

免疫が抗原を記憶する機能を免疫記憶といい、私たちはその研究に力を入れています。例えば、免疫記憶をつかさどる細胞である記憶T細胞の実態を突き止めようとしています。免疫を主に担うのは、リンパ球内にあるB細胞とT細胞という2つの細胞で、T細胞からの指令によって、B細胞が抗体をつくります。記憶T細胞は、T細胞の一種で、他種のT細胞より寿命がずっと長いことが分かっています。だからこそ、免疫記憶は何十年も維持されるのです。

記憶T細胞がいつどのように発生するのか、なぜ長生きをするのかなどは不明です。記憶T細胞は培養器ではつくれませんが、記憶T細胞になる前段階の細胞であるエフェクターT細胞は培養でき、これをマウスの体内に移植すると、1か月程で記憶T細胞が観察できるようになります。そこで私たちは、記憶T細胞が定着したマウスを用いて、投与する薬品の種類や分量を変えるなど、様々な条件の下で実験を繰り返して

記憶T細胞の性質を観察しています。

免疫記憶の研究は、免疫の根幹を解き明かす研究なので、そのデータは多くの治療に応用できます。例えば、免疫の過剰反応によって生じるアレルギー性疾患や、免疫が本来防御する対象である自分の体内組織を攻撃してしまう自己免疫疾患は、今のところ対症療法しかありませんが、記憶T細胞の研究が更に進めば、根本的に治せるようになると思います。

なぜならば、免疫に異常な働きをさせている記憶T細胞が特定されれば、選択的にそれらを排除できるようになるからです。また、疾患に対する記憶T細胞の性質を強められれば、より強力なワクチンの開発にもつながるでしょう。医学に携わる者として、大きなやりがいを感じる研究です。

研究の成果

難治性疾患の原因を分子レベルで検討し新治療法に生かす

私たちは近年、2〜3年に1つ程のペースで、免疫記憶と密接にかかわる新たな細胞や物質、機能を発見しています。例えば、2013年には、

記憶T細胞を含めたT細胞の中にある「EZH2」という分子に、免疫の過剰反応を抑制する機能があることを突き止めました。この分子の機能が弱いと、免疫が暴走してしまうので、それがアレルギー性疾患などの要因になることは十分に考えられます。そこで、疾患との相関を把握することを急いでいます。

また、免疫にかかわる疾患の発症原因について、新たな仮説も提唱しています。例えば、T細胞の一種であるヘルパーT細胞には、1型と2型がありますが、従来は1型と2型のバランスが崩れることで、アレルギー性疾患や自己免疫疾患が起きると考えられていました。しかし、免疫記憶の仕組みを分子レベルで研究した結果、私は、1型や2型が何らかの事情で病原性に変異することが、発症原因ではないかと考えるようになりました。一朝一夕に結論は出せませんが、私の仮説が正しければ、今までにない角度から治療法を検討できるようになるでしょう。

難治の病気に苦しむ患者を1人でも多く救えるように、今後も研究を続けていきたいと考えています。

用語解説

1 病原微生物

細菌やウイルスなど、感染症の原因となる微生物のこと。

2 抗体

体内に侵入した異物を追い出すために出来る、異物への対抗物質。例えば、結核菌に対抗する抗体は、結核菌抗体という。

3 麻疹

子どもに多い、発疹性の急性感染症。麻疹ウイルスに感染して発症する。しかし。

4 アレルギー性疾患

抗原に対して抗体が過剰に反応することで生じる疾患。気管支喘息や花粉症など。

5 自己免疫疾患

自分の体の構成成分に反応する抗体やリンパ球などを持續してつくり出してしまったために起きる病気の総称。慢性甲状腺炎や溶血性貧血など。

免疫制御の基礎として 遺伝子のデータを収集

小久保 幸太さん

こくぼ・こうた 千葉大大学院医学研究院修士課程
1年。千葉県立佐倉高校卒業。



Q なぜこの研究分野に
進んだのですか

A 私は、生物学を専攻してい
た大学の学部時代に、免疫学

に興味を持ちました。それは、アレ
ルギー性疾患などが免疫の異常から
生じることを知り、自分を守ってく
れるはずの免疫が、疾患の原因とな
ることに衝撃を受けたからです。私
自身が花粉症なので、他人事ではあ
りませんでした。

一方、免疫は本来味方なのです
から、制御できるとも思いました。そ

の方法を研究したいと、私は中山教
授の研究室の門をたたいたのです。

Q 中山教授の研究室での
研究内容を教えてください

A 免疫記憶における遺伝子の
役割について研究していま

す。何らかの抗原に対する記憶を持
つ記憶T細胞、つまり成熟した記
憶T細胞の遺伝子の発現パターン
を、どの抗原に対する記憶も持たな
いT細胞、つまり未熟な段階にある
T細胞の遺伝子の発現パターンと比
較し、前者において活性化している
遺伝子を探します。成熟した記憶T
細胞でのみ活性化していた遺伝子な
ら、免疫記憶と関係がある可能性が
あるため、本当に関係があるのかど
うかを確かめられるように、私は2
通りの実験を行っています。

1つめの実験では、成熟した記憶
T細胞においてのみ活性化していた
遺伝子を、未熟なT細胞に人工的に
導入します。そして、様々な条件の
下で実験を重ね、遺伝子を導入され
た細胞の、抗原に対する反応を観察
します。抗原に対して素早く反応す
る細胞は、導入された遺伝子によっ
て免疫記憶を身に付けたわけですか

ら、その遺伝子は免疫記憶に関与し
ていることになります。2つめの実
験は、成熟した記憶T細胞でのみ活
性化していた遺伝子を、DNAから
欠損させたマウスの観察です。その
遺伝子がなくなること、何らかの
免疫が失われたり、弱められたりし
ていけば、欠損させた遺伝子と免疫
記憶との相関が考えられます。

私の研究は、免疫記憶の成り立ち
を探る基礎研究であり、このデー
タを蓄積していけば、免疫をコン
ロールする研究の土台になると期待
しています。

Q 高校生への
メッセージをお願いします

A 大学での学びでは、状況に
応じて自ら判断し、決めるこ

とが求められます。例えば、授業で
分からないことがあれば、先生に質
問したり、図書館で調べたりと、自
分で行動する必要があるのです。「そ
んなこと、信じられない」という人
には、大学のオープンキャンパスに
参加してみることをお勧めします。
模擬授業を受けたり、大学生と直接
話したりすることを通して、大学で
の学びがどのようなものか、そこで
何が必要なのか、肌で感じることに
出来るでしょう。

主体性は、すぐには身に付きませ
ん。そこで、皆さんには、高校時代
から学校の予習や復習、部活動の練
習などに、自分で工夫しながら取り
組んでほしいと思います。大学入学
後に、きっと役立つはずです。

私の高校時代

勉強と部活動の両立で 自己管理能力が身に付く

●高校時代、私は卓球部に所属して
おり、部活動が週6日ありました。練
習を終えて帰宅するのはいつも夜でし
たし、疲れてもいましたから、勉強時
間が思うように取れませんでした。そ
こで、少ない時間に効率よく勉強で
きるように、計画を立てました。例えば、
毎日学校から帰ったらすぐに机に向
かって夕食までの1時間は勉強するこ
とにし、部活動の朝練習がない日には、
本来朝練習がある1時間を勉強に充て
たのです。また、どれほど疲れていても、
その日に出された課題にはその日のう
ちに取り組むという決まりもつくりまし
た。それらを続けるうちに成績が上が
り、自分のやり方は間違っていないと
いう自信が持てるようになりました。

すべきことの優先順位を付け、時間
を管理して取り組む習慣を高校時代に
しっかり身に付けたことは、大学での
学びにも大学院での研究にも、とても
役立っています。

「一般財団法人 進学基準研究機構（CEES）」第1回記念シンポジウム開催

グローバル人材育成に向けた これからの高大接続のあり方を考える

2015年11月、「一般財団法人 進学基準研究機構（CEES）」の第1回記念シンポジウム「教育のグローバル化と高大接続」が開催された。高大接続、並びに大学入試制度改革の改革は、今後、どのような方向に進み、教育現場ではどのような実践が求められるのか。文部科学省、大学、高校の教育改革実践者が一堂に会し、これからの高大接続のあり方、更には現高校2・3年生が直面する入試改革の本質について語り合った。

高大接続や入試改革の 方向性と具体的実践を共有

シンポジウムを主催したCEESは、グローバル人材の育成を通し、日本の教育分野の発展に寄与することを目的として2015年に活動を開始した。英語力向上に関する普及・啓発活動をベースとして、入試制度を始めとした高大接続領域の研究なども進め、高校生や大学生の英語力の向上を図ったり、国際交流を促進したりする活動に取り組んでいる。第1回となる今回のシンポジウムは、グローバル人材育成に向けた高大接続や入試改革について、その方向性

と具体的な実践の共有を目的として開催された。受け付け開始から早々に参加申し込みは定員数に達し、会場は高校・大学の教職員や教育委員会を始めとした教育関係者で満席となった。

文部科学省大学振興課の塩見みづ枝課長による基調講演「高大接続改革の今後の方向性」では、高校・大学教育、並びに大学入学者選抜を一体的に改革する必要性が改めて強調された。更に、高大接続システム改革会議の中間まとめのポイントを説明した上で、改革の柱である、「高等学校基礎学力テスト」及び「大学入学者希望者学力評価テスト」（共に仮称）

の狙いと概要を解説した。

続いて、大学、高校のそれぞれ2校の実践内容が紹介され、最後に登壇者によるパネルディスカッションが行われた。



基調講演では、文部科学省大学振興課の塩見みづ枝課長が「高大接続改革の今後の方向性」について語った。

「教育のグローバル化と高大接続」プログラム

- **CEESよりご挨拶** CEES 佐藤 達也 理事長
- **基調講演** 「高大接続改革の今後の方向性」
文部科学省 大学振興課 塩見みづ枝 課長
- **大学実践** 「大学におけるグローバル化の課題と高大接続の取り組み」
大阪大 未来戦略機構 川嶋 津夫 教授
千葉大 教育・国際担当理事 渡邊 誠 教授
- **高校実践** 「高校現場における4技能英語指導」
東京都・国立お茶の水女子大学附属高校 津久井 貴之 先生
兵庫県・私立灘中学・高校 木村 達哉 先生
- **パネルディスカッション**

*シンポジウム資料を基に編集部で作成

「世界適塾入試」で多面的・総合的評価を加速

大阪大未来戦略機構の川嶋太津夫教授は、グローバル化が進展する社会の状況を概説し、英語によるコミュニケーション能力の不足など、高校・大学のグローバル教育における課題を指摘した。その上で、社会を見据えて「高大社」接続を強化する必要性を語った。「初等・中等・高等教育の接続のあり方を見直し、自ら学ぶ力を持つアクティブ・ラーナーを社会に送り出すことが強く求められている」と、川嶋教授は強調する。

力を注ぐ。「4技能育成のための英語の外部検定試験を効果的に活用したい」と、川嶋教授は話す。高校生の学びを支援する取り組みとして、科学技術への関心や意欲を持つ生徒を募集して研究活動を支援する「SEEDS」(*)が紹介された。

入試制度改革については、17年度から後期日程を停止し、「世界適塾入試」を全学部を導入。定員のほぼ1割に当たる三百数十人をAO入試や推薦入試などで選抜することを発表した。センター試験の受験を必須として一定の基礎学力を確保した上で、活動報告書を始めたとした書類審査や面接を通して選抜を行うことによつて、これまで以上に多様なバックグラウンドを持つ学生の入学を期待している。



大阪大
未来戦略機構
教授

川嶋太津夫

かわしま・たつお

「評価する要素の比重や具体的な評価方法について急ピッチで検討を進めている。社会に信頼される多面的・総合的評価の仕組みを創り出したい」と、川嶋教授は意欲的に語った。

新設の「国際教養学部」がグローバル教育を牽引

千葉大は、グローバル人材の育成に向けて、「ガバナンス」「学修制度」「プログラム」「グローバル・ネットワーク」の4本柱の改革を推進している。中でもグローバル教育の観点で注目されるのは、ガバナンス改革の一環である「国際教養学部」の新設だ。「グローバル教育における『パイロット学部』と位置付けており、

的に育成することを目指している。

同学部での新しい試みを全学に波及させていく」と、教育・国際担当の渡邊誠理事は説明する。

同学部の特徴は、文理混合の課題解決型の教育内容にある。「国際」「日本」「科学」の専門分野を混合し、アクティブ・ラーニングを積極的に展開していくことで、既存の学問分野単独では解決できない課題の発見・分析・解決の能力や発信力を、体系的に育成することを目指している。



千葉大
教育・国際担当理事
教授

渡邊 誠

わたなべ・まこと

同学部の入試は、英語を必須とする3教科が基本で、文系・理系にかかわらず受験できる仕組みが特徴だ。英語の他に、「国語・地理歴史」「理科・数学」「理科・地理歴史」など、柔軟に受験教科を組み合わせられる。更に、英語は、GTEC CBTを始めとした英語の外部検定試験の成績を利用できる（スコアによる加点・満点換算方式）。「今後、外部検定試験の利用は、全学部に広げていく」と、渡邊理事は話す。

高大接続では、千葉県内の高校とコンソーシアムを形成して高校1年生から大学教養レベルの理系教育を行う「『次世代才能スキップアップ』プログラム」、高校生を対象とした理数分野の自由研究発表会「高校生理科研究発表会」（15年は62校が参加）などを紹介した。「こうした高大接続の取り組みを入試に結び付ける仕組みを検討していきたい」と、渡邊理事は今後のビジョンを語った。

* Sekai-tekiyoku Enhanced Education for Distinguished Students の頭文字をとったもの。

高校実践1

東京都・国立お茶の水女子大学附属高校

学習の実効性を常に確認しながら指導を改善

お茶の水女子大学附属高校の津久井貴之先生は、英語の4技能の指導について、自身が課題として取り組んでいることと、今後取り組みたいことを発表した。

課題の1つとして、ペアワークやグループワークなどの言語活動が、形式的になりやすいことを挙げた。「教師自身が『何のための活動なのか』を明確にし、生徒に目的意識を持たせることが必要だ。予習や復習が万全でも、言語活動の目的を示さずに話し合わせたら、生徒の学びは深まりにくい」と津久井先生は話す。

家庭学習の指導では、「目標を設定して、学習方法の選択を体験する」「身近なところから学びのきっかけを探す」「自己表現」と『基礎的な語彙



東京都・国立
お茶の水女子大学
附属高校

津久井貴之

つくい・たかゆき

や文法の確認」を行き来する」の3点を重視している。「家庭学習の自由度を高くし、その過程や成果をきちんと確認する指導を強化したい」と、津久井先生は意欲的に語る。

ICレコーダーやビデオで授業を記録し、自らの指導を振り返ることも重視している。「自分が話す英語を客観的に聞き直すことで、話し方の癖、授業のねらいと発問のずれなどに気付き、指導の改善、自分自身の英語力向上の材料としている」と津久井先生は話す。シンポジウムでは、昨年の授業で実施したペアワークの様子を撮影した動画を上映し、「生徒は言語活動を楽しんでいたが、活動の目的が明確化できていなかったため、学習が十分に深まらなかった」と、課題を述べた。

最後に、今後の目標として、生徒自身が自分の頭で考え、学習方法を選択して取り組む活動や雰囲気をつくり、家庭学習とのつながりを深めていくことなどを掲げた。

高校実践2

兵庫県・私立灘中学・高校

「日本語で考える力」が英語で発信する力の核に

灘中学・高校の木村達哉先生は、

英語の4技能を育成する指導の基本的な方法として、「単語の変換や文の作成をクイックレスポンスで行える力」「受信力を発信力につなげる習慣」の涵養を挙げた。英単語の指導では、意味やスペリングなどの理解にとどまらず、日本語を即座に英語にして話す指導を繰り返す。「英語を話す上では、クイックレスポンスが出来る知識だけが武器になる」と、木村先生は強調する。

英文法の指導では、最初に授業での解説を通して、文法の内容を生徒に正しく理解させた後、様々な反復練習を通して知識を定着させる。続いて、アウトプットとして、学習した文法を用いた文章を数十個つくる学習などを通し、文法を「使える」



兵庫県・私立
灘中学・高校

木村達哉

きむら・たつや

状態にする。

受信力を発信力につなげる習慣の涵養では、「読む・聞く」を「書く・話す」にリンクさせる指導に力注いでいる。例えば、リーディングの授業で、著名人のスピーチを和訳しただけで終わるのは従来型の指導であるが、自身の授業では、和訳を見たら英文が自然と発信できるようにするまで、ひたすら英文を読み込む。スピーキングの指導では、例えば、「景気が低迷し続けている原因と対策」というテーマで英語のプレゼンテーションをさせる。日本語で考えるのも難しいテーマのため、日本史の教員とチーム・ティーチングをして、自分の意見をしっかりと考えさせてから英語で発信をするトレーニングを積む。「日本語で考えられないければ、英語でも考えられないのは当たり前前のこと。英語の授業を通して、英語力はもちろん、考える力も高め、品格があり、意識の高い人材を育てていきたい」と、今後の抱負を語った。

大学入試改革に関心が集まる

◎多面的・総合的評価について

初めに、大阪大の川嶋教授が、「基礎学力が十分に定着しているかを確認することが重要だ。基礎学力を土台に、高校時代の活動の成果などを上乗せして評価する仕組みを検討する必要がある」と、課題を指摘した。

学力試験が課されない場合、生徒の負担が軽くなるかもしれない。その点について灘中学・高校の木村先生は、「現状でも、基礎学力が十分に定着していないまま高校や大学に入学できるのは問題だと思う。その状況が、多面的・総合的評価の導入で強まることを心配している」と述べた。

それに対し、千葉大の渡邊理事は、「知識や技能をいかに再構成して表現するかを問うのが多面的・総合的評価の狙いだ」と、従来の学力試験で問われた知識や技能は、あくまでも土台として必要であることを説明した。同様に、川嶋教授も、「基礎学力をきちんと身に付けた上で、秀でていたりユニークだったりする点を

評価したい。個人的な考えを言うと、受験対策が難しい選考システムをつくることが理想だ」と語った。

一方、お茶の水女子大学附属高校の津久井先生は、「基礎学力の定着でつまずくポリュームゾーンの生徒に、思考力・判断力・表現力などの知識や技能を活用する力をどのように付けさせるか」という課題を示した。渡邊理事は、「どの学力層の生徒も、『自分も話さなくては』といった姿勢になりやすいアクティブ・ラーニングは、ポリュームゾーンの底上げにつながりやすい」と考えを述べた。

参加者全員による討議では、基礎学力の定着がおろそかにならないように、アクティブ・ラーニングの定義とその効能を、今後慎重に見極めることが大切であると話し合われた。

◎英語の4技能育成について

まず、木村先生が「英語力を高める上で、日本語がうまく使えない、思考力が低い、また『理系だから地歴公民は不要だ』と語る生徒がいる

など、学力や学習分野の偏りが壁になっている」と問題を提起。同様の課題意識があるという津久井先生は、「プレゼンテーションでは、単に事実を述べるだけで、聞き手を意識した発表が出来ない。英語と他教科・科目の学習内容を結び付ける授業・教材の研究を強化すべきだ」と述べた。

一方、大学の英語教育では、多様性がキーワードだと川嶋教授は話す。

「入学時点の英語力は非常に多様で、大学は各レベルに対応する必要を迫られている。また、文系は英語の論文を精読して内容を把握する力、理系は英語での論文作成やプレゼンテーションの力がより重要になるなど、求められる英語力の多様化への対応も今後の課題だ」

◎質疑応答

高校教員から「最近、ある大学から『当面、入試方法を変える考えはない』と言われ、生徒への指導内容で悩んでいる」という質問があった。それに対し、渡邊理事は、「大学によって事情は異なるかもしれないが、千葉大は本気で入試のあり方を変えたいと考えている。今後も、後期日程を特色ある入試にするなど、多面的・総



パネルディスカッションの様子。

合的評価を充実させたい」と語った。川嶋教授も、「大阪大では、17年度に後期日程を停止し、定員の約1割を多面的・総合的評価の入試に変える。このことから、大学の本気度を感じていただけるはずだ」と答えた。

大学教育や入試改革への財政支援に関する質問もあった。文部科学省の塩見課長は、財政支援の必要性を十分に認識しており、16年度の概算要求には、大学教育を充実させる事業や入試改革の取り組みを支援する事業などを盛り込むと説明した。

最後に、塩見課長が「高校生や大学生が学びがいを感ずる教育に変えることが何より大事だと、改革の意義を改めて感じた。今後も文部科学省として、教育現場への支援を強化していきたい」と締めくくった。

「広島創生イノベーションスクール」プロジェクト

地方創生のプロジェクト学習を通して 課題発見・解決学習と異文化間協働を推進

広島県は、2014年、子どもたちの主体的な学びの充実に向け、「広島版『学びの変革』アクション・プラン」を打ち出した。そのリーディングプロジェクトとなるのが、「OECD日本イノベーション教育ネットワーク」の広島クラスターとしての活動だ。広島県教育委員会学びの変革推進課の寺田拓真課長から活動の狙いや進捗状況を聞くと共に、参加校の1つである広島県立呉三津田高校の実践を紹介する。

「たのしんどい」学びを通して
主体的な姿勢を生み出す

「広島版『学びの変革』アクション・プラン」策定には、2つの問題意識があります。1つは、県内高校生の学力の伸びが芳しくないことです。その改善には、学習の「量」を増やすのではなく、従来とは違うアプローチで「質」を変える必要性を強く感じています。もう1つは、教育の現状への危機感です。未来を背負う若者を育むのが教育であり、本来、社会の一步先を進んでいるべきですが、今は逆に一步遅れている状況です。先が見通せない時代を生きるために、

高校時代から答えがない課題に取り組む経験を積むべきだと考えます。

広島版「学びの変革」アクション・プランでは、今、注目されている「アクティブ・ラーニング」という言葉をあえて用いています。主体的な学びは、アクティブ・ラーニングを「させる」ことが目的ではないからです。「学ばずにはいられない」「学びたくてたまらない」という状況の中で、生徒や教師が自ら学びをつくり上げていく学習を支援していきます。主体的な学びの柱は「課題発見・解決学習」と「異文化間協働活動」で、そのリーディングプロジェクトが、県内の高校1・2年生が「広島」をテーマにプロジェクト学習に取り組む「広島創生イノベーションスクール」(実施期間3年間)です。参加は全13校、59人です。各校3〜6人が1チームとなつて活動し、近隣の3、4校が集まる「エリアスクール」、全参加校が



広島県教育委員会事務局
教育部
学びの変革推進課課長
寺田拓真
てらだ・たくま

2004年、文部科学省入省。大臣官房、スポーツ・青少年局、生涯学習政策局政策課専門調査官などを経て、14年4月、広島県教育委員会教育改革推進課長に。15年4月から現職。

マにプロジェクト学習に取り組む「広島創生イノベーションスクール」(実施期間3年間)です。参加は全13校、59人です。各校3〜6人が1チームとなつて活動し、近隣の3、4校が集まる「エリアスクール」、全参加校が集まる「全体スクール」で情報共有や議論をしながら活動を行います。そこで目指すのは、「たのしんどい」学びです。学びは、楽しいだけでは遊びで終わってしまい、しんどいだけでは長続きしません。その両方が

ある時に、おのずと主体的な姿勢が生まれるのではないのでしょうか。

グローバル人材に欠かせない コンフリクトを乗り越える力

2015年度は、フィールドワークやインタビューを行い、課題調査と課題解決の方向性を検討しながら、「広島」に向き合いました。16年度以降は、解決策の実行に移ります。

また、生徒の視野を更に広げるため、ハワイで広島の魅力などを紹介する「グローバルスクール」や、海外パートナースクールの生徒を招いて協働活動を行う「グローバルスクール」も行う予定です。これらの活動を通して、地域と世界の共通点や相違点に気づき、OECDの「Education2030」でも議論されているようにコンフリクト（*1）を乗り越え、課題を解決する力の育成を目指します。更に「グローバル」ローカルに加え、自分事として課題に関与する「インディビジュアル」（*2）も重視します。

当初は、生徒から「大人でも答えの出せないことを自分たちが考えられるわけがない」という声が聞かれま

した。また、活動後の振り返りでは、大人が求めている答えを意識したような優等生的な内容が目立ちました。しかし、活動が進むにつれて、生徒の姿勢は変化してきました。

例えば、ある生徒は、アンケートに「わくわくしているけれども、同時に怖くなった」と書きました。「自分」が広島の未来にかかわっていると自覚したからこそ、怖いという感情が芽生えたのでしょうか。別の生徒は、「先生に言われたことをやる方が楽だ。でも、やらなければいけないという気持ちになっている」と語りました。生徒が本気になり、「たのしんどい」学びが生まれつつあると感じます。

一方、課題もあります。例えば、生徒はコンフリクトを極度に避ける傾向が見られます。協働はコンフリクトを受け入れることから始まりますから、今後もそれが生じるような状況を意図的につくりたいと思います。

学習の過程を記録させ、「羅針盤」として活用

参加校間の交流には、「Classi」（*3）を活用しています。生徒は、Classiに学習過程を記録して情報を

共有したり、メッセージを送り合ったりして、コミュニケーションを深めています。今後は、自動翻訳機能も活用しながら、海外のパートナースクールとの交流も深める予定です。

従来の学びが、教師が運転する電車に生徒が一斉に乗り込んでゴールに向かう「電車型」だとしたら、我々が目指す学びは、生徒個々が自分で設定したゴールに向かって運転する「自動車型」です。それぞれ目的地や経路が異なる中で前に進むためには、現在地とそれまでの経路、目指す方向を常に確認し、他の生徒と情報を共有して協力することが欠かせません。そうした羅針盤としての役割が、Classiにはあります。加えて、生徒の思考過程が可視化されるため、教師も生徒一人ひとりに応じた働き掛けがしやすくなっています。

何より、これまでの活動を通して、生徒以上に教師の変化が大きいことに驚いています。指導法を工夫するうちに、教師自身も生徒と共に学ぶアクティブ・ラーナーになったのでしよう。今後も、より主体的な学びを追究し、得られた知見を各校での指導に還元していきたいと思います。

識者の視点

学びの過程の可視化が 多面的・総合的評価に結びつく



静岡大
大学院教育学研究科
准教授
益川 弘如
ますかわ・ひろゆき

広島創生イノベーションスクールでは、Classiが有効に機能しています。各校内の情報共有や交流の出発点として、エリアスクールや全体スクール、更に海外とのつながりを生み出し、多層的なコミュニケーションを形成しています。他者の活動を見て、自分たちに足りないことを振り返り、テーマを設定し直すなど、リフレクション（*4）を支援する動きもあります。

更に、Classiは評価のあり方も大きく変えるでしょう。従来、知識はテスト、コンピテンシーはアンケートなど、それぞれ独立して測定していました。また、テスト実施時点で力を測るため、学びの過程は評価されませんでした。

そこで、どのような学びの過程を経て、どんな成果を生み出したのかを記録すれば、一人ひとりのコンピテンシーの成長過程を評価でき、生徒の成長を前向きに追っていくことが可能になります。つまり、これまでとは逆の発想の評価や授業が可能になり、多面的・総合的な評価へとつながっていくことも出来ると考えています。

* 1 conflict。（意見、利害などの）食い違い、不一致、対立。 * 2 individual。（集団・社会に対しての）個人。
* 3 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。 * 4 reflection. 熟考。熟慮。

実践事例

広島県立呉三津田高校

ICTを活用して校内外で考えを深め合い
答えのない課題に粘り強く取り組む多くの出会いを体験させて
内向きの発想を変えたい

広島県立呉三津田高校は、近年、グローバル人材の育成を目標に掲げて教育内容を見直してきた。しかし、そうした思いとは逆に、生徒が年々内向きになっているという課題意識が、広島創生イノベーションスクールに参加する動機となった。小路口真理美校長はこう述べる。

「生徒には、校内で目立ちたいという思いはあっても、校外で活躍することには消極的です。しかし、グローバルに活躍する力を育むためには、自分の中に多くの他者を取り込むことが必要です。なぜなら、『他者あつての自己』だからです。そのため、国内外での他者との多くの出会いが期待できる広島創生イノベーションスクールに参加することで、現状に風穴を開けたいと考えました」

参加メンバーには、予想以上に多くの生徒が手を挙げた。生徒の自主性や能動性を尊重し、あえて教師は口を出さず、生徒同士が「どれほど参加したいのか」「活動を通して何をしたいのか」などを話し合って、参加メンバー6人を決めた。

教師はファシリテーターに徹し
生徒が気付く瞬間を待つ

プロジェクト学習のテーマは、「地域創生」だ。答えがないばかりか、何から取り組めばよいのかすら見当が付かない状態に、生徒は苦しんだ。同校で本事業を担当する教務主任の岡寄友一先生は次のように振り返る。「最初は、『このような活動をしたら、こういう答えが出るはず』と、まず着地点を見つけようとする思考からなかなか抜け出せませんでした。『答えが分かっていることに、3年間も掛けて取り組むのか』などと投げ

掛けをしていくうちに、答えが見えない状態からスタートすべき活動なのだと気付いたようでした」

当初、生徒たちの議論は、表面的なレベルで堂々巡りしてしまい、なかなか深まらない様子が見られた。しかし、岡寄先生は、歯がゆさを感じながらも考えるヒントを出すにとどめ、議論の内容にまでは踏み込まなかった。

「生徒の議論が深まらないのは、メタ認知の力が不十分なため、今までに何を話し、それを踏まえて、これから何を話し合うべきなのかを考えられないからだと感じました。教師が議論を引っ張ったら意味がありませんが、放っておくと何も進みません。私自身も答えを持っていないため、議論の方向性がおかしいなど感じた時には、『なぜ、そう思うのか』などと質問することで軌道修正させました。それを繰り返していくと、生徒がはっと気付く瞬間があります。その積み重ねにより、議論が徐々に深まってきました」(岡寄先生)

最初は地域の課題について、教室で延々と話し合っていた生徒たちが、「外に出なければ何も分からない」と



広島県立呉三津田高校
岡寄友一
おかさき・ともかず
教職歴20年。同校に赴任して10年目。教務主任。



広島県立呉三津田高校
校長
小路口真理美
しょうじくち・まりみ
教職歴34年。同校に赴任して1年目。

気付いた瞬間があった。それ以降は積極的に外に出るようになり、「地域の中で大切にしたい人を探す」というミッションでは、自分たちで市役所に相談に行き、職員に紹介された人に話を聞きに行くことを決めた。訪問を依頼した後に、その人が学校から非常に遠い所に住んでいることが分かり、話を聞くまでに手間が掛かったが、「それもまた貴重な経験」(岡寄先生)と受け止めている。

Classiに考えや気付きを記録し、メンバーの思考を可視化

チーム内の連絡や情報交換、考えや気付きの共有には、Classiを活用している。タブレット端末は学校外に持ち出せないが、スマートフォンからでもログイン出来るため、家でも



メンバー6人は、タブレット端末をほぼ毎日活用。他のメンバーとも共有するため、しっかり考えて記録するようになったという。

閲覧や書き込みが可能だ。

メンバーは毎週のリフレクションをClassに記録。各自の振り返りを共有して翌週の活動に生かす。更に、自身の思考過程を振り返ることで気付くことも多いという。2年生の中野萌さんは、「過去の活動内容だけではなく、その時に何を感じたのか、どのような反省をしたのかも記録されているため、プレゼンテーションの資料作成などに役立ちます」と語る。

他校との交流を通して思考の広がりも見られる。2年生の内野弘毅さんは、「他校の活動内容もリアルタイ

ムに共有できるので、自分たちの計画を客観的に見直したり、迷った時の参考にしたりしています」と話す。

教師にとっては、生徒の思考過程を把握しやすいことが大きな利点だと、岡寄先生は語る。

「生徒の書き込みを時間軸で見ると、成長過程がよく分かります。プロジェクトの進捗状況にも目が行き届きますし、行動も把握できるため、安全管理にも役立っています」

イノベーションスクールの知見が他の教育活動に波及

本事業の実践は、同校の他の教育活動にも影響を与えている。岡寄先生は、担当する英語の授業のあり方を見直し、思考力の育成を狙いとして、答えがない課題を取り入れるようにした。例えば、ノーベル平和賞受賞者のマザー・テレサについて、批判的な内容の英文も読ませた。そして、「批判があっても偉大だと思えるか。思うのなら、英語でどう擁護するか」という観点でグループ討論をさせ、全体発表をした後、個人で英文にまとめるという活動を行った。

今後は、イノベーションスクール

を通して得られた指導方法などを、「総合的な学習の時間」での探究活動などにも応用したいと考えている。

また、同校は、15年12月にアメリカ・カリフォルニア州の高校と新たに姉妹校の提携を結んだ。今後、姉妹校とのプロジェクト学習を展開する計画だと、小路口校長は話す。

「交流活動にとどまらず、コンフリクトを乗り越えるようなプロジェクト学習を行いたいと考えています。本気になれるきっかけを与えれば、生徒は内向きから外向きに変わるという手応えをイノベーションスクールの活動を通して得られたので、姉妹校提携の話が持ち上がった際には、前向きに考えられました」

イノベーションスクール参加に端を発する学校改革は、大学入試改革も意識していると、小路口校長は語る。

「教師が答えへと導くのではなく、様々な他者と出会わせることで、考えを深めたり、認識を改めたりする学びを校内にもっと広げていきます。それにより、グローバル人材として必要な資質が身に付くと共に、生徒が自信を持つて語れる活動歴や学修歴につながると考えています」

メンバー6人の声

◎自分が何も分かっていないことが分かりました。まだ答えは出ていませんが、地域創生を出発点として生きる意味を考えています。

(2年生 内野弘毅さん)

◎私には、何事にも安全策を考えて行動する傾向がありました。が、何度も失敗する中で、「失敗は成功のもと」という言葉の意味がよく分かりました。

(2年生 中野萌さん)

◎頭で考えるだけではなく、行動して考えることの大切さを実感しました。もともと堂々と発言し、メンバーと充実した議論が出来るようになりたいです。

(2年生 坂本瑠季さん)

◎仲が良い人たちだけで集まるのではなく、出来るだけ多くの人に話しかけ、多様な意見を取り入れたいと考えるようになりました。

(2年生 茅本久生さん)

◎常に時間を意識して行動する大切さを知りました。この活動以外でも、「いつまでに何をするか」を意識するようになりました。(1年生 谷凌介さん)

(1年生 中畑希さん)

互いの学びを深め合うアクティブ・ラーニング

12月号の特集を読み、アクティブ・ラーニングで効果を上げるためには、発問構成の周到さと力量が求められるのだと感じた。福岡県立小倉南高校の大神弘巳先生が重視すること、生徒に経験させる手法に共感すること、互いに学びを深め合うことは有意義だろう。アクティブ・ラーニングは単に仲良しになるための学習ではなく、意見や考えの違いから、新たな気づき、価値、発想が生まれる学習ではないだろうか。

【徳島県・匿名希望】

生徒の関心を学力向上にどう結び付けるかが鍵

12月号の特集で重要な指摘だと感じたのは、座談会で片山学園中学・高校の森内梨絵先生が課題として挙げていた、「アクティブ・ラーニングを取り入れた授業で高まった興味・関心を、入試に必要な学力の向上へどうつなげるか」という点だ。それこそが高大接続改革の鍵であり、大学入試のあり方が問われていると言えるのではないか。

【愛知県立稲沢高校・林広志】

「教えること」は「コミュニケーション能力」の育成にもつながる

12月号「ハートをこがせ！」の石川県立門前高校の「学習サポーター」の取り組みは、教える高校生にとっても有益だ。米沢裕太先生が言われた通り、高校生のアウトプット能

Reader's VIEW

Volume 6

読者のページ

読者の先生方からのご意見を紹介します

力やコミュニケーション能力の育成につながる取り組みだと思う。これは、入試を突破する力の育成にもつながるだろう。

【岡山県立岡山操山高校・青山聡】

新しい活動の定着は教師の負担軽減がポイント

12月号「指導変革の軌跡」の福岡県立大川樟風高校の記事を読み、ICT活用の教員研修では、正規の研修を増やさず、ミニ研修会を不定期に実施するという手法を採っていた点に、「なるほど」と膝を打った。新しい取り組みを校内に根付かせるための導入時のポイントとは、この辺りにあるのかもしれない。

【滋賀県立草津東高校・堀浩司】

英語力の育成が地方活性化に結びつく

12月号「半歩未来を考える教育オピニオン」は、地方の教員がよく分かっていると思われる「グローバル人材とは何か」について噛み砕いて説明されており、更に、そのような人材をいかに育むかという具体策を知ることが出来た。学問を幅広くそろえて地元学生の需要に応えることは地方の大学にとって大切だと思いが、長崎大多文化社会学部のように、特色ある大学・学部が地方の活性化に結びつくのだと感じた。

【富山県立富山高校・樋掛雅則】

教師川柳

厳冬に花開き実る日を待ちて

福島県・臥煙

『VIEW21』高校版はウェブサイトでもご覧いただけます！

本誌の最新号、及びバックナンバーは、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトで公開しております。誌面のPDFや「改良！指導ツール ピフォーアフター」の図版もダウンロードできます。ぜひご利用ください。

詳しくは

VIEW21 高校版

検索

<http://berd.benesse.jp/magazine/kou/>



編集後記

◎特集で取材した岩手県立花巻北高校は、可能な限り教師自らが生徒を支える「自前主義」を大切にされていました。これは一見、カリキュラム・マネジメントの観点の1つ、「教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること」に相反します。しかし、外部資源の活用は手段であり、それが目的化するような状況に陥らないためにも、まず、自校の教育目標に照らし合わせて、教師自らが考え、実践し、その上で目標達成の手段の1つとして外部資源を活用することが「自前主義」の背景にあるのだと思いました。(廣田)

VIEW21 2月号 Vol.6

2016年2月12日発行

発行人 山崎昌樹
編集人 春名啓紀
発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所
印刷製本 凸版印刷(株)
編集協力 (有)ペンダコ
執筆協力 中丸 満、二宮良太、長谷川敦
撮影協力 荒川 潤、川上一生、谷口 哲、ヤマガチイキ
イラスト協力 伊藤美樹

VIEW21編集部
〒163-0411 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング13階

©Benesse Corporation 2016

VIEW21

2016
April
4月
Volume 1

次号は
4月8日発行(予定)
『VIEW21』高校版は
年6回の発行です

COVER STORY

教師と生徒の肖像

新たな自分に

表紙の学校 福岡県立東筑高校 辻本貢士先生

自らを「イベンター」と言う辻本貢士先生。3年前に進路指導班主任となってから、様々な進路学習を企画してきた。京都大のアメリカンフットボール部監督の講演会、東京大の有志団体によるセミナー、生徒たちが将来について語り合うワークショップ、そして、近隣校と連携して超難関国立大志望者の合同学習会も開いた。「高校3年間は、生徒が自分でも意外な可能性を見つけ、大きな一歩を踏み出す時期です。出来るだけ多くの人と出会い、多様な価値観に触れてほしいと考えています」と語る。「生徒が生き方を考えられるような場を見つけよう」と張り巡らしたアンテナにピンと来たら、自ら足を運び、直接交渉する。新しい取り組みにはきちんとした段取りが欠かせないが、「生徒の反応が楽しみで、いつもわくわくしながら準備しています」と笑う。

数学の授業では、解答を板書した生徒に答えを出すまでの過程を説明してもらうなど、生徒とコミュニケーションを取りながら解説していく。「自分にならぬ着目点での解き方が分かり、考え方の幅が広がった」「ライバルには負けられないと思って集中できる」と、生徒に好評だ。添削指導では、簡単には正解を教えない。誤答には「諦めるな!」と添え、正解した友人に質問してでも自力で解くように促し、それでも解けなければ「ちょっとおいで」と個別に支援する。また、放課後に数学オリンピックの問題に挑むゼミを開講したところ、口コミで評判が広まり、学年中の数学の猛者が集結。好きを極めた生徒の中には、超難関国立大の数学科に進学する者も現れた。

辻本先生は生徒たちに語り掛ける。「新しい自分に会いに行こう。先が見えずに不安かもしれないけれど、一緒に挑戦しよう。登った先のステージから見える景色は素晴らしいから」。

VIEW21

ビュー21 高校版 Volume6 2016年2月号

2016年2月12日発行/通巻第356号 発行人 山崎昌樹 編集人 春名啓紀 発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所
©Benesse Corporation 2016

お客様
サービスセンター

【フリーダイヤル】0120-350455

受付時間 月～金 8:00～19:00/土 8:00～17:00 (祝日、年末・年始を除く)

株式会社ベネッセコーポレーション岡山本社 〒700-8686 岡山市北区南方3-7-17